

ロリでシヨタで30代の男の娘は好きですか？(FGO編)

とんこつラーメン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

こっそり、もっちーを復活させます。

以前のようなアンチを徹底排除するために、この作品は前とは違う原作で、限定公開にします。

完全に気紛れで書いているので、更新速度は非常に不安定です。

それでもいいのならば、好きに読んでいってください。

## 目次

### プロローグ

こんな見た目でも、私は立派な大人です	1
この出会いは必然である	11
二人の主人公	19
説明会って面倒くさい	30
鳴動する天文台	40
緊急非常事態	49
特異点F 炎上汚染都市 冬木	
燃える街と後悔の記憶	59
合流、そして……	69
英霊召喚	80
聖杯戦争	88
セイバーともっちー	98
対英霊戦	107
また会おうな	115
魔術師の英霊	124
回り道こそが最短の道である	133
堕ちた弓兵	142
灼き尽くす炎の檻	151
聖剣VS聖剣	159
こんな事もあるうかと	170
Grand Order	183
死亡フラグをぶっ壊せ!	193
未来を取り戻す物語	204

『運命の夜』から来た者達①	213
『運命の夜』から来た者達②	221
胃袋を掴まれました	231
幕間 もっちーとサーヴァント達	240
第一特異点 邪竜百年戦争オルレアン く救国の聖女く	249
予兆	277
百年戦争の地へ	261
フランスへ行こう	268
峰打ちの定義ってなんだっけ？	277

## プロローグ

こんな見た目でも、私は立派な大人です

一人しかいない喫煙室にて、オレは煙を吹かす。

こんな安物の煙草じゃ、ちつとも吸った気にはなれないけど、それでも何も無いよりはずっとマシだ。

「ふう〜……」

なんで、オレはこんな場所にいるんだろうか。

同じことを、これまでに幾度となく自分に問い質してきた。

ここに来てから、既に結構な年月が過ぎた。

少しだけ昔を懐かしんでしまうのは、オレがそれ相応に歳を取った証拠だ。

「皆さん揃って仕事熱心だこつて」

自分には大きすぎる椅子に座り、脚をブラブラとさせながら、自分の吐いた煙で充満する喫煙室を見渡す。

今はオレ以外に誰もいないここだが、休憩ともなれば色んな奴がやってくる。

ベリルやデイビットなんかがいい例だ。

性格に癖はあるが、あいつらは決して嫌いじゃない。

だって、オレがこうして喫煙してても全く文句とか言わないから。

逆に、ペペロンチーノやオフエリアはいつも『タバコはやめろ』って言うってくる。

なんでも、この見た目で煙草を吸う姿を見るのは、非常に心臓に悪いらしい。

余計なお世話だ。オレだって、なりたくてこんな姿で生まれたわけじゃない。

カドックは嫌そうな顔をしてこつちを遠巻きに見てるし、キリシユタリアに至っては完全にオレの事を子供扱いしてやがる。

こつちの方がお前なんかよりも、ずっと歳上なんだっつーの。

唯一、ヒナコだけは何も言わないでいてくれる。

まあ：それは、オレとアイツがお互いに誰にも言えない秘密を共有しているからだろう。

流石に、喫煙室から出た直後に会うと、問答無用で消臭剤を振りかけてくるけど。

「ん？」

ボケくつと考え事をしていると、喫煙室の扉を叩く一人の男がいた。

怪しさ全開の顔に、緑の帽子と服を着ている男。

オレとは色んな意味で腐れ縁な奴だ。

チヨイチヨイと手招きをしてくるので、無視するわけにもいかず、仕方なくここから出ることに。

まだ吸い始めたばかりの煙草を灰皿に押し付けてから火を消し、入り口まで歩いていく。

「望月博士。こんな所にいたのかね」

「オレが煙草を吸ってちや悪いのかよ、レフ」

「そうは言っていないがね。だがしかし、ちゃんとして欲しいと思うのは事実だよ。君は間違いなく、この『人理継続保障機関フィニス・カルデア』の大事なメンバーの一人なのだから」

「それは、うちのオヤジとマリスの野郎がオレに何も言わずにここへと連れてきたからだろうが。事実、すぐにここを出て行つたしな」

「けど、君はまた戻ってきた」

「オヤジに騙されてな……！」

あの時の事は、今思い出しても腸が煮えくり返りそうになる……！  
何を思ったのか、父さんと母さんは、実の息子であるオレに対して、恐ろしく強力な睡眠薬（シロナガスクジラですら一発で昏倒するレベル）を無理矢理に投与して、眠らせたうえでここに強制連行しやがった。

確かに、オレに対して普通の睡眠薬じゃ微塵も効果は無い。

どういうわけか、薬物に関しては異常なまでの耐性があるからな。

両親から受けた薬だって、普通の人間なら即死しててもおかしくない代物だ。

逆を言えば、それぐらいでもしないとオレを気絶させることすら出来ないって事なただけだな。

全く：嫌な部分だけ遺伝しちまったよ。

「で、何の用で来たんだよ？ 煙草を吸わないお前がここに来たって事は、純粹にオレを呼びに来たんだろ？」

「おっと、そうだった。オルガが君の事を呼んでいたよ」

「あいつが？ 分かった。ったく：そうならそうと、最初から言えつての」

「悪い悪い。君と一緒にいると、不思議と話し込んでしまう」

「なんじゃそりゃ」

意味わからんわ。

心の中を覗かせないのはお互い様だが、それを抜きにしても、こいつは時計塔にいた頃から微塵も信用してない。

なんて言えばいいんだろうか：自分でも非現実的だとは思うけど、『勘』のようなものが『この男だけは絶対に信用するな』と言っているのだ。

うちの父親も、こいつと会う時だけは目を鋭くしていたしな。

「彼女なら、自室にいるよ」

「そーか」

会議室や所長室じゃないって事は、何かプライベートな案件か？

まあいい。実際に会ってから本人に直接確かめればいいだけの話だ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

望月鞠絵。年齢35歳。

世界最高峰の頭脳を持つ超天才科学者である『望月陸奥守』むつのかみと、同レベルの頭脳を誇る生物学者『望月京子』との間に生まれた一人息子。容姿だけならばまるで、就学前の幼女にしか見えないが、その中身は両親顔負けの超絶的な頭脳と身体能力を秘めている。

その能力故に、前所長である『マリスビリー・アムスファイア』の助手を務めていたこともあり、科学者としてだけでなく、魔術師としての実力も推して知るべきである。

あのマリスビリーの『一番弟子』であつたキリシユタリアでさえも、望月博士には全幅の信頼を置いている程なのだ。

20代の頃は時計塔にて講師を務めていた経験もあり、その際にマリスビリーの娘であり、現在のカルデア所長でもある『オルガマリー・アムスファイア』とも知り合っている。

というか、オルガマリーは彼の元教え子なのだ。

だからこそ、普段は他の所員達には辛辣な彼女も、彼だけには最大級の信頼と信用を寄せて、素の表情を見せている。

因みに、彼の両親はこのカルデアの創設時の数少ないメンバーであり、私が造った『近未来観測レンズ「シバ」』の製作を手伝ってくれた事もある。

それだけではなく、『地球観測モデル「カルデアス」』の製造にも一枚噛んでいて、それ故に子供である望月博士もこの組織とは深く繋がっている…のだが。

「彼は些か、やる気が欠けている節があるな……」

それが『我々』を騙す為のポーズなのか、それとも素なのかは不明だが、それでも……。

(お前と、お前の両親の存在は非常に危険だ。お前がこのまま何もしないのであれば、それでよし。だが、お前が『我々』に牙を向こうとしたならば、その時は……)

容赦なく、その命を貰う事としよう。



・  
・  
・  
・  
・  
・

気心の知れた元教え子とはいえ、あいつも立派な女性である以上はマナーとして入室前のノックは忘れない。

つーわけでコンコンってな。

「入るぞ〜」

ノックはした。でも返事が無い。

つまり、これで何か事故的な事が起きても、オレには全く非は無  
いって事になる。

だから、遠慮なく部屋の扉を開いた。すると、いきなりオレの視界  
が何者かによって防がれてしまった。

「ぜんぜい〜!」

「……………」

いきなり抱き着いてきたのが、前所長の一人娘でもある若き元所長  
のオルガマリーだ。

前々から思っているけど、オレの前でだけ性格が変わりすぎじゃな  
いか?

もしかしてとは思うけど、まさか二重人格の類じゃあるまいな?

「色々と言いたいことはあるが、まずは離れろ。普通に苦しい。それ  
から、何の前触れも無くいきなり抱き着いてくる癖は治せ」

「ずびばぜん…………」

泣いているのか、完全に鼻声になってやがる。

服に鼻水とかついてないよな?

「で、どうした? 何か大事な用でもあるのか?」

「そうだった! 聞いてくださいよ先生!」

そこから出るわ出るわ、所員達に対する愚痴の数々が。

この齢で所長なんて地位についてしまい、かなり無理をしているせいか、どうも他の連中からの評判は良くない。

まあ……普段のオルガの性格を考えれば、無理も無いんだけどな……。

「それでもって、ロマニが言うんですよ！ 『君はもう少し、肩の力を抜いたほうがいい』って！ いつもヘラヘラとしてるアンタにだけは絶対に言われたくはないってのよ!!」

「そうかそうか。それは大変だな〜」

基本的に好きな事さえ出来れば大満足なオレにとって、他人の愚痴を聞かされるのは普通に嫌だ。

だから、こんな時は基本的に右から左に聞き流すように心掛けている。

「つーか、なんでお前はいつも、二人つきりになるとオレの事を後ろから抱きしめる？」

「だって……先生って凄く良い匂いがするし、プニプニしてて可愛いし……」

良い匂いも可愛いも、昔からめっちゃ言われ慣れてるから、今更何も言うつもりはないが、それでも、オレはオルガの抱き枕になった覚えはない。

「もう少しだけ……このままでいてもいいですか……?」

「好きにしろ。どうせ、今のオレはただの暇人……」

『暇人だから』と言い掛けた所で、オレの手作り特製超高性能スマホ（非売品）に通信が来た。

このスマホ、実はただの携帯じゃなくて、このカルデアの通信機器とも繋がるようになってる。

他にも暇潰しに色んな機能を詰め込んだ結果、二度と同じ物を作れない程にとんでもない代物になってしまった。

それを言った時のレフの引き攣った顔は今思い出しても爆笑ものだ。

「もしもし?」

『もしもし?』 ちよつとこつちに来てほしいんだけど、今はどこに

いるのかな?』

「オルガの部屋だよ」

『おやく? もしかして、お邪魔だったかな?』

「ンなわけあるか。今行く。ちよつと待ってろ」

『はいは〜い。別に急がなくてもいいからね〜』

「うっさい。令呪使うぞコラ」

『それじゃ〜ね〜』

「無視すんな」

ちつ…! 一方的に切りやがった。

「そんな訳だから、ちよつくら行つてくるわ」

「え……?」

呆けるオルガの腕を振りほどいてから、オレは部屋を出ることに。退室して扉が閉じた瞬間、中から大きな叫び声が聞こえような気がするが、敢えて聞かなかったことにする。

「ちよつとは空気を読みなさいよね!! あのバカサーヴァント!!!」

・  
・  
・  
・  
・  
・

カルデア本部の端の方に存在する『工房』。

ここに、さつきオレを呼んだ張本人が待っている。

今回はノックなんてことはせずに、普通に中へと入っていく。

室内には、無駄に派手な服を着た一人の美女がいた。

「来たぞ〜」

「おっと。仮にもレディの部屋なんだから、ノックぐらいはした方がいいんじゃないかな?」

「一体どこにレディがいるって?」

「目の前にいるじゃないか」

本来は何気ない普通の部屋だったが、『コイツ』が来てからはこの部屋は奴の『工房』へと魔改造され、今では様々な機器や道具などが並べられている。

立場が立場故に優遇されても不思議ではないけど、だからと言ってここまでするか普通?

少しは遠慮ってものを知らないんだろうか?

「寝言は寝てから言え。あ、英霊だから寝ないのか」

「相変わらずだね、君は」

「それに関してはお互い様だろうが、キャスター。いや……」

「レオナルド・ダ・ヴィンチ」

「君が私の事を真名で呼ぶなんて珍しいね…『マスター』」

「気にするな。単なる気紛れだ」

「出来れば、これからもそっちで呼んでほしいかな？」

「気が向いたらな。で、どうしたんだ？」

「うん。実はね……」

そうだ。まだオレの事を紹介してなかったな。

どうでもいいとは思うが、これも一種の通過儀礼として諦めてくれ。

オレの名前は『望月鞠絵』。

この『人理保障機関カルデア』のスタッフの一人であり、この技術部のトップを務め、ついでにここに集められている48人のマスター候補の一人…というか、俺が一人目なのだ。

そんでもって、この目の前にいるのがオレが契約をしている英霊サーヴァント『キャスター』のレオナルド・ダ・ヴィンチその人。

オレにとつての『今』の相棒であり、実質的な助手でもある。

色々と問題が多い奴ではあるが、その能力だけは間違いなく超一流だ。

他にも様々なスタッフがいるが、それは会った時にでも紹介すればいいか。

ともかく、一癖も二癖もあるメンバーが集まって、オレ達は今から

世界を守っていかない訳だ。

ま、その手の事は他の連中に任せて、オレはキャスターの魔力供給係としてのんびりとさせて貰うけどな。

んなわけだから、今後ともよろしく。

この出会いは必然である

「藤丸立香？　それが、48番目のマスター候補の名前か？」

「うん。どこにでもいる、極々普通の高校生の女の子さ」

「なんでそんな奴がここに？」

「ほら。最後の一枚に数合わせで外部からの一般公募をしたじゃないか。どうやらそれに見事に当選してしまったみたいでね」

「なんともまあ……運がいいのか悪いのか」

「どつちだろうね」

キャスターことダ・ヴィンチの工房にあるソファに座って、渡された資料に目を通す。

経歴、家族構成、その他諸々。どれを取っても、何処にでもいる普通の一般人だ。

ある一部分を除いては。

「おい……この一番最後に書いてあるのはなんだ？　何かのミスか？

それともオレの事を笑わそうとして書いた冗談か？」

「この私が、仕事に関することで冗談を言うと思ってるのかい？」

「だよな……」

メガネを取ってから目を擦り、もう一度確認する。

うん。間違いじゃないし、気のせいでもない。

「レイシフト適性100%……か。これだけでもう、立派に一般人の枠から外れまくってるよな」

「そうだね。これまで、レイシフト適性がある人間はそれなりに発見されてきたけど、これ程までに高い数値を叩き出したのは、マスターを除けば彼女だけだ。あのキシユタリアでさえ、78%止まりだった」

「それでも十分に凄いんだけどな。そういや、オレのレイシフト適性ってどれぐらいだったっけ？」

「もう忘れたのかい？　100%だよ。そこに書かれている女子高生と同じ」

「このオレが素人の女子高生と同列か。落ちたもんだな」

「いやいや！ 君の場合は完全に血筋&才能&努力の結晶だからねっ  
!？」

「そりやそうだ」

そんなの、オレ自身が一番よく理解してるっつーの。

「けど、この100%ツツー数値は他の連中には黙っていた方がいい  
だろうな。特に、オルガやカドックとかにはな」

「カドックは自分の家柄の事を気にしているし、所長に至ってはレイ  
シフト適性が全くないからね。もしも彼女に知られたら、その瞬間に  
罵倒と嫉妬の嵐がやってくるだろうね」

「二人とも、決してダメなわけじゃないんだけどなあ……」

カドックの奴は、オレから見ても感心するレベルの努力家だし、オ  
ルガだって同じぐらいに頑張ってる。

だけど、それでも現実つてのはムカつくぐらいに非情なんだよな。

「今の所、このことを知っているのは私とマスターを除けば、あとは口  
マニぐらいしかいないよ」

「レフには？」

「言つてない。理由は……言わなくても分かるだろう？」

「まあな」

オレがレフの事を信用していないように、コイツもまた同じようにレ  
フの事を全く信用していない。

表向きは笑顔を振りまいてはいるが、その中では警戒しまくつてい  
る。

「あのオタクポニテなら大丈夫だろ。軽薄そうに見えて、意外と口は  
堅いからな」

「よく知っているね」

「あいつとは、もう11年来の仲になるからな」

そうか……あれからもう11年経つてるのか……。

全く、歳を取ると時間が過ぎていく感覚が異常なまでに早くなる  
な。

「で？ オレにこんなものを見せてどうしろと？ まさかとは思  
うが、オレにこの小娘の面倒を見る……なんて言わないよな？」



「その『まさか』だよ」

「何度も言うが、冗談はよしてくれ」

「冗談じゃないって、こっちも何度も言ってるじゃないか」

「なんでオレなんだよ？　こんなのはペロンチーノとかオフエリアにでも任せておけばいいだろ。面倒見がいいあいつらなら、オレ以上に適任じゃないか」

「最初はそれも考えたんだけどね。でも、あの二人はあの二人で忙しいからさ」

「オレは忙しくないってか？」

「そうは言ってるよ。暇そうにしているも、私達以上に頑張っているのは間違いなくマスターだ」

「だったら……」

「私だって悪いとは思っているよ。でも、この手の事は時計塔で講師の経験があるマスターが最も相応しいと判断したのさ」

「誰が？」

「ロマニが」

「よし。後でアイツが隠し持っている秘蔵の本を幾つか燃やして、残ったのを全部デビットに見せてから場の空気を氷河期にしてやろう」

「き……鬼畜の所業だ……」

「そりやどうも」

かの天才をここまでドン引かせたのも、この世でオレだけかも知れないな。

「取り敢えず、まずは当の本人に会ってから決めさせて貰うとしよう。もうこっちには来てるのか？」

「入所しているのは間違いないみたい。今頃はもう最初のシミュレーションを終えている頃じゃないかな？」

「ああ……あれな」

あのめっちゃ簡単なテストみたいなのやっね。

どんな素人でも、適当にやれば確実に勝てるもんな。

一応、あれは『経験させること』が目的だから、難易度とか全く関

係ないんだけどね。

「ふふ……」

「なんだよ」

「いやね。なんだかんだ言いつつも、結局は面倒を見てくれる気になつてるマスターが可愛くてね」

「可愛いって言うな。何度も言ってるだろうが。オレは35のおっさんだぞ」

「その美幼女な見た目で言われても、説得力は皆無だよ。マスター」

「うっせ。その口を令呪で閉じてやろうか？」

「わくこわいな」

完全に遊んでやがるな……。

かくいうオレも、そんな事だけは絶対にしないけどな。

「どこにいるのか分かるか？」

「それは流石に。適当に廊下を歩いていれば会えるんじゃない？」

「天才とは思えない発言だな……」

「その言葉、そのまんま返すよ。現代の天才科学者さん」

「へーへー」

適当に手を振りながら、オレは工房を後にする。

さして、どこにいるかね。

・

・

・

・

・

工房を出て行くこうとしているマスター……望月鞠絵の背中を見送りながら、私は軽く手を振る。

私が彼と初めて出会ったのは、私がここに初めて召喚された時だ。

最初は、召喚システムが不安定な事と私自身が望まぬ召喚だった為

に、すぐにでも消滅して、また座に戻るつもりでいたが、少し離れた場所で壁に背中を預けながら腕組みをしている小さな彼の姿を見て、考えが変わった。

今でこそ、彼はのんびりとした性格をしてはいるが、当時の彼は今とは全くと言っていい程に違っていた。

その目は黒く淀んで濁り、目の下には大きな隈が。

明らかに普通じゃない。純粹にそれが気になって、私は座に戻ることを止めた。

それから、私はここの事情をロマニから教えられ、彼の必死の説得によりカルデアに留まることを決めた。ある一つの条件と引き換えに。

その『条件』こそが、彼…望月鞠絵という人間を私のマスターにすることだった。

『英霊』とは、基本的にマスターからの魔力供給無しでは現界出来ない。

このカルデアは数少ない例外ではあるが、それでもちゃんとした契約をするに越したことは無い。

私と契約をしてほしいとお願いした時の彼の顔は、今でもよく覚えている。

自責。後悔。懺悔。憤怒。悲哀。使命感。焦燥。

様々な感情が入り混じっていて、微塵も余裕がなさそうに見えた。

こんな小さな子供に何をさせてるんだ！

そう思った時もあったけど、後で彼の実年齢を聞かされた時は物凄く驚かされた。

だって、あんな可愛い子が実は35歳で、しかも本当は男の子だったなんて誰が想像するっ!?

私も相当な変わり者であると自負はしているけど、彼の存在はそれ以上だった。

しかも、私に匹敵、もしかすると私以上の頭脳の持ち主でもあったし。

最初はかなりぐずっていたけど、最終的には『勝手にしろ』と言わ

せて、そのまま契約完了。

彼は良くも悪くも変わり者のマスターだった。

サーヴァントである私には全く命令をしようとせず、何かあれば『好きにしろ』の一点張り。

徹夜なんて日常茶飯事で、このカルデアが今のよう安定しているのは、その殆どが彼の功績だ。

だからこそ、カルデアに置いて望月鞠絵という人間は必要不可欠な存在であると同時に、実質的なナンバー2という地位を不動の物にした。

そんな彼と徐々に打ち解け始めたのは…いつ頃だったかな？

いつの間にか、今みたいに普通に話すようにはなっていたんだよね。

私専用の工房を持つことを所長に許可するように説得したり、この工房の設備の配置とかを考えてくれたり。

なんだかんだ言っつて、彼は…マスターは私に対してとてもよくしてくれる。

その理由をロマニだけは知っているようだけど、全く話してはくれない。

それは、『彼の知られたくない過去』に起因しているから言えないって。

普通なら、そこで大人しく引き下がるんだけど、私の好奇心はその程度じゃへし折れない。

なんとかして知る事は出来ないか。そう思っている時、ふと、夢を見た。

本来、サーヴァントは夢なんて見ない。というか、そもそも睡眠を必要としない。

だが、その時はちよつと目を瞑っている間に眠ってしまったってだけで、その時に夢…というよりは、マスターの知られざる過去を少しだけ垣間見た。

そして知った。これは確かに誰にも知られたくはないと。

だからこそ、彼はあんな小さな体に鞭を打ってまで必死に頑張つて

いるのだと。

それから私は、彼の事を全力で支えたと心に決めた。彼と契約をした一騎の英霊として。彼の助手として。パートナーとして。

望月鞠絵の描く人生の行く末を最後まで見届けようと。

それはそれとして、所長にだけは絶対に負けるつもりはないけどね！

例え、元教え子であろうとも、これだけは決して譲れない。

この天才の心を驚掴みしたんだ。覚悟しておいてくれよ？ マスター！

・  
・  
・  
・  
・  
・

口が寂しい。

廊下を歩いていると、無性に煙草が吸いたくなってきた。

けど、このカルデアは喫煙室以外での煙草は禁止されている。

なんで、こんなルールを作りやがったんだよ…マリスはさ…。

あいつだつて普通に煙草を吸ってたじゃないか！

「何かないかな……」

ダメ元でポケットの中を探っていると、何故か一本の棒付きキャンデーがあつた。

いつの間に、こんな物を入れたっけかな？

「ま、いいや」

包装紙を取ってポケットに戻してから、一口パクリ。

「……美味しい」

この味は……イチゴミルクか。

「偶にはいいもんだな」

口の中でキャンディーを舐めながら進んでいくと、前方に非常に見覚えのある後姿が。

なんでか床の方をジッと見ているけど、マジで何やってんだ？

「そんな所で何をやってんだ？ マシユ」

「あ。望月博士。おはようございます」

「おはようさん」

もう『おはよう』って時間帯じゃない気もするが、気にしたら負けだな。

マシユ・キリエライト。

数多くいるマスター候補達の中でも最強にして唯一の主戦力である『Aチーム』所属の少女で、オレにとっては部下的な存在。

そして……オレのもう一つの『過去の罪の象徴』でもある。

「実は、先程から呼びかけているのですが、先輩が全く目を覚まさないんです」

「先輩？」

誰だ、先輩って？

マシユの意味不明な発言を疑問に感じながら、彼女の傍まで近寄っていくと、そこにはオレンジ色の髪の少女が、なんでか廊下のだ真ん中で堂々と寝ていていた。

ついでに、ここに昔からいる謎生物（オレは正体を知っている）である『フォウ』に頬を舐められている。

「こいつは……」

なんで、さつきまでダ・ヴィンチと話していた件の人物『藤丸立香』がこんな場所で寝てるんだ？ 本気で訳が分らん……。

## 二人の主人公

一体なんだ、この状況は……。

最後のマスター候補である少女が大の字になって廊下で寝ていて、それをマシユが起こそうと試み、フォウがその前足で少女の頬をペタペタと叩いている。

うん。見事なまでのカオスだな。

「こいつはいつから寝てるんだ？」

「分かりません。私がここに来た時には、もう既に寝ていました」

「なんだそれは……」

こんな場所で寝て、痛くないのか？

よく見たら、かなり熟睡してるみたいだが。

あ。フォウが頬を舐め始めた。

「どうしましょうか……」

「心配すんな。こんな時は……」

白衣の中から暇潰しに作ったハリセンを取り出す。

それを大きく振りかぶり……。

バチン!!

「いったいつ！ 頭がくっつ!？」

「やっとなら起きたか」

頭に大きな衝撃を受けて、ようやく目が覚めたのか、藤丸立香はゆっくりと半身を起こした。

「えつと……ここはどこ？」

「正面ゲートから中央管制室に向かう通路だ」

「より大雑把に言ってしまうと、カルデア正面ゲート前ですね」

「正面ゲート……？」

なんだこいつ。もしかして寝ぼけてんのか？

だとしたら、もう一発ぐらいお見舞いしておくか？

「あの……少し質問をしてもいいでしょうか？」

「な……なに？」

「見た限りでは、随分と熟睡しておられたようですが、こんな通路の

真ん中で寝ている理由がいまいちよく分りません。先輩は、固い床の上じゃないと眠れない人だったりするのですか?」

「いや。実はそうなんだよね。昔から畳の上とかじゃないと眠れなくてさ。…って、ンなわけないじゃん! 誰が好き好んで固い床で寝たがるの?!? 私は普通にふかふかの御布団で寝たい派の人間だよ!」

「ノリツツコミだな」

見た目通り、かなり愉快な奴だな。

意外と、こんな神経図太そうな奴が最後まで生き残ったりするんだよな。

ウチの両親なんかがいい例だ。

あれはもう神経図太いなんてレベルじゃないからな。

確実にパルテノン神殿の柱ぐらいの太さがあるぞ、絶対。

「フオウ! キュ〜:キャウ!」

「ん? なに? さつきから私の手を舐めてる子は?」

「すみません。まだあなたの紹介をしてませんでしたね」

「フオウ!」

心なしか『今更かよ!』って言ってる気がする。分ないけどさ。

「このリスのような子犬のような子猫のような方はフオウさん。このカルデアの施設内を自由気ままに散歩している謎の特権生物です」

ついでに言えば、よくオレの研究室に出入りをしてエサを要求してくるヤツでもある。

その対価として、抱き枕にして寝てるんだけどな。

フオウを抱きしめながら寝ると、マジで熟睡出来るんだよね。

「色々ツツコミ所はあるけど…今はやめておこう」

「懸命だ」

未だにカルデアにいる誰もが、こいつの真の正体には気が付いてないからな。

オレを除いては…:だけど。

「因みに、私はフオウさんにここまで導かれて、その結果として廊下で真ん中で爆睡中だった先輩を発見した次第です」



「もうソレ言うの止めて〜！ 割とマジで黒歴史になりそうだから！」

残念だが、それは無理な相談だな。

マシユはいい意味でも悪い意味でも天然だから、最低でも向こう半年は同じネタを言われ続けられるぞ。

「フオウ！ シンキュ…フオウフオウ！」

「おっと」

いきなり走ってきたと思ったら、オレの頭の上に乗ってきやがった。

こいつ、隙あらばオレの頭の上に乗ってこようとするよな。

別に全く重たくは無いから、こっち的には全然平気なんだけど。

「フオウさんは本当に博士によく懐いてますね。何か好かれるコツでもあるんでしょうか？」

「さあな。オレがしてる事なんて精々、餌をやったり抱き枕にしてるだけだぞ」

「フオウさんを抱き枕にして寝ている博士…ゴクリ…」

おい。今何で唾を飲んだ？

またAチームの奴等に変な事を吹き込まれたんじゃないだろうか？

「見たことも聞いたことも無い不思議で可愛い生物が白衣を着た美少女の頭の上に乗ってる…」

「美少女で…」

ここまでストレートに言ってくる奴も久し振りだな。

因みに、過去に似たような事を言ってきたのはペペロンチーノ。

出会い頭に思いつき抱きしめられたのは、オレの忘れたい過去ラッキングの上位に位置する。

「つーか、お前もなんか気に入られてたみたいじゃんか」

「そういうばそうですね。だとしたら、このカルデアにおける記念すべき三人目のフオウさんのお世話係の誕生です」

「わくパチパチパチ」

「それ絶対に祝ってないよねっ!?!」

当然だ。何を今更。

つと、ここで無粋な男の登場みたいだ。

レフの野郎。絶対にタイミングを見計らってたな。

「おや。そんな所にいたのかマシユ。それに望月博士も」

「よ。さつき振りだな」

「そうだな。マシユ、ダメじゃないか。断りも無く勝手に移動をするのはよくないと、よく言われているだろう？」

「すみませんでした……」

「いや、もういいさ。博士が傍にいてくれたのなら大丈夫だろう。彼は君の事をとても大切に思っているからね」

「はい。博士にはどれだけ感謝してもしきれません」

「………そうか」

大切に……か。

そりやそうだろうよ。だって、オレとマシユは……。

「おっと。そういえば先客がいたんだったね」

「あ………えつと……」

「君は……成る程。そうか。今日から配属されたという新人くんだね」

年上の男の前ということあつてか、すぐに立ち上がって服に着いた埃なんかを取っていく藤丸。

流石に、あのままでいるようなバカじゃなかったか。

「初めまして。私の名は『レフ・ライノール』。このカルデアで働かせてもらっている技師の一人だよ。君の名前はなんていうのかな？」

「わ……私は『藤丸立香』っていいます！ よろしくお願いします！」

「藤丸立香くん……か。成る程、君が招集された48人の適性者、最後の一人になるわけか」

「は……はい。そう……みたいです」

「ようこそ、カルデアへ。スタッフ達を代表して君の事を歓迎するよ」  
いや、オレは別に歓迎なんてしてないんだけど。

勝手に代表して挨拶すんな。

「ところで、君は一般公募から来た人間のようだけど、訓練期間はどれ

ぐらいいなのかな？ 一年間？ それとも半年？ もしかして、最短の3カ月かな？」

「アホか。ついこの間までごく普通の一般人だった奴が、ちゃんとした訓練なんてしてるわけがないだろうが」

「一般人？ ということは……」

「そーゆーこった」

こいつ、ちゃんと資料とか読んでるのか？

普段からオレにご煩くしてる癖に、こんな時だけ職務怠慢かよ。

「レフ教授。彼女の訓練期間は僅か数時間レベルです」

「数時間……。そうか、思い出した。そういえば、数合わせで緊急で採用をした一般枠があったんだったな。成る程、君はその一人だった訳だな。済まなかった。配慮に欠けていたね」

「いえ。気にしなくてもいいですよ。ここが自分みたいな人間にとって場違いな場所なのは分ってますから」

ほく？ 意外と現実を理解してるんだな。

確かに、今まで魔術に微塵も携わってない人間にとつては、この場所は未知であると同時に恐れ多い場所に見えるだろうな。だけど……。

「そう悲観的になる必要はないよ。何故なら、今回のミッションには君たち全員の力が絶対必要不可欠なんだからね」

言われた。

「魔術の名門から38人。才能がある一般枠から10人。よくもまあ、この短期間にこれだけの人材を集められたもんだな」

「それも全て、博士を初めとした全てのスタッフの努力の賜物だよ」

オレが筆頭なのかよ。

「これは大変に喜ばしい事だ。この2015年において、量子ダイブが可能な適性者達を全て、このカルデアに集めることが出来たのだから」

「割とマジで奇跡的だよな」

「そうだね。何か分らないことがあれば、私やマシユ、もしくはこの望月博士に遠慮なく声を掛けて……ん？」

おい。なんでそこにオレも入る。

オレは何もしてやらんぞ。

「マシユ。君は彼女と一体何を話していたのかな？ 君が自分から初対面の人間と話すだなんて珍しい。それとも、実は以前から面識があつたのかい？」

言われてみれば。大抵、マシユの話し相手はオレかロマニ、もしくは同じAチームの連中だけだったからな。

「いえ。私と先輩は今日が初対面です。この区画でよく寝ていらしたので、つい……」

「寝ていた？ 彼女がここで？」

「そうだ。それでレフに聞きたいことがあるんだ」

「何かな、博士？」

「……最近の若い連中の間では、廊下のご真ん中で爆睡するのが流行ってんのか？」

「いや……私もよくは知らないが……そんな事は無いんじゃないかな？」

「だよな……」

だよね？ あぶなく……危うく、時代の波に取り残されてしまったのかと思つたわ……。

「恐らく、入館時に受けたシミュレートの影響じゃないかな？ あれは量子ダイブに慣れていない人間だと結構、脳にくるからね」

「そうかあ？」

オレも同じ奴を受けたことあるけど、全然大丈夫だったぞ？

終わってから、すぐに仕事を始めたぐらいだし。

「博士と一緒にしてはいけないよ。多分、シミュレート後に表層意識が完全に覚醒しないままの状態でゲートから解放されて、意識が朦朧とした状態でここまで歩いてきたんだろう」

「そして、ここで力尽きてしまったと」

「多分……だがね。一種の夢遊病のような状態だ。藤丸君が倒れた直後にマシユが話しかけてきたんだろう」

それもそれでまた凄いタイミングだな。

「見た感じでは体に異常はなさそうだが……」

「はい。私なら全然平気ですよ?」

「だが、万が一という可能性もある。可能であれば、このまま医務室まで送ってやりたいのだが……」

「だが? なんだよ?」

「もうすぐ所長の説明会が開始される」

「オルガの?」

説明会…んなの予定にあつたっけか?

ヤベ…マジで覚えてないわ。

「ああ。博士もスタッフ兼マスター候補の一人として出席して欲しいと言われているよ」

「だろうな……」

あいつの事だから、オレが来るまで説明会を始めない可能性まである。

流星にそれは気まずい。

「そんな訳で、済まないね。もう少しだけ我慢をしてくれ」

「はい! なんかよく分らないけど、なんとか頑張ります!」

元氣いいなく。若さ故の特権か?

いや…違うな。少なくとも、同年代と思われるマシユやカドツクはこんなにも連シヨンは高くない。

「でも…所長? 説明会?」

「所長は所長だ。カルデアの一番のトップで、お前の上司。そして、今回のミツシヨンの司令官でもある」

「物知りなんだね〜♪」

「頭撫でんな」

つつても、性格的に聞かなそうだけどな。

現に今も、手を振り払ってるのに懲りずにまた頭を撫でてやがるし。

「君は一般公募出来ている新人だが、まさかパンフレットを見ていないのかな?」

「かも知れないですね。所長のプロフィールは基本的に一般公開をされていませんから」

それこそ、万が一の事を考えてだ。

なにせ、あいつは仮にも『アニメスフィア家』の現当主なんだから。どこから命を狙われるか、分かったもんじやない。

「少なくとも、アニメスフィアの名に畏敬の念を示すのは、百年以上の家系である魔術師だけかと。ですよね？」 博士

「ん？ まあ…そうだな。あいつの事を知つてようと、いまいと、今からやる事には何の影響もないだろう？」

「そうかもしれないが、彼女の性格を考えると、些細な事で目をつけられる可能性も否定できない。だろう？」

「確かに……」

小心者の心配性なくせに、なんでか変な所で潔癖症なんだよな。

だからこそ、現在進行形で苦労してるんだけど。

「これから先、激しい喜びも深い悲しみも無い植物のような平々凡々な職場が欲しいんなら急いだ方がいいぞ。レフ、その説明会とやらはいつから始まるんだ？」

「予定では五分後に中央管理室にて所長の説明会が開催される。彼女のような新人たちに対する、ちよつとしたパフォーマンスだよ」

「要は、これから先で舐められない為に、自分の存在をアピールしようって魂胆か。なら、Aチームの連中とかは出席しないのか？」

「そうなっている。彼らは今回の作戦の要。今更、そんな説明なんて必要ないだろう？」

「なら、オレも行かなくてもよくね？」

「博士はスタッフの一員でもある。だから、出席は必須だよ」

「マジか……」

別にオレなんかいなくてもいいじゃんかよ。

どうせ、何もせずにぼくつと突っ立てるだけだろう？

「あの…その説明会には私も出席出来るんでしようか？」

「マシユも？ そうだな…隅の方で見学をするぐらいなら問題ないだろう。博士がいるなら、彼女もそこまでイライラしないだろうし。だが、なんでかな？」

「先輩を管制室までお送りする必要があると思ひまして。まだこの施

設の事もよく把握してないでしょうし。もしかしたら、また途中で昏倒する可能性も否定できません」

「確かに……」

「あれ？　なんか黙って聞いてるうちに私ってば、いつの間にか居眠りキヤラみたいになってる？」

なってる、じゃなくて、もうその立ち位置だよ。お前は。

「マシユを一人にすれば、なんでか私だけが叱られるからなあ……必然的に、私の出席も確定する……ということか」

ざまあ。流石のレフも、マシユには大きく出れないからな。

「仕方がない。マシユがそうしたいのなら、私達はそれを支持しよう。藤丸くんもそれで構わないかな？」

「はい。大丈夫です。ところで、一つ聞きたいことがあるんですけど……」

「なにかなあ？」

「さつきから、なんでこの眼鏡を掛けた子は、私の事をしきりに『先輩』って言うてくるんでしょうか？」

「それな。オレも気になってたわ。なんでだ？」

藤丸とオレが一緒に問い質すと、急にマシユの顔が赤くなった。

オレ達、なんか変な事でも聞いたか？

「恐らく、マシユにとっては彼女ぐらいの年頃の人間は全員が『先輩』なんじゃないのかな？」

「そうなのか？　でも、カドツクとかには『先輩』なんてつけないだろ」「そうだな。マシユがこうもはつきりと口にするのはかなり珍しい。

というか、初めての事かもしれない。そう思うと、途端に不思議になって来たぞ」

「同じく。なあマシユ。なんでコイツが『先輩』なんだ？」

「理由……を聞かれると、言葉にするのは難しいですけど、この人は今まで出会ってきた人達の中で最も人間らしい人です」

「え？　オレとレフって人間らしくないって思われてる？」

「少なくとも、普通に3週間近くも徹夜作業をして平気そうな顔をしている博士は、体質的には人間らしくは無いな」

「その徹夜に付き合っつて一緒に仕事をしたのは、どこの誰だよ」

こいつも人の事は言えねーだろうが。

勝手にオレだけを人外認定するんじゃないよ。

「つ…つまり、この方は全くと言っつていい程に脅威を感じません。敵対する理由が皆無に等しいのです」

「それつて、オレには少なからず脅威を感じたことがある事？」

「それだけは絶対にありません！ 望月博士は私が世界で一番尊敬している偉大な人物です！」

「そ…そうか……」

そこまでストレートに言われると、流石に照れるぞ……。

「しかし、脅威を感じない…か。確かにそれは重要だな！ このカルデアに属している人間は、いずれも一癖も二癖もある人間ばかりだからね！」

「遂にレフが自分で変人認定しやがったぞ」

「博士がそれを言うのかい？」

「うっせ」

オレは変人じゃない。天才なだけだ。

「少なくとも、私は彼女のことは気に入ったよ。藤丸くんとはいい関係性を築けそうだ」

「教授が気に入るといふことは、所長が最も嫌うタイプということでもありますよね？」

「だな」

「提案ですけど、このままどこかに籠つて説明会をスルーするというのはどうでしょうか？」

「それ賛成！ よし、今からオレの部屋に行こうぜ。茶ぐらいなら出してやるよ」

「博士の部屋っ!? 是非とも行きたいです!! ですよね先輩っ!？」

「だね！ 私のこの子の部屋に興味あるし！」

「あく…君達。盛り上がるのはいいが、それだと増々彼女に目を付けられるよ。悪いが、ここは運を天に任せてみるのもいいんじゃないかな？」



「運を天に任せるって言うてる時点で、お前も分ってるじゃねえか」

レフも…苦勞してるんだな。

「では、一緒に虎口に飛び込みに行くのでしょうか。なに、ああ見えても慣れてしまえば愛嬌のある人物さ。だろう？ 博士？」

「そこでオレに振るんじゃないよ」

「彼女は博士の元教え子だろう？」

「それとこれとは話が別だろ……」

一癖二癖どころか、癖しかない連中に囲まれながら、オレはオルガ達が待っている中央管制室へと向かうことにした。

はあ……もうマジで溜息しか出ないわ。

「フオウ……」

お前だけだよ…オレに癒しをくれるのは……。

今日もコイツを抱いて寝よう。絶対。

## 説明会って面倒くさい

結局、新人娘やマシユと一緒に説明会へと出席する羽目となったオレとレフ。

レフはいつも通りの心の内が全く読めないニコニコ笑顔を浮かべているし、この中で溜息を吐いてるのってオレだけかよ……。

因みに、フオウは未だに俺の頭の上だ。

「着きました。ここが今から説明会がある『中央管制室』です」  
「ほえ……」

一応、ダメ元で確認……つと。

Aチームの連中は……やっぱいないか……。

せめて、ペペロンチーノぐらいいてくれればなく……。

「先輩の番号は……一桁台。最前列になりますね」

「実は、一番前って意外と死角になるんだよね」

こいつ、実は学校でも教壇の前の席だったりしたな？

そんでもって、堂々と居眠りとかしていたと見た。

「オレはどうすればいい？」

「博士は、藤丸くんの隣の席でいいのではいかな？ 丁度、おあつらえ

向きに空いているようだし」

「りょーかいだ」

つっても、オレの体には普通の椅子は高すぎるんだけどな。

だから、オレの研究室の椅子は自分で改造して、自在に上下するようにならしてあるんだけどな。

「うくん……」

「先輩？ なんだか顔色が優れないように見えますけど、大丈夫ですか？」

「なんだろ……よく分ないけど、まだ頭がぼくつとしてるような……」

「本当かよ。レフ、どうする？」

「恐らくはシミュレーターの後遺症だろうな」

「すぐに医務室に連れて行った方がよろしいでしょうか？」

「それは……どうやら無理そうだ」

「え？」

「彼女が来た」

いつもスタツフの前でしている仏頂面を見せながら、オルガが全員の前に姿を現した。

その姿を見て、オレとレフとマシユ以外の全員が緊張感に包まれた。

「時間通りとはいかなかったようだけど、やっと全員揃ったみたいですね」

そう言われると、少しだけ悪いなって思ってしまう。

「あっ！ 先生はとつてもお忙しいから、少しぐらい遅れても大丈夫ですからね？」

前言撤回。もう少しだけ煙草を吸っててもよかったかもしれない。

「あ……」

藤丸の奴……本気で具合が悪そうじゃないか？

これは、場合によってはオルガに頼んでコイツだけでも、マシユが言っていたように医務室に連れて行った方がいいかもしれない。

つーか、さっきのオルガの『先生』発言で、全員の視線がこっちに注目してるじゃねえか。

「先生？」

「なんで子供がここに？」

「天才美少女……」

「足をぶらつかせて可愛い……」

「ウホ……♡ いい美少女……」

ヒイツ!? 今、未だ嘗て感じたことが無い程の悪寒が背中を走った気がする……。

「え……ゴホン。特務機関カルデアへようこそ。私が所長のオルガマリー・アニメスフィアです。どうぞ、よろしく」

よしよし。出だしはいい感じだな。

「貴方達は世界各国から選抜、発見をされた非常に稀有な……って、その子！ 何を私の前で寝ようとしているのよ！」

「ふえ……?」

やべ。本気で意識が飛びかけてるのか。

これはどうにかしないとダメかもな。

「オルガ。ちよつと待ってくれ」

「先生?」

「どうやら、こいつはシミュレートの後遺症がまだ残っているみたいでな。実は体調があまり優れないみたいなんだ」

「そ…そうなの?」

「ああ。さつきまで廊下のだ真ん中でぶつ倒れてたぐらいだしな。な? マシユ」

「え? は…はい。確かに、つい先程まで先輩は廊下で倒れていました」

「で、本当は医務室に連れて行こうかとレフと話してただけど、この説明会の時間が迫ってるって言うもんだから、仕方なくこうして来て貰ったんだよ。な? レフ」

「博士の言う通りだ。どうやら、私の予想以上に具合が悪かったようだね。済まない。これは完全に私の判断ミスだ。この場は博士に任せて、私だけでも彼女を医務室に連れて行くべきだった」

「そ…そんな! 先生もレフも何も悪くは無いわ! はあ…分かったわ。今回だけは特別に医務室に行くことを許可します」

「なら、オレが連れて行こう」

「せ…先生がつ!」

「それが一番だろ? 今更改めて説明なんてされなくても、オレは全部を知ってるんだし。それに、後でこの小娘に色々と説明をする役が必要だろ?」

「そ…それは……」

なんて言ってるけど、本当は一刻も早くここを立ち去りたいだけ。

ダシにしているようで気が引けるが、藤丸を連れていくついでにオレも部屋に戻らせて貰おう。

「レフはここにいてやってくれ。マシユは……」

「私も博士と一緒に先輩を送っていきます」

「だ、そうだ。悪いな」

「いえ……先生がそう仰るなら、私は……」

……しゃーない。こいつにこんな顔をさせるのもなんか不憫だしな。

「なに。お前ならここにオレがいなくても大丈夫だよ。お前には魔術だけでなく、他にも色んな事を徹底的に教えたつもりだ」

「先生……」

「だから、後は任せませ。アニムスファイア所長どの」

「は……はい！ 任せてください！」

「いい顔だ」

これでいいだろう。

言葉にはしないけど、オルガはオレの一番弟子みたいな存在だ。

だから、もうオレが傍にいらなくても大丈夫だろう。

最後にウイंकをしてから、オレ達は中央管制室を後にした。

後で知った事だが、オレのウイंकを見てオルガを初めとした数名が盛大に鼻血を出していたらしい。

・

・

・

・

・

「大丈夫ですか、先輩？」

「うん……なんとか……。もしかしてだけどさ……私ってば寝てた？」

「寝てたと言えば寝てましたけど……」

「どっちかって言えばレム睡眠に近かったな」

「そっかく……」

三人と一匹で揃って廊下を歩いているが、まだこいつは意識がハッ

キリとしていないようだ。

レフが言っていたように、やっぱり何もしてない一般人にはキツかったんだろうか？

でも、ぼくは子供だからよく分らないや。

……はい。すいません。調子に乗りました。

「恐らく、先輩はファーストミッションから外されると思うので、今はまず医務室にて体を休めた方がよろしいかと」

「フオウ！」

「フオウも『休んだ方がいい』ってさ」

「え？ 博士…さんは、この子が言ってることが分るの？」

「いや？ ニュアンスでそう受け取ってるだけだ。気にすんな。それよりも、オレの事は名前でいいぞ」

「まだ名前聞いてません……」

「あく…そうだったな」

「そういや、まだコイツに自己紹介とかしてなかったわ。」

「オレは『望月鞠絵』。カルデアの技術主任で、以前はさっきいたオルガマリーに色々教えていたことがある」

「それで『先生』だったんだ……」

「そう呼ぶのはあいっだけで、他の連中は大半が『博士』って呼ぶけどな」

「私はなんて呼べばいいんだろ？」

「好きに呼べばいいだろ。どんな風に呼ばれても、オレは気にしないぞ。『博士』でも『先生』でも『望月さん』でも『鞠絵』さんでも……」

「じゃあ『もっちゃん』で」

「……………はい？」

「も…もっちゃん？ なんだそりや？」

「もしかして、渾名のつもりか？」

「も…もっちゃん…とは、まさか博士の事ですか？」

「うん。なんか『もっちゃん！』って感じがするから」

「意味が解らん」

「でも、どんな風に呼ばれても気にしないってさっき言いましたよね」

？」

「それは……」

真に恐るべきは言霊の力か……！

一度でも言った言葉は二度と引つ込めないとはよく言ったもんだ。

「で……でも、年上の男性に対して『もっちー』はどうかと……」

「へ？ 年上？ 男性？ 誰が？」

「オレだよ。オレ」

「まっさかあ。こんな可愛い子が私よりも年上で男の子だなんて有り得ないでしょ。どつからどう見ても、超絶可愛い美少女にしか見えないでしょ」

そう言うと思っていたよ。だがしかし！ その手の事はこれまでに星の数ほど言われ続けてきている！ 故に！ こんな時の対処法はもう既にオレの中で確立しているのだよ！

「これを見ろ」

「ん？ なにこれ……って、運転免許証？」

「そうだ。これを持っている時点で、オレがお前よりも年上だって分かるだろ。それでもまだ信じられないなら、生年月日の所を見ても」

「どれどれ……昭和生まれえっ!?!」

やっと思ってくれたか。どうして自分の事を紹介するだけで、毎回ここまで苦労しなくちゃいけないんだ……。

「35歳……。ちゃんと性別の欄も『男』になってる……」

「分かったか？」

「は……はい。これからは『もっちー博士』って呼びます……」

「もっちーは変わらないのかよ」

こいつ、何気に『もっちー』を気に入りやがったな。

「つーか、お前もう元気になってないか？」

「あ！ そういえば、いつの間にか頭に掛かったモヤみたいのが消えてるー！」

「よかったですね。これなら医務室に行く必要はなさそうです」

「だな。なら、こいつの個室に案内してやればいいんじゃないか？」

どうせ、いつかは教えることになるんだし」

「そうですね。確か、先輩の部屋の場所はポケットに入れてあるメモに書いてあったような気が……」

マシユがゴソゴソと上着のポケットを探っていると、オレはある事を思い出した。

「おいマシユ。確かお前もAチームだったよな？ そろそろ戻らなくていいの？」

「そ…そうでした！ ファーストミッション！」

「遅れたら、またカドック辺りに嫌味を言われるぞ」

「それは…普通に困りますね。では博士。これが先輩の部屋の場所を書いたメモです。お願いします」

「おう。コイツの事はオレに任せて、お前はさっさと行きな」

「はい！ では、マシユ・キリエライト、行ってきます！」

「行ってらっしゃい」

少し駆け足でマシユは中央管制室へと戻っていった。

「あの…もっちー博士」

「なんだ？」

「博士は、あの子と仲がいいんですか？」

「マシユとか？ そうだな…：仲がいいと言えば仲がいいな。あいつに勉強とかを教えたのはオレだし」

「そうなんだ…：もっちー博士って凄いなだね」

「まあな。いずれは世界一の天才科学者になる男だからな」

「偉いね」

「しれっと頭を撫でるな」

オレの事を知っても、まだ子供扱いするか。

「そーいや、オルガもそうだったっけ。」

「それよりも、お前の部屋まで行くぞ」

「は…い！」

返事だけは一丁前だな。



.....

.....

.....

.....

.....

「ここがお前の部屋になる」

「来た時からずっと思ってたけど、カルデアって扉一つ取っても近未来的ですよね」

「ある意味、ここは人類の技術の結晶みたいなもんだしな」

メモに書いてある部屋まで来ると、扉が自動的に開いた。

「自動ドア！……って、なんか中に誰がいる？」

「なんだって？」

ここは間違いなく空室だった筈だぞ？ 誰かがいるなんて、そんな事は……。

「は〜い。居留守で〜す……って、アイエエエエエエエエエツ  
!? 望月博士っ!? 幼女っ!? ナンデっ!」

「オレは幼女じゃねえって何度も言ってるだろうが！ いい加減に学習せんか！ このオタクポニテ!!」

「ブギヤツ!」

「ったく……いい加減にマジでキレるぞ……!」

思わず、なんでかポケットに入っていたゴムボール(定価100円)を投げてしまった。

「痛たた……いきなりボールを投げるなんて酷いじゃないですか博士  
〜……」

「自業自得だ」

「そんなく……あれ？ 博士の隣にいる女の子は一体？」

「おっと。まずはこいつを部屋に案内して……おいロマニ」

「なんだい？」

「なんでお前がここにいる？」

「なんでって……ここは僕が密かに見つけたサボり場だけど？」

「道理で……最近になってレフが『ロマニがいきなり消えることがある』ってぼやいてたけど、これが原因か……」

後で絶対にレフの奴にチクってやる。ついでにオルガにも。

「ここはな、今日からこの『藤丸立香』の部屋になるんだよ。残念だったな」

「藤丸？ まさか、彼女が最後の候補の子ですか？」

「その通りだ。ほれ、挨拶」

「は……はい！ えつと……藤丸立香です」

「いやあく初めまして。意外な出会いだけど、こっちも自己紹介をしないかね。僕は『ロマニ・アーキマン』。一応、医療部門のトップを務めている者さ」

「人呼んで『Dr. ロマン』だ」

「ロマン？」

「そうなんだよね。なんでそう呼ばれるのかは割と本気で不明なんだけど、君もよかったら僕の事は気さくに『ロマン』と呼んでくれていいよ」

「分りました。ドクターロマンさん」

「おっと。冗談のつもりだったのに、まさかいきなり呼ばれるとは。これは中々のコミュカの持ち主と見た」

「単純に馬鹿とも言う」

「酷っ!？」

馬鹿を馬鹿と言って何が悪い。

「おや？ もしかして、博士の頭の上にいるのって、噂に聞いている謎の怪生物？ 僕も見るのは初めてだなあく！」

「それは、お前のサボり癖が原因だろうが」

「ははは……それを言われると痛いなく。一応、マシユから話だけは聞いてたんだけど、本当にいたんだなあ。そうだ。少しだけ手懐けてみようか」

手懐けるって、何をやる気だ？

「はい、お手。もしも上手に出来たら、お菓子をあげようね」

「……………フオウ…」

「なんだろう……なんか今、物凄く可哀想な目で見られた上に見事に無視された気がする……」

「気がする、じゃなくて実際に無視されたな」

「そういえば、マシユがよく言っていたっけ。『フオウさんは博士に一番懐いてる』って」

「あいつがそんな事を……」

オレ以外じゃ、ロマニとよく話してたっけ。

まあ……ある意味で当然なんだけども。

「取り敢えず、まずは中に入らせろ。そして茶でも出せ。お菓子はチョコケーキを所望する」

「中に入れるのはともかくとして、お茶とケーキはいきなり過ぎないかいっ!？」

「サボりは罰する慈悲は無い」

「そんなんっ!？」

「んじゃ、私はチーズケーキがいいです!」

「君もっ!?! あっという間に順応してるっ!?!」

成る程。藤丸とロマニの組み合わせは面白いな。

これから先、ロマニの事で困ったことがあつたら、真っ先に藤丸をぶつけよう。

さて……マシユやオルガ達は上手くいってるかな？

## 鳴動する天文台

「……はあ……なんでもボクが、こんな召使みたいな真似を……」  
「黙れ。サボり魔に文句を言う権利は無い」

現在、藤丸の個室となる予定の部屋を個人的な休憩所としていた愚か者に、茶とケーキを用意させている最中だ。

「大体！ 普段からサボっているのは望月博士だって一緒でしょうが！」

「オレはいいんだよ。最初にめっちゃ頑張った分を、今サボってバランスを取ってるんだから」

「ボクだって一生懸命に頑張ってるんですけどっ!?!」

「そんな台詞は、最低でも7徹とかしてから言え」

「医学を志す人間として言わせてもらおうと、そんな事したら普通に死ぬからねっ!?!」

「レフも普通にしてるぞ?」

「それは、彼と博士が普通じゃないからだよ!」

「そっかなく? うちの両親とかは、一番凄い時は丸一年ぐらい寝ないで研究に没頭してたこともあったけど……」

「……博士のご両親は本当に人間なのかい?」

「生物学的には、れっきとしたホモ・サピエンスだと思う……多分」

「実の子供である博士が自信を持って断言出来ないって……」

仕方ないだろ。あの人達の人外っぷりはオレでさえも全く測れないんだから。

なんせ、旅行気分ですら普通に太陽系外に行ってくるんだぜ?

小学生の時に聞いたことも無い惑星の石をプレゼントされた子供の気持ちになって見ろよ。

「もっちゃん博士とドクターって仲がいいんですね」

「仲がいい……ね」

傍から見れば、そんな風に見られてるのか。

オレ的には普通に接しているつもりなんだけど。

「博士とボクは昔からの腐れ縁だからね。意識をしていなくても、自

然と話が盛り上がってしまふのさ」

「そうなんだ。なんか、そんな関係ってちよつと羨ましいですね」

「もう少し大人になれば、お前にもそんな奴が一人や二人は出来るようになるよ」

「博士の言う通りさ。君はまだまだ若い。これから先、色んな事を経験して、色んな人と会っていけばいい」

「うわ…ドクターはともかく、もっちーが大人な発言をしてる…」

「オレは立派な大人だ」

アラサー舐めんな。コラ。

「はい。紅茶とケーキだよ」

「お〜!」

どうも、講師だった昔の癖が完全に抜けきらないな。

自然と授業をしているような口調になって、無駄に疲れちゃう。

そんな時こそ、甘いものを食べるに限るよな。

「にしても、なんでロマニが暇そうにしてるんだよ？ 確か、もうそろそろレイシフト実験が開始されるんじゃないかな？ 少なくとも、他のスタッフは総出で現場に行ってる筈だぞ？」

「そうなんだけどさ…：…ほら、ボクはご覧のとおり、基本的には皆の健康管理が主な仕事だからさ、こんな時はやる事が無くなってしまうんだよ」

「そうなんですか？」

「うん。実際、霊子筐体コプラインに入った魔術師達のバイタルチェックなんかは、機械の方が遥かに速くて正確だからね」

「その辺は仕方がないよな。どれだけ優れた技術を持っていても、文明の利器には勝てないってこった」

「博士…なんか言い方が古臭いよ？」

「黙れ、エロポニテ」

「どこからエロ要素が出てきたのさっ!？」

「うくん…全身？」

「まさかの体っ!？」

やっぱり、ロマニを弄るのは本当に楽しい。

もうこれ、オレの趣味に記載してもよくね？

「はあ……けど、まさか博士まで説明会を抜け出してくるとは思わなかったよ」

「オレは、もう既に頭の中に叩き込んでいることを何度も何度も口頭で説明されるのが嫌だったただけだ」

「その気持ちは分かるんだけどね……」

分かるのかよ。

そうなるよ、オレとロマニが同類って事になるの？

え……それは純粹に嫌だなく。

「そう言えば、なんでドクターは追い出されたんですか？」

「所長に『ロマニがいたら現場の空気がゆっゆるになっちゃうのよ！』って、何ともいえない言いがかりを受けちゃってね。それで、ここに来て不貞腐れてたんだ」

「その割には、お菓子とか漫画が散乱してるようだけどな」

「いつだって、準備だけは怠らないようにしてるのさ」

「カッコつけて言っても意味ねえよ。寧ろ、ダメ人間っぷりが加速してるだけだ。そんなんだから、ヒナコやオフェリアから便所コオロギを見るような目で見られるんだよ」

「今明かされる衝撃の真実！ ボクってば、彼女達からそんな風に見られてたのっ!?!」

「ついでに言うと、最近になってオルガはロマニと会う時だけ、防犯ブザーを持ち歩くようにしたらしいぞ」

「ボクは無実なんですけどおおおおおおおっ!?!」

そんな事をこっちに言われてもな。

文句があるなら、本人に直接言ってくれ。

「あはは……!」

「んん。」

「なんか……二人のやり取りが普通に面白い……!」

そう言われると、なんか急に恥ずかしくなってくるな……。

「けどまあ、実際問題、こうして二人が来てくれた事は普通に有り難かったよ。ボクもそろそろ本気で暇になってきててね。やる事が

無い者同士、のんびりと世間話でもしながら交友を深めようじゃないか」

「その結果、ジエネレーションギャップに直面して悶えたりしてな」

「だ…ダイジョウブさ…」

どっから、その根拠が出るのやら。

それを小一時間ほど問い詰めた。

「っていうかですね、ここって元々は私の部屋(の予定)なんですけど」

「つまり、ロマニは現役女子高生の部屋に無断で侵入をした挙句、そのベッドの上で寝ていたと」

「その言い方は酷くないですかねっ!？」

「事実でしょ?」

「二人揃ってっ!?! なんか君も博士のノリに染まってきてないっ!?!」

「いや…それ程でも…♡」

「ちつとも褒めてないんですけどっ!?!」

.....

.....

.....

.....

.....

「ンなわけで、以上がこのカルデアの構造になる。分かったか?」

「はい。随分と高い場所にあるな…って思ってたけど、まさか標高6000メートルの雪山の中にあるとは思ってませんでした」

「だろうな。そう思うのも無理ないよ。普通に生活をしていたら、絶対に訪れることが無い場所だからな」

「こんな所に来る人なんて、それこそテレビとかに良く出てくる登山家の人達ぐらいなんでしょうね」

「あれっ!?! なんか奇跡的な流れで自然と博士が立香ちゃんにカルデア

アの説明をしてるっ!?!」

ロマニ、うっさい。

折角、このオレが久し振りに講師モードになってプチ授業をしてるってのに。

「けど、すつごく解り易かったです。もっちー博士が昔、先生をしてたって話は本当だったんですね」

「なんだよ。信じてなかったのか?」

「あはは……その幼女な姿で教壇に立つてる姿が全く想像出来なくて……」

「うんうん。それにはボクも激しく同意するよ。きつと、講義をする時なんかは、踏み台を使って指し棒とか使ってたんだろぅな〜って、よくボクも妄想してたな〜」

「妄想って……」

あっはっはっ。

ロマニ、お前がそんな事をしてたなんてな。いい事を聞いたよ。

「よし、ロマニ」

「なんだい?」

「お前が密かに隠し持っているエロ同人誌を食堂でギリシユタリアに音読して貰う刑と、今からここにペペロンチーノを呼んで、あいつに熱い抱擁をされながらのデイープキスをされる刑と、ヒナコとオフエリアとオルガの三人に囲まれて延々と罵詈雑言を聞かされる刑と、どれがいい? 好きなのを選んでいいぞ」

「どれを選んでも絶望しかないんですけどっ!?! もしもそんな事をされたら、体の前に精神が死んじゃうんですけどっ!?!」

「仕方がない奴め。それなら、デイベットとタイマンで模擬戦を100回する刑で勘弁してやるか」

「今度は肉体的な意味で死ぬよっ!?! ボクみたいなヒヨロモヤシが彼に勝てるわけないだろっ!?!」

「だからこそ意味があるんだろぅが」

「まさかの確信犯っ!?!」

「はははははははははははははははは!!」



オレとロマニのコントを見て藤丸が爆笑していると、いきなりロマニの通信機が鳴った。

「おっと。誰からかな？」

急いでロマニが出ると、聞こえてきたのはレフの声だった。

『ロマニ。いきなりで悪いのだが、こつちに来てくれないか？』

「どうかしたのかい？」

『もうすぐ最初のレイシフト開始なのだが、どうもBチーム以下の慣れていない者達に若干の変調が見られている』

「Aチームの連中は大丈夫なのか？」

『この声は博士？ ロマニと一緒にいるのかい？』

「まあな。ついでに言うと、例の新人も一緒にいるぞ」

「ど…どうもです」

『なんで二人がロマニと？』

「それはだな……」

かくかくしかじか。

『かくかくうまうま。成る程な。部屋を出て少ししたら彼女の体調が良くなり、医務室に行く必要が無くなったから、ついでに彼女の個室まで案内してあげた…と。道理でマシユが予想よりも早く戻ってきたはずだ。納得したよ』

「今のでちゃんと会話が成立してたのっ!? ボクには二人が『かくかくしかじか、かくかくうまうま』と言っているようにしか聞こえなかったけどっ!?!」

「だからお前は修行が足りないんだよ、ロマニ」

「修行でどうにかなるのっ!?!」

「なるに決まってるだろ。まずは、オレと同じように眼鏡を掛ける」

『そして、私と同じように全身をグリーンな服でコーディネートすれば……』

『『必ず理解出来るようになるー!』』

「なんかレフまで普通にボケてきたんですけどおおおおっ!?!」

「分かりました! 私もやります!」

「君はしなくてもいいから! お願いだから、立香ちゃんだけは彼等

色に染まらないでくれえええええええつつ!?」

なんて失敬な事を言う奴だ。

藤丸は立派に眼鏡を掛けて緑の上下を着ているのに。

「つて、なんかまた話が逸れてるから! ボクをそっちに呼ぶって話だったでしょうっ!」

『そうだった。つい調子に乗ってしまった』

「別にいいんじゃない? 楽しければ」

「反省の色ゼロ!」

ちゃんと反省すべき時は反省するさ。オレだってな。

「で、Aチームの連中は大丈夫なのか?」

『それなら問題ない。彼らは今回のメンバーの中でも選りすぐりだからね』

「それもそっか。カドツクはともかく、あのキシユタリアが緊張でガクブルしてるしてる姿なんて全く想像出来ないしな」

『そういう事だ。恐らく、これは不安からくるものだと思ってる。コフィンの中はまるでココピットのような場所だからな』

「確かに。それは少し不憫だな。了解だ。それじゃあ、今からそっちに行つて、ちよつと麻酔でも打つてあげようか」

『そうしてくれ。医務室…じゃないから、すぐには無理かもしれないが、それでも5分ぐらいで到着するだろう? 出来るだけ急いでほしい』

「が…頑張つてみるよ」

ここで通信が切れる。

途端にロマニが顔を青くして俯いた。

「こんな時、普段の運動不足が祟るんだよなあ……」

「それを理解してるんなら、これからはマジで少しはトレーニングルームで体を動かすように心掛けろよ。このカルデアで『医者の不養生』とか、マジで洒落にならねえぞ」

「うぐ……! 博士の正論が心に痛い……」

自覚があるだけまだまし……か。

「そうそう。さっきの人物は……」

「レフさん……ですよね? さっき会いました」

「そうだったのか。因みに、彼は中央管理室にあつた疑似天体カルアデスを観る為の望遠鏡、近未来観測レンズ・シバを生み出した魔術師だ」

「シバってのは、カルアデスの観測だけじゃなくって、この施設内ほぼ全域を監視しつつ、同時に映し出すモニターでもあるんだよ」

「ほえ〜…凄いですね〜」

「そして、レイシフトの中枢を担う召喚・喚起システムを構築したのは前所長と、ここに居る望月博士なのさ」

「ええっ!? もっちり博士って、そんな凄い人だったんですかっ!?!」

「そうだぞ〜。分つたら、もつと敬え〜」

「はは〜」

オレはいつから水戸黄門になったんだ。

なら、スケさんはロマニでカクさんはレフだな。

「その理論を実現させる為の疑似量子演算器…：解り易く言えばスパコンなんだけど、それを提供してくれたのがアトラス院」

「提供してくれるように交渉したのは、オレと前所長なんだけどな。あれは本気で骨が折れたわ…：。父さんと母さんの名前を出さなきゃ、絶対に失敗してたわ…：。」

あいつら、ウチの両親の名前を出した途端に急に手の平返しをしようがったんだよな。

あそこまで態度がコロツと変わられると、逆にこつちが困惑するわ。

「このように、実に多くの才能が集結をした上で、今回のミッションが執り行われるのさ。博士みたいな本物の天才ならいざ知らず、ボクのような平凡な医者が立ち会ってもしようがないとは思うけど、呼ばれた以上は行かない訳にはいかない」

「平凡…：ね」

一体どの口がそれを言うんだか。

「ボクとのお喋りに付き合ってくれてありがとう、お二人さん。落ち着いたら、今度は医務室でも尋ねてくれ。今度もまた美味しいケーキを御馳走するよ」

「今の聞いたか?」

「ぼつちりと」

「いや、今のは一人で来てねって意味だからねっ!？」

「ちっ…!」

別にオレも一緒にいいじゃんか。ケチ。

そんな風にも心の中で愚痴を垂れていると……。

「「え?」」

部屋が暗闇に包まれた。

「な…なんだ? いきなり明かりが消えるなんて……」

「え? ええ?」

「じっとしてろ!」

音からして動こうとしたと思われる藤丸を声で制止させると、突如として緊急事態を知らせるアラームと共に、アナウンスが聞こえてきた。

『緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所、及び中央管制室にて火災が発生しました』

「「なっ!」」

オレ達は、何もかもが全て遅すぎた。

だからこそ、こんな『取り返しのない事態』に陥ってしまった。

これが…オレにとって人生二度目となる『最大のミス』になった。

## 緊急非常事態

『緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所、及び中央管制室にて火災が発生しました。中央区画の隔壁は約90秒後には閉鎖されます。各職員は速やかに第二ゲートから退避してください。繰り返します。中央発電所、及び中央……』

いきなり部屋が暗くなったかと思ったら、次の瞬間にはけたたましいアラームと共に緊急事態を知らせるアナウンスが。

余りにも突然すぎて、オレもロマニも本気で一瞬だけ呆けてしまった。

「はっ!? 今の音はもしかして爆発音かっ!?!」

「だろうな……確かに、中央管制室方面から聞こえてきた……!」

ここから管制室まではそこそこの距離がある。

にも関わらず、物凄くハッキリと聞こえてきた。

ということとは、かなり大きな爆発だったって事だ。

「ド……ドドドドドドクターっ!?! もっちーっ!?! 一体何が起きて……」

「さあな! オレ達にもサツパリだよ! それでも一つだけ分っている事はあるけどな!」

「それって……」

「どっかの馬鹿が、このご時世に時代遅れの爆破テロなんかをしやがったって事だ! ロマニ!」

「ああ! モニター、急いで管制室の様子を映してくれ! 皆は無事なのかっ!?!」

ロマニが音声認識のモニターに叫ぶと、オレ達の前に投影型のモニターが出現し、管制室の様子を見せてくれた。

そこに映し出されていたのは……。

「酷い……」

「……これは……!」

轟々と燃え盛る炎に包まれた、見るも無残な姿となった中央管制室だった。

「明かりがついた……」

「恐らく、予備電源が作動したんだろうね」

「これで動きやすくはなったが……」

「博士、ボクらはこれからどうする？」

「急いで中央管制室に向かうぞ。アナウンスを聞く限りじゃ、今回の爆発の発生源はあそこだ。望み薄かもしれないが、まだ生存者がいる可能性がある」

「そうだね。それじゃあ、立香ちゃんは急いで退避をして……」

「いや、こいつも一緒に連れて行く」

「な……なんだってっ!? 正気かっ!」

ロマニがオレに突っかかってくるが、オレにはオレなりのちゃんとした理由がある。

「もう少し落ち着いた状況なら、オレだって絶対に連れて行ったりはしない」

「なら……」

「ロマニ。よく考えてもみる。碌に状況判断も出来ない素人を一人で行動なんてさせたら、絶対にこいつは勝手に中央管制室まで行っちゃうぞ」

「だったら、博士と一緒にいてあげれば……」

「そんな事が許させるような状況か？ 今は、一人でも多くの動ける人間が必要な筈だ」

「そ……それは……」

はい論破。ついでにおまけ。

「だったら、せめてオレ達の目が届く範囲にいて貰った方が、結果的には被害が少なくて済む……だろ？」

「……了解だ。全く……口喧嘩じゃ博士には敵わないな……」

「当たり前だ。オレを誰だと思つてやがる」

「いずれ、世界一の天才科学者になる人間……だろ？」

「その通りだ」

分つてるじゃないか。

「そんな訳だ。今からオレ達は爆発元である中央管制室へと向かう。」

お前も一緒に来い！」

「わ…分りました！」

「くれぐれも、ボク達から絶対に離れないようにするんだよ！ いいね！」

「はい！」

部屋の隔壁が閉じる前に、急いでオレ達三人は廊下へと出た。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「おいおい…冗談きついぞ……」

「さつき第二ゲートから逃げるとか言っておきながら、もうそっち方向に続く隔壁が閉じてやがる……」

「どっちみち、立香ちゃんを逃がす事は不可能だったってことか……」  
くそ……！ さつきからずつと胸の奥で嫌な予感がしてやがる……！

なんなんだよ……ああ！！

「……早く行くぞ」

「そうだね……！」

「もっちー…ドクター……」

オレは、殆ど無意識の内に藤丸の手を掴んでから、ロマニに遅れないように走り出した。

（あれ……？ もっちーの手……なんか固い？ それに…全然温もりを感じない……）

頼むから…無事でいてくれよ……オルガ！ マシユ！ 皆！！

.....

.....

「「.....」」

爆発の余波で扉までもが吹っ飛ばされたのか、中央管制室は廊下から丸見えの状態になっていた。

だからこそ、中の状況が一発で分かってしまった。

「生存者は.....」

「おおい!! 誰かいないのかく!!!」

ダメ元で全体に届くような声で叫んでみる。

だが、全く返事は返ってこない。

「いない.....みたいだね.....。辛うじて無事なのは、カルデアだけか.....」

「ああ.....」

またか.....またオレは.....同じことを繰り返すのか.....!

「博士.....貴方はどう見ている?」

「...アナウンスの言ってたことは間違いじゃなかったって事だな」

「ボクも同意見だ。この場所こそが爆発の起点になっている。しかも.....」

「事故の類じゃない。これは明らかに人為的な破壊工作だ。過去に似たような事をした連中を何十人も知ってる」

その代表例は、あの『魔術師殺し』だけだな。

『動力部の停止を確認。現在、施設の発電量が著しく不足しています。予備電源への切り替えに異常が見られます。近くにいる職員は急いで手動にて切り替えを行って下さい』

「なんだってっ!?!」



「冗談じゃないぞ!! こんな状況で動力部まで完全停止とかなったら、本気でカルデアが崩壊する!!」

これはいいよ、本気で洒落にならなくなってきたな……………!

どうする……………考えろオレ……………! 絶対に思考だけは止めるな……………!

『全隔壁閉鎖まで、残り40秒。中央区画に残っている全ての職員は速やかに……………』

40…秒……………!

「……………博士。ボクは今から地下の発電所へと向かうよ。貴方が言った通り、今の状況でカルデアの火が止まったら、それこそ全てが終わりだ。それだけは絶対に避けなければいけない」

「ロマニ……………」

コイツ……………まさか……………。

「博士は立香ちゃんを連れて、急いでここから脱出を! 今ならまだギリギリで間に合う筈だ!」

「ま……………待って! ドクターはどうするのっ!?!」

「大丈夫。地下には緊急時の脱出艇とかもあるから、本当に危なくなったら、それで逃げるよ」

「でも……………」

……………一般家庭の出であるコイツには、酷な話か……………。

それは分かる。分かるけどな……………。

「こんな場所で博士を失う訳には絶対にいかない。貴方の存在は、それ自体が最後の希望だ! だから!」

「分ってるよ! コイツはオレに任せて、お前はお前のやるべき事をやってこい!」

「頼んだよ……………鞠絵」

「お前……………」

最後にオレの事を名前で呼びやがって……………。

そーゆーの……………卑怯なんだよ……………。

「また……………会えるよね……………?」

「当たり前だ。あいつは殺したって死なないよ」

こつちを振り向くことなく走っていくロマニの背中を見ながら、オレ達もここから出ようとすると、またもやいきなりアナウンスが聞こえてきた。

『システム レイシフト最終段階へと移行開始。座標 西暦2004年 1月30日 日本 冬木』

「は？ へ？」

「なん……だと……？」

今……なんつった……？

レイシフト……？ それに……冬木……だと……!?

「なんかヤバい気がする！ 急ぐぞ!!」

「う……うん！」

荒れ狂う炎を掻き分けながら出口へと向かおうとしている最中にも、遠慮なくアナウンスは聞こえてくる。

『ラプラスによる転移保護……成立。特異点への因子追加枠……確保』

本格的におかしくなってきた！ マジで急がないと取り返しのつかないことになりそうだ!!

『アンサモンプログラム……セット。各マスターは最終調整へと移行してください』

「も……もっちー！ さっきから聞こえてるコレってなんなのっ!？」

「本来なら、レイシフト時に流れるアナウンスだよ！ でも、こんな状況で流れる訳がないんだ！ どう考えてもおかしすぎる!!」

余りにも様子がおかしすぎる！ こりや、いざとなったら藤丸を抱きかかえて走る事も考慮した方がいいな……!？」

(マシユ……オルガ……済まない……!?)

せめて、こいつだけでも絶対に脱出させる！

じゃないと、あの世に行った時に皆に会わせる顔が無い!!

「も……もっちー！ ちょっと待って!!」

「なんだっ!? 今は立ち止まっている場合じゃ……!？」

「あそこ!!」

藤丸が必死の形相で指差す場所には、巨大な瓦礫の下敷きとなって

いるマシユの姿があった。

「マシユ!!」

急いでマシユの元まで駆けつけると、こっちに気が付いたのか、弱々しく顔を上げた。

「は……かせ……せん……ぱい……」

「マシユ……」

頭から血を流し、半身が潰されている。

素人目で見ても、彼女の命がもう風前の灯なのは明らかだ。

でも……それでもオレは……!」

「急いで助けないと! 待ってて! 今そこから出して……」

「い……いです……自分……がもう助からない……のは……私自身……がよく分つてます……から……」

「そんな事ない!! そんな事ないよ!!」

「はは……こんな時でも……先輩はお元気……なんですね……。それよりも……博士……急いで先輩を連れて脱出を……」

聞こえない。聞きたくない。聞くつもりもない。

「あ……」

「なに……あれ……」

二人が何かに驚愕したように同じ場所を見ている。

思わずオレもその視線を追うと、いつもならば綺麗な青に染まっている筈のカルデアスが、燃えるような赤に染まっていた。

「……………?!」

オレが絶句していると、そこに無情な知らせが入ってきた。

『観測スタッフに警告。カルデアスの状態が変化しました。シバによる近未来観測データへと書き換えます』

心臓が煩く鼓動している。

炎の熱とは別の原因で汗が止まらない。

『近未来百年までの地球において、人類の痕跡が発見出来ません』

……………は?」

『人類の生存が確認出来ません。人類の未来は保障出来ません』

なんだよ……そりゃ……!」



理解はしていたが、こんな状態では歩行なんて絶対に不可能だろう。

「……マシユはオレが抱える。藤丸は歩けるな？」

「う……うん！」

「博士……ありがとうございます……」

「礼を言うのは、ここを出た後だ」

「は……い……」

だが、またしても無情な現実が襲いかかる。

『中央隔壁を封鎖します。館内洗浄開始まで、あと180秒です』

「もっちー…隔壁が……」

「心配すんな。いざとなれば壁をぶっ壊して外に出る」

「出来るのっ!？」

「出来る出来ないじゃない。やるんだよ。それに、さっきのを見ただろ？」

「そう…だね。もっちー…凄い力だった」

「ふっ……本物の天才に不可能は無いんだよ。覚えとけ」

そうだ。諦めて溜まるもんかよ。

まだオレは自分の夢すら叶えてない。

親父もお袋もまだ越えてない！

だから！ オレは絶対に諦めない!!!

『コフィン内のマスターのバイタルが基準値に到達していません。レイシフト定員に達していません。只今より該当マスターを検索します……発見しました』

炎熱で頭が朦朧とする。

だからどうした。それは足を止める理由にはなり得ない。

体から水分が失われていく。

それがどうした。その程度ではオレ達は死なない。

『適応番号1 望月鞠絵と、適応番号48 藤丸立香の二人をマスタ―として再設定します』

何か言っているが、それを聞いている余裕はない。

今はただ、生き延びる為に足を動かし続けるだけだ。

『アンサモンプログラム…スタート。これより量子変換を開始します』

「あの…博士…」

「なんだ」

「私…博士と会えて…本当に嬉しかったです…」

「…俺もだよ」

『レイシフト開始まで、あと3…』

もう少しで出口だ…。

けど、もう目が霞む…。

隣を見ると、藤丸も辛そうにしている。

『2』

『接続部』が熱い…。

『1』

ちくしよう…あと少しなのに…。

『全行程…完了。只今より、ファーストオーダーの実証を開始します』

そこで、オレの意識は途切れた。

ここから、全てが始まる。

特異点F 炎上汚染都市 冬木  
燃える街と後悔の記憶

血が流れる。

涙が溢れる。

慟哭が響く。

それは、忘れてはいけない記憶。忘れたくない思い出。

「ごめん……ごめんなさい……」

片膝をついて苦笑いを浮かべる少女の前で、一人の小さな男が泣きながら、その頭を彼女の体につけている。

「貴方が謝る必要はどこにもありません。貴方は正しい事をした」

「オレは……オレは……」

少女は腹部から夥しい血を流し、誰の目から見ても致命傷だった。

口からも血を流し、とても痛々しい姿であるにも関わらず、少女はどこまでも笑顔を浮かべている。

本当は、男は少女の事を抱きしめたかった。

だが、それは出来なかった。

何故なら、男の体には……本来あるべき両腕が欠如していたのだから。

「寧ろ、こちらこそ貴方に謝罪をしなければなりません」

「何を……」

「私が不甲斐無かったせいで……貴方の両腕を失ってしまう形になってしまった。あの時、私があと少し早く『アサシン』の奇襲に気が付いてさえいれば……」

「……これはオレのミスが招いた結果だ。お前は何も悪くないよ……」

そこに、二人組の男が姿を現す。

一人は長身で、何処にでもありそうなロングコートを身に付け、もう一人は現代では考えられないような派手な服装をしていた。

ロングコートの男は何も言わずに二人の事を見つめていたが、もう

一人はこの場の空気に耐えられなかったのか、一歩だけ前に出てから

二人に向かって言葉を発した。

「……君には、君達にはボクを恨む理由がある。ボクを憎む権利がある」

「……貴公も難儀な男だな」

「そうかもしれないね……」

「だが、その在り方は一人の『王』として尊敬に値する」

「君ほどの人物にそう言われると、なんとも恥ずかしくなるね」

少しだけ笑みを浮かべてから、また男の表情は沈んだ。

「…本当に済まない。ボクは、君の願いを無残に踏み躪るような真似をしている。許してくれ、なんて言えた立場じゃないのは重々承知している」

「いえ……これでいいのです。彼や貴方を出会い、話し、共に戦うことで私は知りました。自分の願いは間違っていたと」

少女の体から黄金の光が溢れだす。

それは徐々に強くなり、少女の体を包み込んでいく。

『歴史のやり直し』なんて、それこそ前代未聞の大罪だ。例え、そこにどんな理由が介在しようと、それだけは絶対にやってはいけない。少し前までの私は、そんな簡単な事さえ理解していなかった」

「けど……お前はそれが過ちだったって気が付いたじゃないか……」

「そうです。だからこそ、私は彼に全てを託せるのです」  
「……………」

少女が立っている男に向かって弱々しく言葉を継げる。

「古き偉大な魔術の王よ。貴方の願いは何よりも平凡だが、それ故に最も尊く美しいものだ」

「騎士王……………」

「私の最後の願いを…聞き届けられないだろうか？」

「君の願いならば喜んで」

「ありがとう」

少女は消えゆく体を伸ばし、その両腕で初めて心から愛おしいと思った男を抱きしめた。

「彼の事を……お願いします」



その一言で全てを理解した男は、迷う事無く頷いた。

「分かった」

「ああ……これで……何の未練も無く私は逝ける……」

「あああ……」

「貴方に会えて……貴方のような人間が私の『マスター』で本当に良かった……」

「オレもだ……。お前に会えて本当に良かったよ……」

最後に、とても美しい笑みを浮かべてから、少女は跡形も無く消滅した。

「オレは忘れない……絶対に忘れない……！　そして、もう二度と同じことだけは繰り返さない……！　だから……向こう側で見てくれよな……」

「セイバー」

……

・  
・  
・  
・  
・

「んん……？」

何かがオレの頬を舐めている。

その感触で、オレはうつすらを目を開けた。

すると、オレの視界には真っ白でモフモフな物体がいた。

「フオウッ！」

「……そういや、お前の存在をすっかり忘れてたな」

「フオウフオウ！」

「あく……ゴメンゴメン。いつも頭の上に乗ってるのがもう完全にデフォになってるからさ、あの状況じゃすっかり頭からすっぽ抜けてたわ」

「フオウ……」

「悪かったって。後で秘蔵の猫缶をくれてやるから……って、なんか地面臭くないか？　なんで？」

目の前にフオウがいるせいで周りがよく見えない。

どけと言ってもどいてくれるかどうかは微妙なので、ここは自分が起き上がるしかない。

「よっこいしよっ」と

「フオウ……」

「親父臭いつて？　何言つてやがる。年齢的には立派な親父……おい。これは何の冗談だ？」

服に着いた砂を払いながら立ち上がりながらフオウを両腕で抱えると、オレの眼前にはさつきまでとは似て非なる光景が広がっていた。

「なあ……ついさつきまで、オレ達は確かにカルデアの中央管制室にいた筈だよな？」

「フオウ！」

「なのに、今はどうして燃え盛る街中のだ真ん中にいるんだよ？」

「フオウ……」

「そうだな。お前に聞いても分かるわけないか」

熱い場所から熱い場所へと移動してるから、気温的な意味では全くもって変化はない。

だからどうしたって感じなんだけどね。

「……取り敢えず、移動するか。ここでジツとしても何の変化もないし。それに……」

周りをキョロキョロと見渡す。

この場にはオレとフオウ以外には人影は愚か、虫一匹も見当たらない。

「……いつの間にかはぐれている藤丸とマシユの事も探さないといけない。なんとか無事でいてくれればいんだけどな」

急がず慌てず、適度な速度を維持しながら移動しよう。

ちゃんと周囲を警戒しつつ観察もしながらな。

「あの時に聞こえてきたアナウンスが正しければ、オレ達は2004年の冬木にレイシフトしたことになるんだが……」

あんな状況で正しくレイシフト出来たとは到底思えない。

必ずどこかで何らかのバグが発生している筈だ。

「通信は……」

スマホに耳を当てると、ノイズばかりが聞こえる。

どう考えても通信不良ですね。

「仕方がない。まずは二人を探す事を最優先にしよう。そのついでに、この場所が本当に冬木であるという確証を得られる何かを見つけるか」

フオウをいつものように頭の上に乗せてから、ポケットに手をつ突っ込んで歩き出そうとすると、いきなり地面から瘴気のようなものが出てきて、そこから武器を持った骸骨兵みたいな連中が召喚された。

「……どのどいつかは知らないけど、なんとも趣味の悪い使い魔だこと」

剣に弓矢。骨の分際でバランスだけは分つていやがる。

「なあ：フオウ。もしかして、オレって舐められてる？ この程度の雑魚に殺されるって思われてる？」

「フオウ！」

「だよな。こんなんじや足止めにもならんだろ」

後衛の骸骨兵が弓を構え、前衛の骸骨兵が剣を構えて突撃してくる。

「心配はいらないと思うけど、一応、ちゃんと捕まっとけよ」

「フオウ！」

骸骨兵の剣がオレの頭を目掛けて振るわれて……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

辺りには、粉々になった骸骨兵の成れの果てが散乱していた。

オレが何をしたのかというと、まあ簡単な事だ。

あいつらの武器を奪ってから、それを使ってぶっ倒しただけ。

「はあ……つたく、オレに無駄な運動をさせんなつっの。お腹空いちやうだろうが」

「フオウフオウ！ フオウ！」

「え？ 偶には思い切り体を動かす事も大事？ いやいや、どうせ体を動かすなら、オレはフィールドワークとかで動かしたい派の人間だから」

ただ只管に走るだけとか、オレには絶対無理。やりたくない。

「骸骨の癖にいい武器を使ってんじやねーよ。なんかムカつく」

奪った剣を肩に担ぎ、奪った弓を反対側の肩に入れる。

矢は数本しかないけど、それはまた襲ってきた奴らから奪えばいいだけの話だ。

「でも、手に持つのは面倒だなく。どこかにいい感じの矢筒って無いかな〜」

……あるわけないよな。自分で言ってるだけだよ。

「そういや、スマホに霊脈を検知出来るアプリを入れておいたんだっけ。まずはそれを目指して行くとしようか」

「フオウ！」

こうして、オレとフオウの孤独な一人と一匹の冒険が始まった。

めっちゃ短いだろうけど。

(そういやさつき、物凄く懐かしい夢を見たような気が……どんな内容だったっけか?)

よく思い出せん。ま、夢なんてもんは往々にして内容を忘れるものだから、そこまで気にはしないけどさ。

.....

「……くそつたれが」

暫く歩いていると、何かの衝撃で見事にへし折れた案内板があり、そいつはオレ達に向かって無言で嫌な現実を教えてくれた。

『ようこそ冬木市へ』：か。なにがようこそだよ。こちとら、来たくて来た訳じゃないんだっつーの」

感情に任せて案内板を思いっきり蹴り飛ばすと、少し離れた場所ですウロウロしていた骸骨兵にぶち当たって壊れた。

「……………」

なんか…悪い事をしちゃったかな。

「フオーウ………」

「しゃ…しゃーないだろ！ イライラしてたんだからさ！」

「フオーウフオーウ！」

「分ってるって！ こっちの居場所が知られた以上、ちゃんと責任を持って片付けますよ〜！」

あくもう！ なんてこうも連続でトラブルが発生するんだよ！

今年って厄年だったっけかつ!?

「オラア!! オレのストレスの発散に付き合えやあぁっ!!」

・  
・  
・  
・  
・  
・

「ふはあ〜…」

地面に剣を突き刺してから、それを背凭れにして煙草を吸う。

火だけは周り中にあるからな。

「少しだけスッキリしたわ」

またもや、オレの周りには骸骨共の哀れな姿が。

どうせなら、この壊れたパーツを組み合わせてからスクラッチでもしてやろうか？

『マ…ター！』

「ん？」

小休止をしていると、いきなりオレのスマホに通信が来た。

一応、このスマホには通信機としての機能も備えさせてあるから、向こうから通信が来た時は自動的に繋がるようにしてある。

『マスター！ 聞こえるかいっ!? 生きてるかいっ!?』

「キヤスター！ ダ・ヴィンチかつ!」

『ああ……マスター！ やっぱり生きてたんだね！ あの爆発が起きた時は、流石の君でも危ないと思ってたけど……』

「バカ言え。このオレがああ程度でくたばるわけないだろうが」

『そうだよね……なんたって、この私のマスターなんだもんね!』

こいつ……鼻声になってないか？

もしかして、泣いてるのか？

『けど、私に念話も無しで行動したのは感心できないな?』

「それは本当に悪かったよ。こつちもそんな余裕が無かったんだ。

……いや、それは単なる言い訳だな。本当にゴメン」

『いや、君が無事ならそれで十分さ』

「けど、お前と話せるのは本気で有り難い。まずはそつちの状況を教えてくれないか？ まず、お前はどこにいるんだ?」

『私は今、自分の工房にいるよ。あそこはマスターが特別に丈夫にしてくれたお蔭で、多少揺れたぐらいで済んでるから』

「確かに、あそこの強度は核シエルター級にしてあるけど」

割とこいつに関しては心配いらなかった?

『密かに私の手で管制室と同じタイプの通信機を作成しておいて正解だったね』

「念には念を、だな。いい心掛けだ」

『ふふくん！ もっと褒めてくれてもいいんだよ?』

これ以上、付け上がらせても面倒なので、ここらで重要な話にシフトした。

生存者はどれぐらいか。そつちは今どうなっているか等々。

『あの爆発で、スタッフの殆どが死んでしまったよ。残っているのは本当に僅かな数だけだ』

「そうか……」

『他の部署にいたお蔭で爆発に巻き込まれずに済んだり、奇跡的に軽傷で済んだりとかね』

「ロマンはどうしてる?」

『あいつなら無事だよ。今は管制室で新人ちゃんとかマシユ達に向けて通信を行っている最中だ』

「なんだってっ!?!」

通信を行ってるって事は、あいつらは無事って事かっ!?!

「あの二人はどうしてるっ!?! 特にマシユはっ!?! あいつは明らかな致命傷を負っていた!」

『落ち着いてくれマスター! 君らしくないぞ!』

「あ……ごめん」

『ごほん。あの二人なら五体満足で無事だよ。ついさつき、マスターを襲った連中と同じタイプのエネミーと遭遇したみたいだけど、呆気なく撃退したみたいだ』

「げ……撃退? 誰が?」

『マシユが。マスターが疑問形になる気持ちも分かるから、まずは彼女達と合流することをお勧めするよ。ここで私が説明をするよりは、その目で直接見て、本人に聞いた方が色々と手っ取り早い』

「それもそうだな。了解だ。二人の元までナビをしてくれるか?」

『はいはい。それぐらいならお安い御用さ!』

ダ・ヴィンチの声を聞きながらオレ達は前身を再開する。

『にしても、流星はマスターだね。コフィン無しの状態だったのに、普通に意味消失に耐えてるし』

「この程度でどうこうなってたら、一生掛かっても親父たちを越えられないよ」

『いつも聞くけど、マスターの両親は本当に何者なんだい?』

「知るか。こっちが聞きたいわ」

通信越しにダ・ヴィンチと情報交換をしながら、オレ達は炎に包まれた街中を歩いていくのだった。



合流、そして・・・

『おや？ 成る程ね〜』

『どうした？』

ダ・ヴィンチの誘導に従って歩いてみると、なにやら意味深な事を言い出した。

こういう勿体ぶった言い方をする奴は嫌われるぞ？

『どうやら、あの二人は霊脈に向かつて移動しているみたいだ。多分、向こうに通信をしたロマニの指示だろうね』

「なら、必然的にオレ達も霊脈へと向かつているのか」

『そうなるね。無事に霊脈まで辿り着ければ、カルデアからの通信も今以上に安定するだろう』

「そうだな。ところで……」

『ん？ なにかな？』

「オレの研究室は無事だったか？」

『大丈夫も何も、あれだけ派手な事が起きたつてのに傷一つついてないよ。そうじゃなくても、マスターのプライベートルームはカルデアでは一二を争う程に嚴重なセキュリティになってるからね。部屋の主の許可無しじゃ、総理大臣だろうが大統領だろうが関係なく入室は絶対に不可能だ』

「そうだったな。いつも普通に出入りしてるから、なんか忘れがちになってた」

慣れって本当に怖いですね〜。

画面の前のお前らも気をつけろよ？

『けど、なんで急に研究室の事を？ 君は自分の部屋の事を気にするよ様な人間だったかな？』

「オレだってそれぐらいは気にするさ。それに……」

『それに？』

「あそこには『アレ』があるからな」

『……そうだったね。万が一の時に備えて密かに用意しておいた『最後の手段』が、あそこには存在してるんだった』

「ある意味で、オレの研究の集大成の一つだからな」

『知ってるよ。私だって手伝ったんだから』

『アレ』の存在はカルデアの中じや最重要機密に属している。

知っているのは、オレとダ・ヴィンチを除けば、後はロマニしかない。

所長であるオルガですら全く知らない事だ。

「他にも色々聞きたいことはあるけど、それはあいつ等と合流してからロマニにでも聞こうか」

『それがいいよ。ここからでは把握できていない事も把握している筈だ。にしても……』

「今度はどうした？」

『いやね。こつちにある資料が確かならば、日本の冬木市はどこにでもあるごく普通の地方都市で、こんな大災害が起きたっていう記録は全く無いんだけど……』

「それはオレも疑問に感じてた。オレも昔、訳あって2004年頃の冬木に少しだけ滞在をしていたけど、こんな事は全く起きてない。つか、もしもこんな大災害が起きていたら、絶対に忘れはしないだろうさ」

『そうだよね……。だとしたら、これは一体……』

「それは、これから先で探っていくしかないな。今は余りにも情報が不足している」

『だね。まだ君達がそつちに取り残されているって事は、カルデア側からの回収も出来ないようだし』

「なににせよ、まずは前に進むのみ……だな」

『それがいい……おや?』

「ん? なんだ?」

『これはこれは……私としたことが、こんな事を見落としていたなんて』

「ハツキリ言え」

『ふふふ……♡ これも合流してからののお楽しみにしようか』

「なんだよ……」

これだから天才って人種は……。

あ、オレも天才だった。

「取り敢えず、急ぐか……」

そうと決まれば、ちよつとだけダツシユしますか。

『ちつちやい足でちよこちよこ走るマスターが可愛い……♡』

「お前はマジで黙れ」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「お。見えた!」

すつごく遠目ではあるが、見覚えのある人影が三つ。

ん? 三つ? 二つじゃなくて?

「フオウ! フォーウ!」

「だよな……でも……」

そんな奇跡があり得るのか?

「おいダ・ヴィンチ! ちよつち聞きたいことが……」

『この通信は只今使われておりません。御用の方はピー音の後に……』

「死ね!!!」

この一番大事な時になんで急に通信を切つてやがんだよ!

お前マジでふざけんなよっ!?

こうなったら……。

「おっい!!」

「フオウ!!」

オレとフオウの大声攻撃だ!



「!!!」

・  
・  
・  
・  
・  
・

「……落ち着いたか？」

「「ハイ……」」

あれからちやんと霊脈のある場所へと移動したオレは、さつきまでオレを中心に押し藏饅頭をしていた三人を正座させて説教中。

「全く……で？ マシユのその格好はなんだ？ そんな露出の多い格好をするようなキャラじゃなかっただろうが」

「えっと、此れはですね……」

マシユ説明中。

かくかくしかじか。

「……という訳なんです」

「成る程な……」

デミ・サーヴァント計画。

オレが関わった研究の中でも、トップクラスに極悪非道な研究の一つ。

どんな言い訳をしても、これは間違いなく人道に反する行為だった。

それなのに……。

「よりにもよって、こんな状況で安定するなんて……皮肉過ぎるだろ……」

マシユに融合させようとしていたのは、カルデアにおいて一番最初に召喚された英霊だった。

となると、マシユに力を貸して消えたという英霊は……。

『お前』…なのか。許されるなら、お前には直接お礼の一つでも言いたかったが……お前はそれを受け入れないだろうな……』

いいさ。お前は好きなのだけオレの事を恨めばいい。

……あの時の『アイツ』の立場にオレがなるなんて、世の中どうなるか分からないもんだな……。

「博士？ どうしたんですか？」

「いや…なんでもない。それで、サーヴァントと化したマシユと契約をしたのが藤丸って訳か」

「そうなります。先輩には申し訳ありませんでしたが、あの時は周りに彼女しかいなくて、それで……」

「いいよ。あんまし気にすんな。一般枠とはいえ、こいつも立派なマスター候補の一人だ。遅かれ早かれ、なんらかの英霊と契約は交わしていただろうさ。それが偶々お前だった。それだけの話だろ？」

それに、意外といいコンビになりそうだしな。この二人は。

「本当は……博士と契約したかったです……」

「ん？ なんかつたか？」

「い……いえ！ 何でもないです！」

なんか顔が赤くないか？ いや、この周りの炎でそう見えてるだけか。

「それじゃ、まずはお互いの情報交換をしようじゃないか。まずは藤丸とマシユから頼む」

「はい」

・  
・  
・  
・  
・  
・

「……以上です」

「成る程な。状況的にはオレと全く同じか」

「はい。私達はレイシフトに巻き込まれて、そのまま冬木の街へと転移をしてしまいました」

「オレ達の他に誰かを見かけたりしたか？」

「いいえ。探しはしましたが周囲には誰もいませんでした。恐らく、他に転移をしたマスター適性者はいないと思われます。現時点で、博士と所長だけがこつちで合流出来た唯一の人間です」

オレ達だけ……か。

「でも、どうして私達と博士は離れた場所に出てしまったんでしょうか？」

「あの時の私達って、近くにいたよね？」

「その理由は明白だ。同時に、どうしてオレ達だけがこうして冬木に来てしまったのかもな。だろ？ オルガ」

「やっぱり、先生も気が付いてたんですね」

「当たり前だ。オレを誰だと思ってるんだ」

「私が世界で一番尊敬している先生です」

そこで恥ずかしげも無く言えるお前を本気で凄いと思ったよ……。

「ど……どう事ですか？」

「これは、消去法ってよりは共通項って言った方が正しいわね」  
「共通項？」

「オレもオルガもマシユも藤丸も、あの時  
コフィンに入っていなかった」

「先生の仰る通りよ。本来、生身のままのレイシフトは成功率が大幅に激減してしまうけど、決して不可能じゃないし、可能性もゼロには  
ならない」

「逆に、あのコフィンにはブレーカーが存在している。レイシフトの  
成功率が95%以下になると、自動的に電源が落ちるようにな」

「ほえ……凄いですね」

「当然じゃない。なんたって、コフィンの基礎設計は先生がやってる

んだから」

それは事実だけど、なんでそこでオルガが自慢げに胸を張る？

「と…兎に角、この場にはいない他の彼らはレイシフト自体を行っていない。故に……」

「この場にいるのは私達だけだと……」

「ああ」

まさか、オルガまでもがいるとは思ってなかったけどな。

けど……ちよつと引つかかるな。

あの時、ロマニは確かにこう言った。『生存者はいない』……と。

それに、オルガはレイシフト適性がないから転移は出来ない筈だ。だというのに、なんでかコイツはこうしてここにいる。

これは一体どういう事だ？

……ダメだな。まだまだ判断材料となる情報が少なすぎる。

今の状況じゃ推理も何もあつたもんじゃない。

「ここからどうしましょうか？」

「先生」

「ん？ ああ…そうだな。こんな時は、まずはベースキャンプを作った方がいいだろう。丁度、今いる場所が霊脈のターミナルになる場所だから、ここに作ろう」

「了解です」

「マシユ、まずはお前の持つてるその盾を地面に置くんだ。それを媒介にしてから召喚サークルを設置する。そうすれば、カルデア側とも安定した通信が可能になる筈だ」

「らしいですけど……構いませんか、先輩？」

「勿論だよ。私も、まずは拠点作りが大事だって思うから」

「意外と分ってるじゃないか」

「えへへ……」

案外、適応能力は高いのかもしれないな。

こんな奴が色んな経験を積んでいくと、驚くような成長をしたりするもんだ。

「では、始めます」



・  
・  
・  
・  
・  
・

「うわあ〜…」

「これは……カルデアにある召喚実験場と同じ……?」

「正確には、向こうがこつちを模してるんだけどな。さて……」

青く幾何学的な空間が生まれ、その中にオレ達はある。

これで、向こうとも通信が出来るようになると思うのだが、状況が状況だしな……。

『あ〜：シーキューシーキュー。もしも〜し。只今マイクのテスト中〜。本日は晴天なり〜：よし！ やつと通信が元に戻った!』

あ。ロマニだ。やっぱり生きてやがったか。

そりやそうだよな。あんな事で死ぬような奴じゃないのはオレが一番よく知ってる。

『二人とも、本当にご苦労様。やつと空間の固定に成功したよ。これで安定した通信も可能になったし、補給物資だって送れるようになった……』

「ちよい待ち！ なんでロマニが普通に仕切ってる訳っ!? レフはどうしたのよっ!?!」

「そうだそうだ〜」

『アイエエエエエエエエエエツ!? 所長に博士っ!? ナンデツ!?!』

「なんでニンジャリアリティショックになってるのよっ！ 私達が生きてちや悪いわけっ!?!」

『別にそんな事は言っていないけど、なんであの爆発の中で生きてるん

ですかっ!? しかも無傷ってっ! 遂に所長も博士と同じ人外の領域に足を踏み込んだんじゃないのかっ!?!」

「はっはっはっ。よし、生きて戻れたら覚えとけよ? お前の秘蔵の本を全てお前の目の前で焼却処分してやる」

『鬼の所業だ——!!』

お前はオレを怒らせたんだよ。

「それよりも! レフはどこに行ったのっ!? 本来、私や先生が不在の場合は医療セクションのトップである貴方じゃなくて、レフが全体指揮をするべきじゃないのっ!?!」

『確かに所長が言う通りだ。ボク自身、こんな柄じゃないのは理解している。けど、他に人材が存在しないんですよ。オルガマリー所長』  
「……死んだのか?」

『その通りだよ、博士。現在、辛うじて生き残ったカルデアのスタッフはボクを含めても20人にも満たない』

「ロマニが指揮を執っているのは、お前よりも上の階級の人間が根こそぎ全滅したせいか」

『理解が早くて助かるよ、博士。こう言っちゃなんだが、博士程の人物が現場にいて本当に助かる。貴方以上に現場の指揮を任せられる人間はいないからね』

「余り褒めるな。お前の髪が抜けるぞ」

『なんでボクの髪っ!?!』

「今の自分の姿を鏡で見えないのか? お前の髪、すっごいチリチリになってるぞ」

『冗談でしょっ!?!』

「あ……本当です。ポニーテールの先っぽ辺りが……」

「あちやく……」

『そ……そんな……ボクのチャームポイントが……つて、ギャアアアアっ!?! ちよつと触っただけで……っさり抜けたあああっ!?!』

「それは抜け毛だよ。朝のお前の枕元にいつも、それぐらいの量は落ちてるぞ」

『立て続けに襲い来る衝撃っ! それは本当なのかいっ!?!』

「マジマジ」

『もう少し…健康的な生活を心掛けよう……』

よし。なんかいつもの調子が戻ってきた。

オレとロマニはこうでなくっちゃな。

「話は戻すが、レフはどうなった？」

『……あの時、レフ教授は管制室にてレイシフトの指揮を執っていた。ということは、必然的にあの爆発の中心にいたわけで……』

「生存は絶望的…か」

「そ…そんな…あのレフが……」

オルガにとって、レフはもう一人の父親的な存在だったしな。

そんな奴が死んだと聞かされれば、ショックも大きいか。

「ロマニ。さっきお前は生存者の数が20人未満だって言ったな？」

「ってことはマスター適性者達はどうなってる？」

『47人全員が危篤状態となっている。医療器具も多く破壊されて数が致命的に足りない。ボクの見解では、助けられて精々がAチームの面々ぐらいが限界だ。現状で全員を治療することはまず不可能だろう……』

だろうな……。

恐らく、向こうにいればオレも同じ答えを出していただろう。

「ロマニ。今すぐに冷凍保存に移行しろ。今は兎に角、あいつ等を死なせないのが先決だ。蘇生方法は後々で探っていけばいい」

『そうか！ コフィンには冷凍保存機能があったんだった！ 流石は博士！ 伊達にコフィンの基礎設計をしていない！ 早速手配するよ！』

これで一先ずはなんとかなるだろう。

でも、問題はこれからだな……。

## 英霊召喚

オレがロマニに負傷者達の冷凍保存を命ずると、マシユが驚いた様子でこつちを見てきた。

「流石ですね、博士。本来ならば、本人の許可も無く肉体の冷凍保存をするのは犯罪行為とされています」

「そうなの？」

「はい。ですが、博士はそれを知っていながらも躊躇することも無く決断をした。博士はいつも、冷徹な科学者であるように振る舞ってはいますが、どんな時も人命を最優先する素晴らしいお方なんです」

藤丸の疑問にマシユが淡々と答えているが、聞いているこつちはマジで恥ずかしいぞ……。

こいつの天然ボケはどんな事をしても治りそうにないな……。

「フオウ……」

ポンポンと、フオウがその肉球でオレの頭を軽く叩いて慰めてくれる。

お前だけだよ……オレの心情を理解してくれるのは……。

「オルガ」

「は……はい！」

「あいつ等の命はオレが全部背負うから、お前は所長として成すべき事を成せ。それがお前の役割だ」

「……分りました」

やつと、いつものオルガに戻って来たか。

そのキリツとした顔が、お前には一番似合ってるよ。

オレ達が話している間に、冷凍保存を終えたロマニが通信に戻ってきた。

『博士に言われた通り、彼らの体は冷凍保存してきた。これで、当分の間は持ちこたえる筈だ』

「サンキューな」

『いや、博士が教えてくれなければ、冷凍保存なんて発想自体が出てこなかった。……やっぱり君は凄いよ。こんな状況下であるにも関わ

らず、いつも通りの冷静な判断力を持ってボク達を導いてくれる。今日ほど、博士がカルデアのスタッフで良かったと思った日は無い」  
「仲間の命すら救えないようじゃ、世界一の天才科学者なんて永遠になれっこないからな」

『ぶれないね、相変わらず』

「どんな時も、夢だけは絶対に捨てない。それがオレの信念だからな」

これだけは例え何があっても変わることは無いだろう。

オレが生涯を賭けている夢なんだからな。

「それじゃあ、改めて現在のカルデアの詳しい状況を聞かせて貰おうか。お前達もよく聞いておけよ」

「はい」

『了解だ。まずは……』

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

『報告は以上だ』

「想像以上に事態は深刻みたいだな……」

『ああ。現在のカルデアは、その機能の約八割を失っている状態にある。生き残ったスタッフだけじゃ、やれることにも限界がある』

「でしようね……」

『だから、今はこっちの判断で人材はレイシフト機能の修理と、カルデアス及びシバの現状維持に割いている』

「賢明な判断だ」

なんだかんだ言つて、ロマニだつてやるじゃねえか。

立派に即席の指揮官を務めているよ。

『外部との通信が復帰し次第、補給などを要請してカルデア全体の立て直しを図る……って言ったところかな』

「今はそれが最善だろう。オレやオルガがそっちにいても、同じ判断を下しただろうしな」

「そうですね、先生」

こんな時、本当ならウチの馬鹿親がいてくれれば、こんな状況すらも簡単に塗り替えてくれるんだろうけど……。

(今、二人揃ってどつかの並行世界に旅行に行ってるしな……)

確か：『ムーンセル』だったっけか？

何を指す言葉かは教えてくれなかったけど、恐らくは月に深く関係する何かなのは確かだな。

「オルガ。オレはこのまま、オレ達が向こうに戻るまでの間、ロマニにカルデアを任せたいと思ってるんだが、お前はどうか？」

「そうですね……私も先生の意見に賛成です。正直、余り納得はしてないけど、それが一番なのは私も理解してますから」

「……ということで、そっちの事は任せただぞ」

『了解だ。皆が戻ってくるまでの間、なんとしてもカルデアを守ってみせるよ』

「頼んだぞ。まずはレイシフト装置の修理を最優先で行わせろ。帰る手段が無くつちや話にならないからな」

『勿論だとも。そっちはこれからどうするんだい？』

「オレ達か？ そうだな……」

1〜2秒ぐらいだけ考えて、すぐに結論を出す。

「修理が完了するまでの間、この街……特異点Fの調査を続行しようと思う」

『本当なら、安全な場所で待機しておいて欲しいのだけけどね……』

「それが一番なのはオレだって承知してる。けどな、今回の状況は明らかに変だ。ここを少しでも調べることで、何か分かるかもしれない」

『博士のフィールドワーク大好きっ子の血が騒ぎましたか……』

大好きっ子ってなんだ。子供扱いするなよな。

『でも、大丈夫なのかい？ 軽く確認したけど、そっちにはエネミーがいるんだろう？』

「それなら心配無用だろ。こっちにはデミ・サーヴァント化したマシユがいるし……」

「はい！ 任せてください！」

「それと、あの程度の雑魚なら、オレでも普通に倒せたし」

『「「え……っ？」」』

おいこらそこ。なんでおかしなものを見るような目をこっちに向ける？

『た…倒したのかい？ エネミーを？』

「うん。ほら、その証拠に奴らの武器を奪ってきてるだろ？」

「言われてみれば確かに……」

「普通に気が付きませんでした……」

「もっちー…マジで凄い子……」

これぐらい、別にどうってことないんだけどな。

ウチの両親なら、一瞬で街全体にいる全ての雑魚だけをピンポイントで一掃出来るだろうし。

「そんな訳だから、これよりオルガと藤丸、マシユを連れての特異点Fの本格的な調査を敢行する。つつても、流石に無理はさせられないから、やる事はこの異常事態の原因の発見だけに留めておくけどな」  
「それだけでいいんですか？」

「ああ。こんな状態で無理に解決しようとしたら、逆にオレ達自身の危機に繋がる可能性がある。それよりは、解析や排除などはカルデアが復興した後に第二陣を送り込んでから実行した方が確実だ」  
「無理は禁物ってことだね。わっかりました〜！」

無駄に元気だよな…藤丸立香。

けど、こんな奴が一人でもいてくれるのは本気で助かる。

暗い雰囲気のままじゃ気も滅入るしな。

『了解だ。健闘を祈るよ、博士。所長』

「そっちもな」

『それと、最後に言っておくことが』

「なんだ？」

『これからは短時間ではあるけれど通信が可能となる。何かあればすぐにでも連絡をくれ』

「それはいい報告だ。その時が来たら、遠慮なく頼らせて貰うとするよ。他の皆にも『頑張れ』って伝えておいてくれ」

『ふふ…分かったよ。博士からの言葉なら、きっと皆が大喜びだ』  
そこで通信が切れた。

にしても、オレってそんなに人気があったっけ？

「博士。決定したことにも今更、異議を唱える訳ではありませんが、本当に良かったんですか？ ドクターも仰っていたように、安全な場所で救援を待つという選択肢も有りだと思いますが……」

「そういう訳にもいかないのよ、マシユ」  
「所長？」

オレの代わりに、オルガがマシユの疑問に答えてくれた。

「カルデアに無事に帰還できても、次のチームの選抜にどれだけの時間と労力がかかるか見当もつかない。人材集めや資金稼ぎも一ヶ月なんかじゃ到底きかない。その間にどれだけの抗議が協会からあると思うの？」

「それは……」

「最悪の場合、今回の不始末の全ての責任を取らされて、カルデアが連中に接收される可能性だってある。もしも、そんな事になったりしたら、それこそ本当の意味で破滅よ。だからこそ、私達は絶対に手ぶらじゃ帰れない。今は兎に角、連中を正面から黙らせる成果が絶対に必要なの」

「……ってことだ。オレが言おうとしていたことを全部言われちゃったな」

「えっ!? あ…すみません」

「気にすんなって。寧ろ、お前の成長を間近で見られて嬉しいよ」

「先生……♡」

自分の手掛けた教え子が成長するってのは、マジでいいもんだな。

なんだか、時計塔での日々を思い出してしまうよ。



「つー訳で、今から特異点F調査隊、出動だ」

「「はい！」」

「……の前に、ちょっとやっておきたいことがある」

「なんですか？」

「コレだ」

オレは、白衣のポケットの中から金色に輝く一枚のチケットのよう  
な物を取り出した。

それを見て、マシユとオルガは納得した顔になり、藤丸はFXで有  
り金を全て無くしたような顔になった。

「呼符！ 英霊召喚を行うんですね！」

「そうか……マシユの盾を媒介にした召喚サークルならば、ここでも  
英霊の召喚は可能になる……」

「そーゆーことだ。戦力は少しでも大いに越したことは無いし、マス  
ター候補全員に支給されている『呼符』を使えば、本来ならば必要で  
ある『聖晶石』も必要ないしな」

「よびふ？ セーしょーせき？ えーれー？ なにそれおいしいの  
？」

おう…藤丸の顔が本格的に見せられないレベルになってるぞ。

「は…博士、大変です！ 先輩が知恵熱で頭から煙を出してます！」

「あく…要は、『聖晶石』は英霊召喚っていうガチャを引くための石で、  
呼符はチケットみたいなものだと思っつけ。英霊とかの詳しい説明  
はちゃんと後でしてやるから」

「は…い…」

遂には鼻たれ小僧みたいになっちまった。

仮にも現役の女子高生がそれでいいのか？

「カルデアのシステムを用いたシステムならば、詠唱とか必要ないん  
だけど、今は状況が状況だしな。念には念を入れて、ちゃんとした形  
式に則った召喚をするか」

詠唱呪文はちゃんと覚えてる。

後は呼符を捧げてから唱えるだけだ。

「き…緊張しますね…」

「うん：なんだかドキドキしてる」

「どんな英霊が召喚されるのかしら……」

「なんでお前らが緊張してるんだよ。召喚するのはオレだぞ？」

「そんじゃ…いくぞ」

「「ゴクリ……」」

深呼吸をしてから、魔力を集中させる。

ほんの少しだけ目を瞑ってから、詠唱を開始した。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

呼符が光子となって散り、召喚サークル内へと四散する。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度、ただ満たされる刻を破却する」

目を開け、自分の体が浮き上がるような感覚を覚えつつ、魔力を更に増大させる。

「Anfang<sup>セツト</sup>。告げる。告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ。誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

サークル内にて三本の光のリングが回転し、中央にて収束し、それが形となって人の形を形成していく。

やがて、徐々に光が消えていき、その姿が露わとなっていく。

「嘘……だろ……？」

召喚されたのは、青いドレスに白銀の甲冑を身に纏う、雄々しくも可憐な容姿の金髪碧眼の少女剣士。

忘れはしない。否、忘れる訳がない存在。

こいつは…オレにとって最初にして一番の……。

(いや…何を考えてるんだオレは。分ってる筈だろ。英霊は他の聖杯戦争での記憶を受け継がない。仮に過去の記憶があったとしても、それは非常に曖昧で、泡沫の夢のようなものだ。つまり、こいつは…オレの知っている奴じゃない……)

割り切らなきや…割り切らなきやダメだ。

今は、私情を優先していい場合じゃないんだから。

「これが…英霊…サーヴァント……」

「綺麗です……」

「凄……」

感動している三人娘は取り敢えず無視して、オレは召喚された英霊と向き合う。

マスターとして、まずはちゃんと挨拶をしないと。

「えつと。まずは自己紹介からだな。オレは……」

「その必要は有りませんよ」

「え？」

何を言っているのかと思った瞬間、オレはいきなり抱きしめられていた。

いきなりの事に体を強張らせていると、衝撃の言葉が飛び出した。

「本当に久しぶりです……。サーヴァント・セイバー。アルトリア・ペンドラゴン。今、再び我が愛するマスター…望月鞠絵の元に召喚されました……」

「セイバー……？」

まさか……『あの時』の記憶が残って……？

本気で困惑しまくるオレを余所に、セイバーはオレの事を優しく抱きしめながら涙を流していた。

## 聖杯戦争

「……………えっ？」

一瞬、オレは何が起きたのか正しく認識出来なかった。

目の前にいるコイツはなんて言った？

「お…お前…まさか…『あの時』の事を覚えていて…？？」

「はい。しっかりと鮮明に覚えていますよ。初めて貴方と出逢った日の事も、共に数多くの困難を乗り越えて行つた日々も、一緒に一夜を過ごした事も、最後の瞬間も…。」

「あ…ああ…。」

おい…これは何の奇跡だ？

奇跡否定派の人間であるオレの目の前で…奇跡が起きただつて

……………？

「ごめん…ごめんよ…オレは…あの時…お前に…。」

「それに関しては『あの時』にも言ったでしょう？ 鞠絵は何も悪くは無い。今でも、私は貴方達の選択が間違っていたとは思っていない」「だけど…。」

「…普段は科学者として凛としているのに、変な所で人間らしい部分もある。そんなアナタだからこそ、私は鞠絵のサーヴァントとして戦う決意が出来た」

「うん…。」

「この温もり……忘れたくない…。」

オレのよく知っている……本気で愛していたセイバーだ…。」

「えっと……先生？」

「なんで召喚されたサーヴァントと博士がお知り合いなんでしょうか…？」

「ラブコメだ…。」

あ……こいつらの事を完全に置いてけぼりにしてた。

『ちよ…ちよつと待ってくれ！ それはちよつとおかしいぞっ!』

「何がですか？ というか、この声は…。」

おっと。まだセイバーは詳しい『事情』を知らないんだつたな。

いい位置だから、このまま耳打ちしておこう。

「セイバー……実は……」

「成る程。承知しました」

一先ずはこれで良しと。

昔から物分りは良かったから助かる。

『召喚された英霊が過去の聖杯戦争の記憶をそのまま覚えているなんて有り得ない！ 例え、前と同じ英霊が召喚されたとしても、それは姿形が同じだけの完全な別人だ！ それなのに……』

「そうですね。どなたかは存在じませんが、言いたいことは分かります。ですが、私にはどうして自分が嘗ての記憶を保持したまま現界出来たのかが分ります」

『なんだってっ!?!』

ほう……それはオレも聞きたいな。

「これはあくまで私の予想ですが、今回の召喚が嘗ての召喚時の状況に限りなく近いせいだと思います」

『以前と同じ状況……そうか！ 召喚された場所が『冬木市』で、召喚したマスターが『望月博士』……。恐らく、召喚の媒体となったのは、二人の間に紡がれた強い絆や記憶……。形ある物じゃないから効果は薄いかも知れないが、君達二人の場合は例外だろうし……』

オレ達だけが例外……。ね。

そう言われると、少し照れるな。

「この日、この時がやってくるのをずっと待ってました。本当に……また鞠絵に会えて嬉しい……」

「オレもだよ……アルトリア……」

ちくしょう……こんなの反則だ……。

完全に不意打ちじゃないか……。

「あ……あのー」

「オルガ？ 一体どうした？」

「三人の話を聞いていると、まるで先生が以前に聖杯戦争に参加していたみたいだに聞こえるんだけどっ!?!」

『あ……』

無意識の内に言ってしまったか……。

「……ロマーニ」

『そうだね。これに関しては所長も決して無関係とは言えないし、いつかは必ず話さなければいけない事だった。それが多少、前後しただけって事だろう』

「そうだな……」

本当は、もう少し落ち着いた場所で話したかったんだけどな。

ここで変に先延ばしにしたら、却って怪しまれるだろう。

「お前の言う通りだよ、オルガ。嘗てオレは、2004年の冬木で起きた『聖杯戦争』に参加をしたマスターだった。その際に召喚したのがセイバー……つまり」

「私……という訳です」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

まだ周囲に何の反応も見受けられないので、焚火を囲むようにして座り、ポツポツと通信越しのロマーニを交えながら話し出す。

『何も知らないマシユや立夏ちゃんのためにも、ここは一から説明しよう。よく聞いてくれ』

「はい」

『まず、カルデアは『カルデアス』という地球をモデルで未来を観るんだ。それと同時に、『ラプラス』と呼ばれる使い魔を介して過去の記憶を集計していく』

「要は、余り公にならなかった表舞台の歴史や人知れず闇へと葬られていった情報を拾ってくるのがラプラスの役目だと思っていればい

い」

『で、そのラプラスによる観測で、2004年の冬木市にて、非常に特殊な『聖杯戦争』が観測されたんだ』

ロマニも上手いもんだ。

あたかも、自分が部外者みたいな話し方をするんだから。

「聖杯戦争……？ その『聖杯』とは、数多くの伝説や神話に登場する、あの『聖杯』の事ですか？」

「そうだ」

「所持している者の全ての願いを叶える『万能の願望器』であり、あらゆる魔術の根底に存在しているとされる魔法の窯……」

「すつごうい！ そんなのが現実に存在してるんだ〜！」

「まあな」

マシユのはなんとも模範的な解答で、逆に藤丸の反応は実に一般的だ。

「確か……冬木の街にいた御三家である『アインツベルン』と『遠坂』と『間桐』の家が聖杯を完成させて、それを起動させるために七騎の英霊を召喚した……のが、聖杯戦争の始まりでしたよね？ 先生」

「その通りだ、オルガ。ちゃんと、オレの講義は聞いていたみたいだな」

「勿論です。一字一句漏らさず、全てノートに書き記して覚えましたから〜！」

それは……感心すればいいのか？ それとも呆ればいいのか？

『そして、街中では人々の与り知らぬ中でサーヴァント達が呼ばれていた』

「因みに、聖杯戦争のルール自体は非常に単純明快だ」

「七人のマスターが自身の召喚したサーヴァントと共に戦い合い、生き残った最後の一人が聖杯を手にする。現代風に言えば『バトルロワイヤル』と表現するべきかと」

最後はセイバーが締めくくってくれた。

バトルロワイヤル……か。この世で最も聖杯戦争に相応しい言葉だな。

『けど、その事をカルデアが知ったのは2010年。聖杯戦争が経過してから6年も経った後の事だった』

『その時のデータを基に前所長：オルガの父親であるマリスビリーとオレの二人の共同研究で、とある召喚術式を完成させた』

『それこそがカルデアの誇る英霊召喚システム、通称『Fate』。ラプラス、カルデアスに続く第三の発明だね』

「第三……？ あの近未来観測レンズ『シバ』は違うのですか？」

「あれは基本的にレフの発明だからな」

「正確には、私と先生とレフの三人で行った共同開発なんだけど」

「オレがやったのはサポートだけだよ」

『いや…博士は所長が寝ている時も頻繁にレフ教授と一緒に徹夜をして頑張っていたじゃないか』

「……そんな事もあったな」

オレにとつて徹夜なんて日常的なんで、すっかり忘れてたよ。

「兎に角、この冬木の地こそがサーヴァントという存在の発祥の地なのさ。それさえ覚えていればいい」

「は〜い」

気の抜ける返事だな……。本当に大丈夫か？

「ま…待って。私が知っている限りでは、あの時の聖杯戦争の勝者はセイバーだった筈。ってことは、今は先生が聖杯を所持しているって事？」

「えええええええええつ!?!」

「いや…それは……」

そういや、講義でんな事も話したっけ。  
割と素え忘れてたわ。

「あの〜…ちよつといいですか？」

「どうした？」

「ずっと聞こうかどうか迷ってたんですけど…『英霊』とか『サーヴァント』とかってなんなんですか？」

「あ…貴女……まさか、本当に何も知らないでカルデアに来たのっ!?!」

「はい……ごめんなさい」



「いや、別に謝る必要はないからな？ ガチの一般人だったお前が何も知らないのは、寧ろ当然の事だから」

『そうだね。こんな事さえ起きなかつたら、ゆつくりとボクや博士で色んな事を教えてあげただけだね』

「仕方がないな。簡単ではあるが、オレが藤丸に講義してやろう。一応、マシユも聞いておけ」

「はい！ 博士の講義は久し振りで楽しみです！」

「そんなに面白いもんでもないと思うんだけど……」

それじゃ、オレだけ立つてからそれっぽさを演出するか。

「サーヴァントつーのは、お前にも解り易く言えば、オレ達がいる魔術世界における最上位に存在する使い魔のようなもんだと思え」

「使い魔……」

「そうだ。これまでの人類史に残っている英雄や偉人、偉業や概念と言った物を霊体にして召喚したのがサーヴァントとなる」

「霊体……ってことは、セイバーさんも本当は幽霊って事？」

「幽霊とは少し違う気もしますが……概念としては同じようなものかと。流石に、幽霊とは違って物体をすり抜けるような事は出来ませんが」

まあ……似て非なる存在ではあるよな。

「実在をした英霊であれ、実在しなかった英霊であれ、連中が『地球という惑星に存在していた事実』だけは間違いないからな。その事実を情報に変えて、この星に蓄積された情報を変換して形にして出現させる……それが『英霊召喚』の簡単な仕組みだ。ここまではいいか？」

「な……なんとか……私の脳細胞がオーバーヒート寸前ですけど……」

「心配すんな。いざって時はオレがお前の脳細胞をオーバーフリーズさせてやるから」

「それは本当に大丈夫なの……？」

勿論、冗談に決まってるだろ。

こいつには後で何故かポケットに入っていたアメちゃんをくれてやろう。

「要約すると、過去の英霊を使い魔としたものが『サーヴァント』で、

サーヴァントと契約をして使役する者が『マスター』だと覚えておけばいい」

「りよ……りよーかいです……」

本当に大丈夫か……？

「それでもって、サーヴァントには基本的に七つのクラスが存在している」

「クラス？」

「RPGで言うところの『ジョブ』みたいなもんだと思えばいい」  
「にやるほど……」

『クラス』つてのは、英霊の逸話や能力なんかで変化するんだ。英霊を丸ごと霊体として再現するのは非常に困難でな。通常の魔術師ではどうしてもリソース……つまりはメモリーが足りないんだ」

「メモリー不足かく。確かに、それじゃあ無理だよね」

「その通り。だからこそ、英霊達が持つ一部の側面だけを固定化して召喚できるようにする」

「その『クラス』つて、どんなのがあるんですかく？」

「聞かれると思っていたよ。今から説明してやる」

そこら辺に落ちている棒を使って地面に簡単な絵を描きながら説明していく。

「遠距離攻撃が得意で、飛び道具を持つ『弓兵』」  
アーチャー

「おおう」

「最速のスピードを誇り、槍を使った戦いを得意とする『槍兵』」  
ランサー

「ほえ……」

「高い騎乗スキルを持ち、機動力が高い『騎兵』」  
ライダー

「ふくん……」

「魔術が得意で、自分の陣地となる工房作成技術が高い『魔術師』」  
キャスター

「え？ キャスターってニユースの人じゃないんだ……」

「高い気配遮断能力を持ち、サーヴァント戦よりは対マスター戦に特化している『暗殺者』」  
アサシン

「怖……」

「全ての能力が非常に高い代わりに、全ての理性が失われた戦士

『狂戦士』  
バ「サーカー」

「なんか大変そうだね……」

「そして、総合能力が総じて高く、剣を使った戦いが得意な『剣士』<sup>セイバー</sup>。これだけで全部だ」

「セイバー……って、セイバーさんの事？」

「はい。私は確かにセイバーのサーヴァントです」

そして、オレの自慢のサーヴァントでもある。

「いかなる英霊も、絶対に何れかのクラスになって顕現する。多少の例外はあるけどな」

「例外って？」

「オレが知っているところだと『復讐者』<sup>アウエンジャー</sup>や『裁定者』<sup>ルーラー</sup>とかかな」

「なんか凄そう……」

「かもな。で、クラス名つてのは、同時にサーヴァントの真名……本当の名前を隠す為に必要でもある」

「なんで隠す必要があるんですか？」

「英霊ツツーのは誰も彼もがとてつもない能力を秘めているが、有名な人であればある程、同時に弱点も有名になっちゃう。分りやすい例を言えば、ギリシャ神話における大英雄である『アキレウス』や、龍殺しで有名な『ジークフリート』なんかだな。この辺はお前だつて知ってるだろ？」

「い……一応。歴史の授業で習ったような気が……」

「今はそれでいい。英霊を再現するってことは、同時に弱点も引き継いでしまうんだ。だからこそ……」

「正体を隠す為にクラス名で呼び合うって事ですね」

「正解だ。意外と物分りがいいじゃないか」

「えへへ……」

こいつ、本当はやろうと思えばできる奴なんじゃ？

多分、やらないだけだな。

「けど、真名を隠す理由はそれだけじゃない。もう一つあるんだ」

「それは？」

「それぞれのサーヴァントが持つ最強の切り札にて真骨頂。英霊の持

つ奇跡にして、その存在が結晶化したもの。それこそが『宝具』  
「ほーぐ？」

「お前には『超必殺技』か『秘奥義』って言った方が分りやすいか？」  
「超必殺技！ 秘奥義！ なにそれカッコいい!!」

「カッコいいかどうかは、英霊にもよるかな〜……」

少なくとも、セイバーの宝具はめっちゃカッコいいけどな！

「性能や範囲も多種多様だ。対軍や対人、対城なんてのもあるな。攻撃系や補助系、こればかりは言い出したらキリがない。それらを隠蔽する為にもクラス名で呼び合うことは必須なんだ。宝具がバレたら、そこから芋づる式に真名も判明してしまうからな」

「頭がこんがらがってきそう……」

そこは頑張れとしか。だから、頑張れ。

「取り敢えずはここまでだな。また何か、気になることがあつたら遠慮なく聞いてこい」

「は〜い！ もっちーせんせ〜！」

「もっちー先生って……」

それは流石に初めて呼ばれたぞ。

「お見事です、鞠絵。素晴らしい説明でした」

「そ…そうか？」

そーいや、セイバーの前でこんな事をしたのって初めてだったな。

「それで、先生が聖杯戦争に参加していた理由って……」

「ちよつと待て」

「え？」

話の続きをしようとしたオルガを止めてから、周りを見渡す。  
すると、いきなりの瘴気と共に例の骸骨兵たちが姿を現す。

「マスター」

「ああ。分ってるさ」

セイバーの隣に並び、弓を構えて矢を番える。

「ウォーミングアップには丁度いい相手だ。やろう……セイバー！」

「ええ！ マスター！」

これを仕向けているのが誰なのかは知らないが、こんな雑魚程度で

オレ達を止められると思ってるんなら、思い知らせてやるよ！  
自分達が一体誰に喧嘩を売ったのかをな！

## セイバーともつちー

突如としてオレ達の目の前に現れた骸骨兵士達。

もう既に何度か交戦をした雑魚なので、倒すこと自体は非常に容易い。

だからこそ、セイバーの準備運動にはもってこいな相手でもある。

「セイバー、準備はいいか？」

「いつでも」

昔、聖杯戦争中に何度も傍で見続けた、自信に満ちた不敵な笑み。

ああ……本当にセイバーが戻って来たんだなって実感するよ。

インビジブル・エア

「『風王結界』は？」

「この通り」

セイバーが右手を見せる。

そこには魔力の宿った完全不可視の剣が握られていた。

これこそがセイバーの持つ宝具の一つ。

自身の持つ剣を透明にすることで、その正体を不明にするもの。

単純だけど、だからこそ効果は高い。

「よし！ それなら……」

チラつと後ろを向いてから、ちゃんと後方に退避している三人を確認してから指示を出す。

「マシユ。お前は二人を守る事にだけ専念しろ。戦闘経験の浅いお前が下手に前に出ることは逆に危険だ。いいな？」

「は……はい！ 了解です！」

「いい返事だ。藤丸もいいな！ マシユの傍から絶対に離れるなよ！」

勿論、オルガもだぞー！」

「う……うん！ 分かったよ！」

「せ……先生……私は……」

怯えた目でこつちを見てくるオルガ。

恐らく、所長としての立場と心の中の恐怖とでせめぎ合っているんだらう。

「大丈夫だ。お前の事はオレ達が絶対に守ってやる。オルガはカルデ

アの所長、つまりは『頭』だ。お前が無理をする必要はどこにもない。ドンと構えて、後ろから偉そうに命令だけをしていればいい。それだけでも、周りの連中の士気は上がるもんさ」

「そ…そうよね…先生の仰る通りよね。私はカルデアの所長…こんな所で死ぬ訳にはいかない存在…」

「どうやら、少しだけ本来の自分を取り戻し始めたか。」

「これでこそ、オレの教え子だ。」

「そういえば、まだ彼女達の事を教えて貰ってませんね。この戦闘の後に教えて貰いますよ？」

「いいともさ。何にせよまずは…」

「空気を読まずに気掛けてきた骸骨兵に矢を射てから粉碎する。」

「まずは一匹だ。」

「雑魚掃除をしてからだ」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「はあああああつ!!」

セイバーが骸骨兵たちが集まっている場所に向けて突撃し、その一雑ぎで一掃する。

その威力はまさに一撃必殺。

最優のサーヴァントに相応しい仕事だ。

「凄い……」

「あれがサーヴァントの戦闘力……」

「これ…現実なんだよね……わっ!？」

不意を突いて後方から骸骨兵が矢を放つが、マシユの咄嗟の防御に

よって防がれた。

それでこそ盾の英霊『シールド』だ。

「先輩！ 大丈夫ですかっ!？」

「う…うん。マシユ、ありがとう」

これで後ろはマシユに任せても大丈夫だって分かったから、こっちは遠慮なくどんどんと前に行きますかね。

「いい加減に犬が卒倒するんだよ!」

「鞠絵。それはどういう意味ですか？」

「犬が卒倒。つまり、ワン・パターンってことだ」

「成る程。相変わらず、鞠絵は面白い事を言いますね。はあっ!!」

こんな風に、何気ない会話をしながらも、オレとセイバーは次々を群がってくる骸骨共を粉々にしていく。

「あ。矢が無くなった。それなら!!」

もう用済みなので、弓はそこらへんにポイ捨てしてから、背中に刺しておいた剣を手にとってから骸骨をぶった斬る。

切れ味は並だが、今は贅沢を言ってられないか。

「見事な剣筋です。鍛錬は怠ってはいなかったようですね」

「一流の科学者たる者、文武両道なのは当然だからな」

でも、この剣もいつまで持つか分らないし、いざとなったら適当にこいつらの武器をまた奪うか。

今回は槍を持つてる奴もいるみたいだし。

「先生が魔術師としても科学者としても超一流だったのは知ってたけど、まさか直接的な戦闘も得意だったなんて…」

「もつち…：…なんか凄いな…」

「あれが望月博士の実力なんですね…」

数が少なくなってきたな。それじゃあ…

「セイバー！ 例のアレで残った連中を掃除してやれ!」

「お任せください！ はあああああああああああつ!!!」

セイバーの剣に魔力が集中されていく。

剣を覆っている風が暴風となり、周囲の空気すらも巻き込んでいく。



「風よ！ 荒れ狂え!! 風王鉄槌!!!」

ストライク・エア

裂帛の突きと共に解放される暴風の一撃。

強大な破壊力を宿すこの風は、並の連中ならば一溜りも無い。実際、目の前の標本野郎どもは全員揃って塵となって消えた。

「風…いえ、これは竜巻…?」

「なんて威力…」

「すっご…」

よっし！ これで少しは落ち着いて話せるな。

「おい、お前達は大丈夫か…つて、どうした?」

「「いえ…なんでもありません」」

「んあ?」

揃いも揃って本気でどうした?

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

そんなわけで、さっきまでの話の続きを再開することに。

でも、流石に立ち止まってからつてのはアレなので、色んな場所を調べながら話す事に。

「鉄橋に港に教会…どこにもそれらしい手掛かりは有りませんでしたね」

「まあ、そう簡単に見つかるとは思ってなかったけどな」

寧ろ、この焼野原から何かの手掛かりを見つけれたら、それこそ普通に凄い事だ。

「で、話の続きなんですけど」

「なんだ?」

「先生とセイバーが聖杯戦争の勝者じゃないのだとしたら、本当の勝者は誰なんですか？」

「それは……」

少しだけ通信機を見て、向こう側にいるロマニの意見を求める。

『いいんじゃないかな。さつきも言った通り、所長も決して無関係じゃない。いつかは必ず話す事にはなるんだし、それが少しだけ前後するだけさ』

「……そうだな」

オレもロマニも、覚悟を決める時が来たって事か。

「余り回りくどい事を言うのは好きじゃないから、結論だけ先に言おう」

「……はい」

「あの聖杯戦争において、真の意味で勝利したのはキャスターのサーヴァントだ」

「キャスター……魔術師の英霊が？」

「そうだ。そして……当時、キャスターのマスターをしていたのが……」

『マリスビリー・アnimスファイア。つまり、前所長だよ』

「え……？」

オルガの動きが止まり、呆けた顔になる。

無理もない。マリスもこいつには自分がマスターだったことは教えてないって言ってたからな。

「あの頃、マリスの助手をしていたオレは、あいつに誘われるがままに聖杯戦争へと参加した。オレには聖杯に掛ける願いなんて存在してなくて、単純に今まで世話になったマリスへの恩返しのもりだった」

『望月博士を誰よりも信頼していた前所長は、聖杯戦争を確実に勝つために、サーヴァントとは別のパートナーを仲間にするに決めた。それが……』

「先生……だった」

「そうだ。その戦いでオレはセイバーを召喚し、マリスはキャスター

を召喚した。マリスの場合はどこかで発掘したらしい聖遺物を触媒にして召喚をして、オレはマリスから渡された円卓の騎士の誰かが纏っていたと思われる服の一部である布切れを触媒にしたんだ」

あれは冗談抜きでランダムだったな。

円卓の誰かが来るのは確かだったけど、まさか筆頭であるアーサー王を引き当てるなんて誰が想像する？

今更だけど、あれってどこで手に入れたんだろうな？

「セイバーとキャスターで力を合わせて戦い抜き、次々と他のサーヴァント達を撃破していった」

『そうして、最後に残ったのはセイバーとキャスターだけになった』

あの時の事だけは今でも覚えてるし、これから先も絶対に忘れるつもりはない。

オレは……オレだけは……！

「オレは当初の予定通り、キャスターとマリスを勝たせる為に令呪を使ってセイバーに命じた。『自害せよ』……つてな」

「なっ……!?!」

「??？」

はあ……これで絶対に嫌われたな。

「二人とも、どうかマスターを責めないでください。あの時の彼の判断は決して間違つてない。今も私はそう思っていますから」

「で……でも……それじゃあセイバーさんが……」

「いいのです。そもそも、私の願いは叶えていいようなものじゃなかった。マスターとキャスターと出逢わなければ、その事にすら気が付かなかつた。だからこそ、私は自らの意志でキャスターに勝利を譲ったのです。彼こそが聖杯戦争の真の勝利者として相応しいと思つたから」

つたく……オレには勿体無いぐらいに素晴らしいサーヴァントだよ……お前は……

『博士も何度も何度も苦しんだんだ。本当は仲良くなるつもりなんてなくて、最後まで淡々と作業をするように終わる筈だった。けど、幾多の苦難を乗り越えていく内にセイバーと博士の間にはとても強固な

絆が生まれた。その絆が博士の心に罪悪感と言う苦痛を生み出してしまった』

「……聖杯を手にしたマリスは、それを利用して莫大な財を手にし、それを使ってカルデアスを完成させたんだ」

「カルデアスは……聖杯によって生み出された……？」

「そうなるな。その後、他のロードたちの介入を危惧したマリスは、全ての事実を隠蔽したんだ。自分が聖杯戦争に参加したって事も、勝利したのがキャスターって事もな」

『その代わりとして、博士が聖杯戦争に参加した事実だけは普通に公表され、彼がセイバーのサーヴァントを伴って戦い、その果てに勝利を掴み聖杯を手にした……となったんだ。表向きはね』

「それなら、今度は先生にロードたちが群がってくるんじゃない？」

『忘れたのかい？ 博士はあの『望月陸奥守』博士と『望月京子』博士の実の息子だ。流石のロードたちも、世界一の超天才科学者と世界最強の魔術師を兼任している夫婦を敵に回すような愚行は犯さなかった』

「こつちとしてはかなり複雑な心境だったけどな」

まだまだ自分が未熟だって思い知られたようなもんだし。

「偽りの情報とはいえ、聖杯戦争の勝利者であるオレを懐柔しようと企むバカは後を絶たなかった。冗談抜きでうざかったから、オレは知り合いのロードに頼んでから、時計塔で講師をすることにしたんだ。あそこなら、連中もそう簡単には手出しできないからな」

「成る程……因みに、その知り合いのロードって誰ですか？」

「ロード・エルメロイ二世だよ。あいつとは昔から不思議と気が合っ  
ててな。ついでに何故か義妹のことを頼まれたりもしたっけ……」

本当に癖が強すぎる二人だったなあ……。

今は何をしているのやら。

「それを聞いたマリスが『だったら、私の娘も頼んでもいいかな？』って言うてきたんだよな」

「そうでしたね……本当に懐かしいです」

あの頃は引っ込み思案で人間不信の塊だった少女が、大きく成長し

たもんだよ。

「あの戦いの後で、鞠絵はそのような人生を歩んでいたのですね。どうして『先生』と呼ばれているのか不思議でしたが、納得です」

「いい経験ではあったな。今までは自分だけの世界だけで完結してたけど、誰かに何かを教えることは凄く新鮮だった」

本当に……人生は分からないもんだよな。

何が自分の糧になるか全く分らないんだから。

（本当は『失った筈の両腕』の事も聞きたいですが、それはもう少し後にした方が良さそうですね……）

セイバーがオレの両腕を見ている？

あ……そっか。無くなった腕が普通に存在してるんだから、気にもなるよな。

「でも、どうして父さんは聖杯戦争に参加することを決めたのかしら……。お金が目的なら、別の方法もあったでしょうに……」

「……あの頃から既に、マリスは自分の死期を悟ってたらしい。あと10年も生きられないってな」

「そんな……」

「だからこそ、聖杯を利用するなんて強硬手段を取らざるを得なかったんだ。聖杯を使って自分の死期を伸ばそうとしないのが、なんともアイツらしいよ。あくまでも、自分は土台をつくるだけで、後の事は未来に生きる人間達に全てを託すつもりだったんだからな」

本当に……バカだよ……あいつは……。

「取り敢えずはこれぐらいだな。満足か？」

「はい……。ところで、どうしてロマニは色々と詳しかったのかしら？」

『ボクは密かに博士や前所長から聞かされていたんだよ。無理矢理に共犯者にする為にね。全く……昔からずっと、君達二人はボクにばかり貧乏くじを引かせたがるんだから……』

「別にいいだろ。それだけ信頼されてるって証拠なんだからさ」

『今更そんな事を言われてもな……』

野郎……珍しく褒めてやったのに……！

戻ったら覚えとけよ？ 絶対にそのウザったい髪をツインテールにしてやる。

「はい。これで一先ずは話は終わりだ。さつきからずっと放置してたけど、そろそろお互いに自己紹介ぐらいしようよ」

「「あ……」」

こいつら、完全に忘れてたな。

「また襲撃が来ない内に、簡単に名前ぐらいは教えあいな」

「「は……はい」」

名前も知らないままで連携なんて出来ないからな。

仲良くなるための第一歩って奴だ。

……なんか、今のオレのポジションって引率の先生みたいじゃね？

## 対英霊戦

「成る程……。そのような事情があったのですね」

召喚（オレにとって）は再召喚）されたばかりのセイバーに、こっちの現状を話しながら、三人と自己紹介をし合って貰った。

「オルガマリー……貴女があの子のマリスビリーの娘だとは。よく見れば、父親によく似ている。特に、その鼻立ちや目元なんかが」

「セイバーは父さんとも知り合いだったのよね？　貴女から見た父さんはどんな人だった？」

「そうですね……。一言で言い表すのは難しいですが、なんとも掴み所がない人物のように思えました」

「掴み所が無い……ね」

「はい。別に冷徹な人物と言う訳ではないのですが、まるで雲のような、幻のように捉えどころがない人間でした。けど、決して悪人の類ではないとだけは断言出来ます」

「どうして？」

「キャスターや、助手である鞠絵と話している時はよく笑顔を浮かべていたからです。少なくとも、私がよく知っている魔術師達とはいい意味で違った印象を受けましたね。まあ、それは鞠絵もなんですか？」

オレの場合は魔術師ってよりは科学者の側面の方が強いしな。

「そして、マシユ・キリエライト。自分でも不思議なのですが、なんでか貴女の事は他人のようには思えない」

「な……なんでですか？」

「それは私にもさっぱり。ただ、どうも初対面のように思えなくても、私が貴女と会ったのは間違いなく今日が初めての筈」

「ですよね……。だとしたら」

「なんでなのでしょう？」

「いや。ハモられながらこっちに聞かれても」

こいつら、意外と息があつてるんじゃないかなろうか。

もしか、マシユに力を貸す為に融合した英霊ってのは、円卓の関係

者なのか？

「立香は少し前までは完全な一般人だったそうですね」

「うん。これも、最初はちよつとしたバイトのつもりだったんだけど、いつの間にかこんな事に巻き込まれちゃって……」

「……後悔してますか？」

「……ううん。それだけは絶対にならないかな」

「どうして？」

「私ってさ、学校の成績も運動神経も平々凡々で、良くも悪くも中途半端なんだよね。これといった特技も無いし、趣味って言えるような事も無い。何かしなきゃって思ってはいるんだけど、いつも三日坊主で終わっちゃう」

「……こいつもこいつなりの悩みがあつたんだな。」

「もしも無事にカルデアに帰れたら、悩み相談ぐらいは受けてやるか。」

「そんな何もない私だからこそ、どれだけキツイ、辛いつて思うようなことがあつても、後悔だけはしないって決めてるんだ。自分のやってきたことが、間違いではあつても、無駄ではないと信じたいから」

「間違いであつても、無駄ではない……か。」

「ガキの癖にいい事を言うじゃないか。」

「少しだけ見直したよ。少しだけな。」

「……いい目をしていきますね」

「ふえ？」

「確かにあなたはマスターとしては素人かもしれない。でも、その心意気だけは充分に一人前です。きつと、マシユと融合した英霊も、そんな貴女だからこそ力を貸そうと思つたに違いありません」

「そ……そうかな……」

「この二人も仲良くなりそうで何よりだ。」

「オルガも意外そうな目で見てるしな。」

「あ……あの、セイバーさん。少しいいですか？」

「なんですか、マシユ？」

「セイバーさんは……その……あの『アーサー王』なんですよね？」



「はい。確かに私の真名は『アーサー・ペンドラゴン』に間違いありません。鞠絵は私の事を『アルトリア』と呼んでいます」

「アルトリア？」

チツ……余計な事を。

『アルトリア』つてのは、『アーサー』をローマ字表記した場合の女性形なんだよ」

「「おお〜」」

これぐらい知っとけ。特にオルガ。

「では、やっぱり宝具はかの聖剣『エクスカリバー』なんでしょうか……」

「世界一有名な剣だよ」

「そうですね。私の名が判明した時点で、宝具の事も判明するも同然ですね。仲間である貴女達ならば、知られても問題ないでしょうが」  
「仮に敵に知られてても、それを真っ向からぶっ倒せる力を持つてるのが『エクスカリバー』つて聖剣なんだよ」

実際、冬木の聖杯戦争でも、その威力にどれだけ助けられたか。

「よし。自己紹介はこのこれぐらいで終わりだ。そろそろ移動するぞ」

「「「はい」」」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「どこまで行っても焼け野原、焼け野原……。見た感じ、住人の痕跡も無いみたいだし、本当にここで何があったってのかしら……」

オルガの言った通り、行けども行けども特に景色は変化しない。

何処も彼処も廃墟ばかりで、目新しい手掛かりっぽい物は全く見つからない。

「ロマニ。そつちでここら一体の生体反応は検知できるか？」

『それぐらいならなんとか。でも、さつきからずつと探してるけど、君たち以外の生体反応は全く見当たらない』

「そつか……」

矢張り、この場での生存者はオレ達だけって事になるのか。

せめて、現地の人間が生きてさえいれば、そいつから色々情報収集が出来るんだけどな。

「あつついね〜」

「そうですね。周りが全て火で包まれていますから、かなり気温が高くなっているようです。こまめに休憩や水分補給なんかをしないと、すぐに脱水症になるかもしれません」

この環境も、現在のオレ達には大きな敵なんだよな。

カルデアから送られてきた僅かな補給物資の中に水があったから、今はそれを少しずつ飲みながら進んでいる。

「そもそも、カルデアスを灰色にする異変って何なのかしら……。未来が見えなくなるって事は、即ち人類が消えてなくなるって事？」

さつきからオルガは歩きながらブツブツと考え事をしているな。

足元に注意して歩かないと、コケても知らないぞ。

因みに、セイバーは最後尾に位置して殿を務めてくれている。

先頭はこのオレだ。

「先生。先生のご意見を伺ってもよろしいですか？」

『そうだね。ボクも博士の意見が聞いてみたい』

「完全な憶測になるけど、それでもいいか？」

「はい。構いません」

「分かった」

そこまで言うなら、話してやるか。

仕方がない奴らめ。

「まず、この特異点じゃ世界の抑止力は上手く機能してないと見るべきだろうな」

「つてことは、やっぱりこの世界は『ボルト』みたいな存在なんですね」  
「多分な。で、これまでに幾つも存在している人類史におけるターニングポイント。素人である藤丸にも解り易く説明すれば、分岐点、もしくは選択肢だな。これを全部間違った方を選んでしまった結果が……」

「この世界の惨状……」

「つまり、ここってバッドエンドの世界なわけ……?」

「そうなるな。それは見れば一目瞭然だろうけど」

寧ろ、この光景がバッドエンド以外に見える奴は確実に頭がイチャチャってる奴だな。

「問題は、その分岐点は何なのかって事だな。これだけの大災害が発生してるんだ。どんなに足掻いても誤魔化しなんて効かない筈。となれば間違いなく、この地、この年でかなり大きな『何か』が発生したことになる。けど……」

『情報にある限りでは、2004年の冬木市でここまでの規模の災害は発生していない。これは明らかな矛盾だよ』

……ん? ちよい待てよ?

2004年の冬木市で起きた大きな出来事……まさか……!

(いやいやいや! 確かに、一番可能性が高そうなのはそれだけど、あれはちゃんと街にも全く被害を出さずに終わらせられたじゃないか! 聖杯だってマリスの手に渡って……)

あ……そうか……。

(分かったぞ……! 確証はないけど、もしもこの世界における『分岐点』がアレならば、この惨状も納得が出来る! とてつもなく巨大な『IF』……この年のこの街に存在している筈の『二人の人間』がいなかった場合……)

ということは、ここは……この『特異点』は……。

「!!」

突如、こちらに向けて鋭い殺気が飛んできた。

これまでの骸骨兵たちとは比較にすらならない程の殺気。

種類は違うが、この『感じ』はよく覚えている。

実に久し振りの感覚だよ……！

「マスター！」

最後尾にいたセイバーも急いで駆け付け、剣を構えながらオレ達の前に躍り出る。

同時にオレも、セイバーの近くでいつでもサポートに入れるように構えた。

「え？　ちょ……どうしたの？」

「お二人とも？」

「せ……先生？」

まだこいつらは気付いていないのか。

けど、気配は消えてないから『アサシン』じゃない。

これは純粹に殺気を飛ばしてるだけだ。

「ロマニ!!」

『分かってる！　本当なら今すぐにも撤退を推奨したいけど、博士とセイバーがいてくれるなら、何とかなる！』

「こらー！　ちゃんと説明しなさい！　何が起きてるのよっ!？」

『敵の反応が出たんだ！　二人はこっちよりも早く分かったみたいだけどね!』

「て……敵っ!?!」

急いでマシユは盾を構えてからオルガと藤丸の前に出て、いつでも防御できる体勢になる。

『しかも、この反応は今までとは訳が違う！　そこに迫ってきているのは……』

ゆつくりと、だが確実に近づいてくる黒い影。

霧に掛かって良く見えないが、どうやら女のようなだ。

長い髪に手に持つ鎖付きの短剣。

長射程の相手か……。

「ねえ……あれって……まさか……」

「その『まさか』だよ、オルガ……!」

セイバーがいつでも飛びかかれるように構えると、相手もまた攻撃態勢に移行した。

「あいつは……間違いなく『サーヴァント』だ！」

「サー……ヴァント……！」

ここでサーヴァントが出てくるってことは、さっきまでオレが考えていた事が正しいって事になるじゃねえか！ クソツタレ!!

しかも、あいつは……!!

「セイバー」

「はい。貴方の言いたいことは分かります」

「じゃあ……」

視線だけをこっちに向けて、セイバーははっきりと断言した。

「知りません」

「だろうな。オレも知らない」

本当に……いつの世も、最悪の予想だけが良く当たる。

良い予感は全く当たらないのにな。

「マシユ」

「は……はい！」

「最大級に集中しろ。そこから一步でも前に出れば……死ぬぞ」

「!!!」

脅すように気が引けるが、それでこいつらが生き残ってくれるのなら本望だ。

「お前はいつも通り、二人と自分の身を守る事だけに全てを注げ。いいな？」

「わ……分りました！」

これでいい。マシユは真面目な子だから、こんな時は絶対に言う事を聞いてくれる。

「霧のせいで姿がよく見えないから、姿形でクラスを判別するのは難しいか……」

「武器から察するに、ランサー辺りが妥当ですが……」

「それだけじゃ判断材料には弱すぎる。つーか……」

さっきの骸骨兵から奪った槍を構えて前に出る。

「奴がどのクラスだなんて、ここで倒せば問題ないじゃんか」

「全く……貴方らしいですね、鞠絵。では……」

「ああ。やるぞ！ ついでに、あいつから色々聞き出す!!」  
「ええっ!!」

こうして、11年振りのサーヴァント戦が始まった。

また会おうな

随分とのんびりとした足取りで歩いてくる謎のサーヴァント。見た目だけじゃクラスの判別は難しいが、そんな事は関係ない。倒してしまえば皆同じだ。

「どうしてですか……」

「ん？」

こいつ…喋った？

あ…いや、英霊なんだから喋れて当たり前なだけだ。

でも、会話が可能って時点で少なくとも、こいつのクラスがバーサーカーじゃない事は確定したな。

「どうして、貴女がそちら側にいるのですか？」

「なに……？」

あなただって…こいつは誰に何を言っている？

ちゃんと分かるように話しなさいっての。

「いえ…違う。貴女は違う。貴女は彼女じゃない」

彼女じゃない……だって？

この発言から察するに、恐らく……。

オレの予想が増々当たっている可能性が高まってきたな……。

「セイバー。どう思う？」

「多分、今のは私に向けて発した言葉かと」

「だよな……」

頭が痛くなりそうだよ……。

でも、お蔭でやるべき事がハッキリとした。

けれど、念には念を入れて然るべきだろうな。

「大体の予想は出来ませんが、今はいいでしょう。どちらにせよ……」  
敵性サーヴァントが腰を低くして、今にも突撃してきそうな体勢を取る。

まるで、陸上選手のクラウチングスタートのように。

「ここで皆殺しにすれば問題ないのですから!!」

瞬間、サーヴァントが凄まじい速度で突っ込んできた！

だけど、それはあくまでも『常人』の範疇の話。

だからこそ、オレはセイバーに指示を出しつつ、こいつに出会って感じた『もう一つの可能性』を試すことが出来る。

「セイバー!!!」

「了解です!!!」

目を合わせただけでオレが言いたいことを理解してくれたようで、すぐに少し軸からズレるような形で走り出すセイバー。

それに合わせるように、オレ自身も敵サーヴァントに向かって突貫した。

「マスター自らが私に向かってくるとは、よっぽど死にたいようですね……」

最後まで言い終わる前に、オレは奴が突き出した短剣を握っている右腕を掴みながら、一瞬で懐まで潜り込むことに成功した。

「遅えよ」

「なっ……!?!」

ついでに左腕も握って身動きが取れないようにしてから、そのがら空きになった腹目掛けて、全力のキックをお見舞いしてやった!

「おらあっ!!!」

「がはっ……!?!」

相手は派手に後方へと吹っ飛び、その方向には既に剣を構えているセイバーが待ち構えていた。

「これで……!?!」

「し……しまっ……!?!」

「終わりです!!!」

吹き飛びながらも、強引に体を捻ってから両手に持った短剣でガードをしようとするが、セイバーの抜刀速度に敵うはずもなく、呆気なく体を切り裂かれてしまった。

「が……ああ……!?!」

血反吐を吐きながら地面に落ち、彼女の体が光りに包まれ始める。

サーヴァントが消滅し始めた証拠だ。

「は……博士!?!」



「もつちー!」

「先生!」

あ……念の為に後方で防御に専念させておいたけど、全く出番が無かったマッシュ達がやってきた。

なんか…悪い事をしちゃったかな。

『信じられない! 幾ら博士とセイバーのコンビが常勝不敗だからって、敵のサーヴァントを秒殺するなんて!』

「いや……もし仮にコイツが『本来のスペック』を発揮出来ていたら、こうはならなかっただろうさ」

「そうですね。私達の勝利は揺るぎないものでしょうが、それでもかなりの苦戦は強いられていたでしょう。そうじゃなかったのは……」

もう足の部分が完全に消えている彼女の傍に跪き、その顔を伺う。

「こいつが本調子じゃなかったからだろうさ」

『なんだって……!?!』

「このサーヴァントが……」

「弱体化していたってことですか……?」

「ああ。多分だけど、宝具も使えないんじゃないか? そうだろ?」

「………いつから気が付いていたんですか?」

まだ意識はあるようで、こつちの声に反応して振り向いた。

流星にもう戦う意思も力も残されてはいないようだけど。

「最初からだよ」

「最初から……?」

「ああ。気配の消し方がお粗末だったし、霊体化もしていなかった。それどころか、歩き方もなんだか弱々しく感じた。弱くなっていると完全に確信したのは懐に潜り込んだ瞬間だな。見た感じ、お前は明らかに前線で戦うタイプのサーヴァントだ。それならば、あんな強襲なんか簡単に対処出来ていた筈だし、あんな『手加減をした』蹴りであそこまで吹き飛んだりしないよ。少なくとも、オレが知っているサーヴァントは、同じような攻撃をしたら、逆に足を掴んでからコンクリートの壁に投げつけるぐらいの事は普通にやってのける」

今思い出しても、あれは本当に痛かったな。

バーサーカーめ……もし今度会ったら覚えとけよ……！

「全てが御見通しだった上に、手加減をした状態で私にあそこまでのダメージを与えるなんて……貴女は一体……」

「ただの天才科学者だ」

「はは……最近の科学者は肉弾戦が得意な上にマスターまでやっているのですね……」

「それはオレだけだ……多分」

一応、ウチの両親も該当しそうだけど、マスターじゃないし……大丈夫だよな？

「最後に一つだけ聞かせてくれないか？」

「私に答えられることなど微々たるものですが……」

「心配するな。簡単な質問をするだけだ」

そう、今聞くことはこれだけでいい。

「お前のクラスはなんだ？」

「……ライダーです」

「そっか……」

こいつがライダー……。

となると、やっぱり……。

「セイバー」

「ええ。嘗て、私達が戦ったライダーとは明らかに別人です。というか、あの時のライダーは男性でした」

「え……ええ？」

「博士？ 一体何を話して……」

「なに、簡単な話だ」

立ち上がりながら、白衣に着いた土を払う。

「この惨状は、聖杯戦争によるものだ」

「『！』」

もう、それしか考えられない。

さつきまではあくまで『予想』だったけど、こいつと遭遇したことで確信に変わった。

『ちよ……ちよっと待ってくれ！ それは流石におかしい！ あの年の

冬木で起きた聖杯戦争は確かに激しくはあったけど、都市自体にはなんの影響もないまま静かに終わりを迎えた筈だ！ 少なくとも、こんな大惨事は絶対に起きてはいない！」

「もう忘れたのか？ ここは『特異点』なんだぞ？」

『……それはつまり……』

「この世界で起きた聖杯戦争では、オレ達が知っている聖杯戦争とは明らかに違う部分が存在している。それがなんだか分かるか？」

「えつと……？」

藤丸。事情を殆ど知らないお前が必死に考えようとしなくていいから。

今のは完全にロマニに向けた質問だったから。

「本来ならば参加している筈のマスター……つまり、オレとマリスが参戦していない」

『そうか……！ 聖杯戦争のマスター自体が違うのであれば、必然的に召喚されるサーヴァントも違う……それが分岐点か！』

「細かい相違点は他にも沢山あるだろうけど、一番大きいのは間違いなくソレだろうな。そして、それによってこの惨状を齎した原因も必然的に判明する」

『聖杯……だね』

「そうだ。どこぞのバカなマスターが聖杯に蓄積された莫大な魔力を一気に放出し、それを単純に破壊の為に使用すれば、一つの街ぐらいは楽に焼け野原に出来る。誰がそれをしたのかはまだ不明だけどな」  
『最初は余りにも現実離れた光景に、なんでこうなったかなんて全く分らなかつたけど、もうそこまで辿り着いてみせるなんて……』

「これは単純に、オレが過去に聖杯戦争に参加していたことがあるからだ。その経験が無ければ、まだここで悩みまくっていただろうさ」  
何が役に立つが分らないもんだけど、まさか聖杯戦争の経験がこんな形で役に立つだなんて誰が予想するだろうか。

少なくとも、当時の自分は全く想像もしてなかつただろう。

「どうやら……私がこれ以上何かを言わなくても、貴女ならば『真実』に到達出来そうですね……」

「それが科学者の本分だからな」

話している間にライダーの体は下半身まで消えていて、もう体を動かす事も出来ないようだった。

「本来ならば参加するはずだったマスターがいない事で、この時代の聖杯戦争が何らかの形で狂ってしまった」

『聖杯は文字通り『奇跡』を起こす事の出来る物だ。超常の存在であるサーヴァントを狂わせて、マスターが不在でも現界させたままにさせる事も不可能じゃないかもしれない。そもそも……』

「元来、サーヴァントの敵はどこまで行ってもサーヴァントだ。この法則だけは絶対に覆らない。そうだろう？」

「ええ……このマスターの言う通りです。どれだけ変異しても、その性質だけは変わらない……」

もう言葉を発する事さえも厳しいようだ。

敵だったとはいえ、これ以上苦しめるのは酷ってもんか。

「もういい。欲しい情報は十分に得られた。とっとと消滅して座に帰りな。そして……」

「そして……？」

「今度は、まともな状態で召喚されるんだな。お前の本来の姿で」

「その時は……貴女がマスターになってくれますか？」

「お前がオレの召喚に応じてくれたらな」

「貴女みたいな可愛らしいマスターになれば……必ず……私は……」

オレの頬に手を添えながら、ライダーは光の粒子となって消滅した。

「最後に一言、余計だったの。って……ん？」

なんで女性陣のオレを見る眼が怖いのか？

「もっちゃーって、天然ジゴロだったんだね」

「博士……敵だったサーヴァントすら……」

「時計塔時代に講師をしていた時も、女の子にモテモテだったしね……」

「鞠絵……本当に相変わらずなんですわね」

「いや何がっ!? おいロマニ！」

『いや、博士には本当に参るね！ まさか、敵サーヴァントをナンパするなんて！ これはアレかな？ 次に博士が契約をするサーヴァントが確定したも同然かな？』

「なんでそうなる？」

触媒が無い以上、あいつが来るかどうかは完全にランダムだろうに。

『つて！ のんびりと話をしている場合じゃない！ 新手が近づいてくる！ またもやサーヴァント反応だ！』

「な…なんですつてっ!?!」

「数はっ!?!」

『二体だ！ 博士、どうするっ!?!』

「んなの決まってるだろうがよ。それに……」

気配がした方向を睨み付けると、そこには背中に多くの武器を携えたサーヴァントと、妙に腕が長いサーヴァントがいた。

さっきのライダーと同様に靄がかかっている姿が判別しにくい。

辛うじて分かるのは、連中の性別が男だっただけだ。

「今はちよつと気が立ってるんでな!! セイバー!!」

「はい!! 私も今は少しイライラしていますので、最初から全力でいかせて貰います!!」

相手が構える暇も無く、オレは腕が長い方を、セイバーは武器を背負っている方に目掛けて飛び掛かった。

「ナニツ!?!」

「馬鹿ナツ!?! マスター自ラガ我等ニ挑ンデクルダトツ!?!」

驚いてる暇なんてあるのかよ!

オレはすかさず、奴さんの首根っこに腕を回してから、全力で骨をへし折ろうと動かす。

「グギギ……! コ…コノ程度デ……!」

「なら、パワーアップだ」

「グゴガアアア……!」

どうやら、こいつの武器はダークみたいだが、この距離ではその真価は発揮出来ない。だから、腕を伸ばして直接オレの事を刺そうと試

みているみたいだけど、苦しきの方が勝っているようで、反撃に出れないでいた。

「お？ どうやら、お前の相棒はウチのセイバーに倒されたみたいだな」

「ナン…ダト…ツ!？」

チラつと横目で確認すると、セイバーによって切り刻まれたサーヴァントが消滅している最中だった。

「ム…無念…! 聖杯ヲ手ニ入レル事モ敵ワズ…ココデ敗レヨウトハ…!」

「ラ…ランサー…!」

成る程。いい事を聞いた。

あいつがランサーなら、こいつは…。

「お前、アサシンだろ？」

「ガ…アアアア…!」

「そのダークは対サーヴァント用にはひ弱すぎるが、人間に対しては話は別だ。対人戦に特化した武器を持つ英霊とえば、アサシンぐらいしか該当しない」

「ソレガ…分カツタ…カラト言ツテ…ナニガ…!」

「十分さ。少なくとも、オレ達にとってはな。んじや、さいなら」

グギ。

そんな鈍い音を響かせながら、アサシンは顔を有り得ない方向に向けながら倒れ、そのまま消滅した。

「や…やつちやつた…!」

『その場の勢いで増援で来たサーヴァントを二体纏めて…!』

「これが…サーヴァント同士の闘い…!」

「そして、先生の實力…!」

あゝ…久々に本気で体を動かしたから、なんか全身が凝るな。

よし。カルデアに戻ったらロマニに全身マッサージをさせよう。

「とくこくろく…!」

少し離れた場所にある岩陰に向けて、威嚇用のガントを放つ。

「せ…先生?」

「いきなり何を?」

「ちよつとな。いい加減に出てこいよ。さつきからずっとコソコソしてき。ストーリーカーはご勘弁なんですけど」

「誰がストーリーカーだ!」

お。やつと出てきた。

蒼い髪に杖と青い装束の青年。

見るからにこいつもサーヴァントだが、こいつは他のと違って靄がかかってない。

「なんつー嬢ちゃんだ。人の事をストーリーカー呼ばわりしやがって」

「そつちが隠れてこつちの事を伺ってたからでしょうが。それから、誰が嬢ちゃんだ。誰が」

支離滅裂としていない会話。

やつぱ、こいつは狂ってない『正常なサーヴァント』だ。

「にしても、まさかライダーに加えて、ランサーとアサシンまで秒で片付けるとはな。マジで何モンだ?」

「人に名前を尋ねる時は、まずは自分から名乗るもんじやないの?」

ストーリーカーのお兄さん」

「ストーリーカー言うな!!」

見た目通り、ノリがいいな。

ロマニの次くらいに面白い弄り役が誕生しそうだ。

「はあ……つたく。完全に出鼻を挫かれちまったぜ」

頭をガシガシと掻き毟りながら、青年は静かに名乗った。

「俺は今回の聖杯戦争で召喚された『キャスター』のサーヴァントだ。一応、お前らに敵対する気は無い事だけは伝えておく」

やつぱりキャスター。

これでまた、真実にまた一步近づいたな。

だって、オレやセイバーが知ってるキャスターはこんなにチャラくないし。

寧ろ、超ヘツタレだし。

『クシユン! あれ? 風邪でも引いたかな?』

## 魔術師の英霊

突如として現れた『魔術師』<sup>キャスター</sup>のサーヴァントと名乗った男。

普通に考えれば怪しき全開のだが、オレ自身はこいつの事は大丈夫だと思っている。

「にしても、お前ら中々にやるな。まさか、この短時間に3騎もサーヴァントを撃破しちまうとは」

「それは、どいつもこいつもが大幅に弱体化してたせいだろ。もしも全員が本調子だったら、間違いなく苦戦は必至だった」

「だろうな。つーか、あいつらが弱くなってることも把握してたのかよ……」

「んなもん、一目見ればすぐに分かる」

「……マジでなにもんだよ……お嬢ちゃんは……」

「お嬢ちゃん言うなし」

そんなにオレってば女に見えるのか？

いや、スカートを履いてるのは普通に動きやすさ重視してるだけだし。

決して、幼い頃から両親に無理矢理着せられて、それが完全に習慣になつてるとか、そんな事は無いんだし。

「物陰に隠れつつ様子を伺って、いざつて時はルーン魔術でも使つて援護をしようかと思つてたけどよ、それは余計な心配だったみてえだな」

「ルーン魔術……」

こいつ、何気に凄いネタバレをしゃがったぞ。

それとも、この程度じゃ自分の正体なんてバレっこないっていう自信の表れか？

「ま……またサーヴァントっ!？」

「これで四人目……ですね」

「えっと……今までに出てきたのって……」

「ライダーにアサシン、それから、セイバーが倒した野郎はランサーだな。で、こいつがキャスターって事は……」



「残っているのは、私と同じセイバーとアーチャー、そしてバーサーカーということになりますね」

残り3騎。

何が悲しくて、別に聖杯戦争に参加しているわけでもないにも関わらず、こうして残りのサーヴァントの数を数えないといけないのやら。

「まず先に聞いておきたい。キャスター」

「なんだ？」

「お前には先程までの連中とは違って妙な靄が掛かってない上に、こうして攻撃もしないでオレ達に話しかけてきた。ってことは、お前は少なくとも『敵』じゃないって判断してもいいのか？」

「そうだな。俺もまだお前らの素性を把握してる訳じゃないからなんとも言えねえが、少なくとも、俺の方はお前らに対して敵対をする気はねえよ」

「そっか」

オレから見ても、こいつからは敵意が全く感じられない。

それどころか、ここに来て初めてのまともに会話が出来る相手だ。

この貴重な機会を見逃す手は無い。

「オルガ。ロマニ。オレはこいつのことは信用してもいいと思う。二人の意見を聞かせてくれ」

「わ…私は、先生がそう仰るのなら……」

『まだ判断材料が少ないから微妙だけど、ボクも博士と同じように信用しても大丈夫だとは思う。もし彼が博士たちを排除したいと思っているのならば、それこそ戦闘中に奇襲を仕掛けてくればいいだけの話だしね』

オルガはアレとして、まさかロマニと同じ意見に成るとはな。

長年の付き合いで思考回路も似てきたか？

「つーわけだ。二人もそれでいいか？」

「は…はい！」

「私もオツケーだよ。なんかこの人、いい人そうだし」

「お？ いいこと言うねえ」

やっぱりコイツ、キャスターって割にはチャラいな……。

「つーか、さつきのはなんだ？ 魔術による通信手段的なやつか？」

「うんにゃ。単純に現代の技術の結晶だよ。深く気にするな」

「技術の結晶ね。そういや、極まった科学技術は魔術と大差ないってどこかで聞いたことがあるような……」

え？ 聖杯の知識って、そんな余計な事も教えるの？

そう言えば、オレとセイバーが最初に契約した時も、妙に現代の食事事情に詳しくかったような気がする。

お蔭で、こいつの食費でオレとマリスの財布がかなり寒くなったのは悲しい思い出だ。

「つて、うをおっ!? な…なんでセイバーがここにいるんだあっ!?」

「貴方もそれを言うのですか、キャスター。全く…私が一体何をしたっていうんですか…ブツブツ…」

あくらら。セイバーご立腹。

これはアレですな。後で補給物資として送られてきたカップ麺（お湯入り水筒付き）をあげて機嫌を直すか。

「さつきからずつと気になってたんだが、まさかこの聖杯戦争で召喚されたセイバーって、アーサー王なのか？」

「ああ。とんでもない強さで他のサーヴァントを圧倒してやがったよ」

「ここにもう一人の私が……」

そこだけは一緒なんだな……。

でも、それって普通におかしいぞ？

常識的に考えても、同じ場所に同じ英霊が二人も召喚されるか？

（まさか……この『特異点F』のセイバーも他のサーヴァントと同様に変異している……？）

一番納得できる理由はそれだが、また直に見たわけじゃないから答えを出すのは早急過ぎるな。

「取り敢えず、まずはキャスターに詳しい話を聞きながら、同時に答え合わせと行こうじゃないか。お前もそれでいいか？」

「おう。そいつはこっちとしても望むところだけだよ、その前に一つ

いいか?」

「なんだ?」

「実はよ、訳あって今の俺にはマスターがない。だから、誰でもいいから俺と仮契約をしてくれねえか?」

マスターがない?

ならなんで、こいつやさっきの連中は普通に行動出来てたんだ?

(これは…オレが思っている以上に闇が深そうだな……)

セイバーを召喚出来たことで、少し調子に乗ってたかもしれない。

ここからは改めて気を引き締めていこう。

「セイバーと、そこにいる盾の嬢ちゃんがサーヴァントだろ? って

ことは、この眼鏡の嬢ちゃんと白い服の嬢ちゃん、それから気難しそうな嬢ちゃんのいずれかがマスターって事になる。誰が俺と仮契約するんだ?」

「なら、オレがするよ」

「先生?」

「もつちー?」

これはもう完全に消去法だろうな。

「まず、藤丸は完全な素人だから、後々はともかくとして、今はマシユとの契約や連携に集中して欲しい。少なくとも、現状を乗り越えるまではな」

「は…はい…」

「で、オルガはそもそも、マスターとしての適性が無いから普通に無理。つてことは必然的にオレしかいなくなる」

『成る程……確かに理に適っているね。納得だよ。それじゃあ、それでいこうか』

「つーわけで、よろしく頼むわ。オレなら魔力量的にも問題は無いだろうし」

「色々と言いたいことはあるけどよ、まあいいか。そんなじゃ、少しの間だけでも、よろしく頼むぜ。マスター」

「こつちこそ。頼りにしてるぞ、キャスター」

この後、オレとキャスターは簡易的な契約をしてパスを繋げた。

後方支援に特化しているキャスターの協力は普通に有り難かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

キャスターとの仮契約を結んだ後に、オレたちは焚火を囲みながらキャスターと自己紹介を挟みつつの情報交換をしていた。

「成る程な。お前さん方も意図してこつちに来たって訳じゃないのか」

「火災自体は完全な人災だが、ここに来たのは事故に近いだろうか」  
『だろうね。まさか、あんな状況でレイシフトが起きるだなんて誰も想像もしないだろうし』

お蔭で、今はしたくも無い行軍を強いられてるしな。

「カルデアつつたか？ そつちもそつちで色々複雑そうな事情があるみたいだな」

「まあな。それでも頑張らないといけないのが辛いところだよ」

本当はAチームの連中に頑張つて貰う予定だったのにな……。

なんでこうなつちまつたんだろ。

「改めて確認するが、キャスターはこの街で引き起こされた聖杯戦争で召喚されたサーヴァントであり、現状で唯一の生存者なんだよな？」

「まだ敗北をしてないって意味ならな。もう既に分かりきっていると  
は思うが、この聖杯戦争はいつの間にか、本来のものとは完全にすり替わっていた」

「『すり替わっていた？』」

随分と変な表現を使うんだな。

「詳しい経緯は俺自身にも全く分らない。分かっているのは、一夜にしてこの街が業火に包まれ、人間は一人残らず死に絶えて、残されたのはサーヴァント達だけだった」

「余りにも突然過ぎて、避難をする暇すらなかったのね……」

「酷いね……」

「はい……」

一夜にして業火……人間は全滅……。

間違はなく聖杯を悪用した誰かの仕業だろうな。

さつき戦闘した連中は、いずれもがそこまでの大火力と範囲を持つ宝具を持っているようには見えなかったし、セイバーの宝具も対城宝具とはいえ、街一つを廃墟に変貌させる程の威力は無かった筈だ。

「そんな状況だったのに、真つ先に聖杯戦争を再開した奴がいた」

「それは？」

「セイバー……ああ、この聖杯戦争で召喚された方のセイバーな。そいつがいきなり水を得た魚みたいに大暴れしやがってよ。奴の手で俺以外の全員が一気に倒された」

暴走状態……なのか？

たしかに、セイバーの力をフルに発揮すれば、並のサーヴァントぐらいは軽く一蹴できるけど……。

「七騎のサーヴァントによるバトルロワイヤル……それが聖杯戦争における唯一無二のルール……でしたよね？」

「そうだ。魔術の秘匿をすることを絶対条件にはしてるけどな」

「キャスターさんはその中で勝ち残った……じゃなくて、生き残っているサーヴァントってことですね」

「そうなるな。んでもって、セイバーに倒された連中はなんでか、さつきアンタ等が倒した連中のように黒い泥に汚染されやがった」

「その『黒い泥』ってのは？」

「さあな。それはこつちが知りたいぐらいだぜ」

「だろうな……」

『黒い泥』……か。

思い当たる節が無い事は無いけど……。

「その後、連中はいきなり湧いて出てきやがった雑魚共と一緒に何かの搜索を始めた。何を探しているのかは不明だが、その『探し物』の中に俺が含まれているのは確実だった。なんせ、俺が倒れない限りは聖杯戦争が終わらないんだからな」

要するに、黒くなつたサーヴァント達にとつて、唯一正常な状態で生き残っているキャスターは邪魔者つて訳か。

『現状、残されているサーヴァントはセイバーを除けば貴方だけ……。ならば貴方がセイバーを打倒できれば……』

「少なくとも、この聖杯戦争に幕を引くことは可能だろう。この惨状が元に戻るかどうかは不明だがな」

だろうな。

この惨状を即座に元に戻すには、それこそ聖杯の持つ『奇跡』が必要になる。

普通に復興しようとするれば、最低でも10年以上の年月が掛かるだろう。

「実際問題、途方には暮れてたんだ。なにせ、相手はセイバーで、しかも騎士王として名高いアーサー王と来てやがる。ぶっちゃけ、キャスターである俺が真つ向勝負で勝てるような相手じゃない。だが……」

「こつちにも同じ『アーサー王』がいるからな」

「その通りだ。しかも、マスターとの連携も申し分なかった。幾ら相手が強大でも、それはかなり大きなアドバンテージだ」

実際。マスターがいるのといかないのとじゃ大違いだしな。

「しかも、お前さん達はこつじやない別の世界線の冬木市でも聖杯戦争をやつて、最後まで生き残つてるんだろ？ 戦力としては申し分ねえよ」

「一応、その聖杯戦争での勝者はキャスターなんだけどな」

「らしいな。一体どんなサーヴァントだったのやら」

「少なくとも、魔術師としては間違いなく最強の部類に入っていたのは確実ですね。もきゅもきゅ……」

「だな。変に工房とか作らずに、魔術を使つての真つ向勝負で他のサーヴァントを圧倒してたし。ってか、食べるか話すかどつちかにし

ろ、セイバー」

「申し訳ありません。久々に食べたカップラーメンが美味しくてついで。年月と言うのは恐ろしいですね……まさか、カップラーメン一つとってもここまで進化していいようとは……もぎゅもぎゅ……」

本当に、心から美味しそうに食べるよなく……こいつ。  
見てるこつちがお腹空いてきそうだもん。

「つーかよ、それよりも驚いたのは……この嬢ちゃんが本当は坊主だったって事で、しかもこの姿で35歳だあ？ 冗談にしても笑えねえぞ」

「『『うんうん』』」

なんで全員揃って頷いてるんだよ。泣くぞ。

「白衣を着てるってことは、科学者が何かなのか？」

「一応な。科学者と魔術師を兼任してて、前は講師なんかもやってた」  
「今は？」

「カルデアの技術主任兼マスター候補第一号だ」

「……色々と苦労してんだな」

「頭を撫でるなつーの。オレは子供じゃない」

「そのナリで言っても説得力ねえよ」

「うゝ……」

こいつめ……完全にオレの事を近所の子供みたいに見てやがるな。

「『尊い……』」

何が？

「けどよ、マスターとして信頼はしてるぜ。一番最初に俺を信用してくれた上に、聖杯戦争の経験者。しかも、こうしてパスをつないだから分かるが、お前……かなり熟練の魔術師だろ」

「本業は科学者なんだけどね。魔術師は副業だ」

「なんだか勿体無い気もするが、本人がそう言うなら別にいいさ。そこからへんは時に拘る気は無いしな」

「見た目通り、サツパリとした性格なんだな」

「おう」

昔から、この手のタイプの奴は嫌いじゃないし、不思議と気も合う。

やっぱり、キャスターと仮契約をしたのは間違いじゃなかったよう  
だ。

(後は……)

さつきからずっと、彼方の方からコツチを見てる奴だな。

恐らくは、様子を伺いながらも隙を見つけたら即座に狙撃をするつ  
もりなんだろう。

そんな芸当が可能なのはアーチャーしかない。

(汚染されたアーチャーか……少し厄介かもな)



## 回り道こそが最短の道である

いつまでもここで話しているわけにもいかないのです、火を消してからオレ達は移動をし始める事に。

でも、まだまだ話したいことがあるので、ここは周囲を警戒しながら歩きつつ話す事に。

「さっきまでオレ達が撃破したのはライダーとランサーとアサシン：でいいんだよな？」

「おう。ライダーは黒化する前と同様に単独行動ばかりしてて、なんでかアサシンとランサーは一緒に組んで行動してやがったな」

「相性がいいような…悪いような……」

敏捷性に定評があるランサーと、気配遮断応力のあるアサシンがコンビを組むって、なんか微妙だなぁ……。

アサシンならばセイバーやアーチャーと組んだ方が良さそうだし、ランサーはキャスターと組んだ方が真価を発揮できるだろうに。

「セイバーがボスキャラだと仮定して、キャスターはこうして味方になった。ってことは、残っているのは……」

「アーチャーとバーサーカーってことになるな」

アーチャーと言えば、野郎は未だにこっちの事をずっと見続けてやがる。

どんな奴が召喚されてるのかは知らないけど、思っているよりも慎重な性格をしている英霊らしいな。

それはそれで行幸ではあるけど。

恐らく、オレが召喚したセイバーの存在で一気に警戒レベルを引き上げているのだろう。

あいつの直感スキルがあれば、矢が放たれた後でも十分に迎撃は可能だしな。

「アーチャーの野郎は何を考えてるのか本気で分からねえ」

「それはどういう事よ？ 他のサーヴァント達と同様にキャスターの事を搜索してるんじゃないの？」

「それがな、どうも奴はセイバーの傍を余り離れようとしなんだ。

まるで、あいつを守護する為に門番的な事をしているように見えるっ  
ていうか……」

「門番……」

成る程ね。

その門番が、今は狙撃主スナイパーになつてゐる訳か。

滅多に動かない奴が動くつて事は、それだけこっちの事を危険視し  
てる証拠だな。

「バーサーカーはどうなつてゐるんだ？」

「今の奴は完全な暴走状態になつてやがる。だから、悪い事は言わ  
ねえから、バーサーカーとだけは絶対に関わるな。マスターとセイ  
バーのコンビなら勝ち目はあるかもしれねえが、無傷での勝利はかな  
り難しいだろう。本命の前に消耗しちや意味ないしな」

ふむ……確かにキャスターの言う通りだな。

唯でさえ、バーサーカーのクラスは『狂化』のスキルで半ば暴走し  
ているに等しいのに、それが大暴れしているなんて厄介極まりない。

どっちみち、聖杯をどうにかすれば嫌でもサーヴァントは消滅する  
んだから、基本的には無視していく方針で問題無いだろう。

「セイバーもそれでいいか？」

「はい。鞠絵がそれでいいのならば、私には異論はありません。それ  
に……」

「それに？」

「この特異点に召喚されたもう一人の私に対抗するには、こちらも万  
全の状態で挑んだ方がいいと思うので」

「そうだな」

間違いなく、向こうは出会い頭で即座に宝具をぶつ放してくるだろ  
う。

少なくとも、オレが向こうの立場ならば絶対にそうする。

誰だつてそうする。

それを真正面から相殺するには、こっちも同じように宝具で対抗す  
るしかない。

その気になれば令呪を使えば済む話だが、それでも念には念を入れ

ていきたい。

「……それで、後ろの女子達は何を話してるんだ？」

「あ……博士……」

「マシユ？ 何をそんなに落ち込んでるんだ？」

「なんだかマシユの表情が暗いので、試しに何があつたのか聞いてみると、なんとも単純な事だった。」

「宝具が使えない……ね」

「正確には『使い方が分らない』……です。今の私は宛ら『欠陥サーヴァント』のようなものです……」

「いやいや。何もそこまで自分を卑下しなくても……」

「フオウ……」

いつの間にかオレの頭の上に戻ってきていたフオウも同じように言っている。

この状況でのモチベーションの低下はちょっと拙いな……。

『そうか……。マシユはそこを気にしていたのか』

「はい……。私は博士のように素晴らしい頭脳や卓越した技を持っているわけではないですし、セイバーさんとは違ってサーヴァントとしての能力も練度も低い……。それだけならばまだいいのですが、宝具も使えないとなると……」

『マシユは昔から責任感が人一倍強かったからなあ……』

同時に、感情の起伏も激しいんだよな。

喜怒哀楽の全てを全力でやってるっていうか。

『ま……まあ、宝具に関しては一朝一夕でどうにかなるような話じゃないと思うよ？ なんとたつて、宝具は文字通り、英霊にとつての切り札だ。それをそう簡単に使えてしまったら、それこそサーヴァントとしての面目が立たないって言うか……。そうだよな？ その御二方』  
おっと。ここでセイバーとキャスターに話を振るのか。

この二人はなんて答えるかな？

「いや。んなもん、使おうと思えばいつでも使えるに決まってるじゃねえか。なあ？」

「そうですね。英霊と宝具は一心同体。マシユがサーヴァントとし

て最低限でも戦闘が可能ならば、その時点で既に宝具の使用条件は満たしている筈です」

「おお、お。流石はブリテンの騎士王だ。」

「言う事が違いますにや。」

「でも、今の私は実際に……」

「それでも使えないって事は、それは単純に魔力が詰まっているだけだろうさ」

「魔力が…詰まる？」

「なんて言えばいいのかね……。分り易く言っちゃえば、やる気的なものツツーか、弾け具合？ いや、これはちよつと違うな……」

「私が想像するに、マシユはこれまでに一度も本格的な戦闘行為を経験したことが無いのではないですか？」

「そう…ですね。これまではずっと、戦闘訓練しかしたことはありません。少なくとも、このような実戦は一度も……」

「そもそも、そんなことが出来るような場所でもないしな。カルデアは。」

「それならば答えは単純明快です。マシユには『戦闘意欲』、別の言い方をすれば『闘志』が足りないのでしょうか」

「闘志…ですか？」

「今のマシユには英霊として十分なレベルの魔力がある。それなのに宝具が使えないのは、その魔力を戦闘に使おうとしないように無意識の内にブレーキを掛けてしまっているのだと思います」

「ブレーキ……」

「うむむ。セイバーの説明もかなり解り易かったが、それでもマシユには難解だったようだ。」

「仕方がない。ここはマスターとして、マシユの家庭教師として、助け舟を出してやるかね。」

「マシユ。魔力を水、自分の体を蛇口に例えて考えてみる」

「水と蛇口…ですか？」

「そうだ。貯水タンクにどれだけ水が溜まっていても、蛇口が閉じたままだといつまで経っても水は出てこない。開けたい、開けるつもり

はあっても、お前自身が無自覚のままに理性で蛇口を固くしてしまっている。だから水は流れない。つまりはそーゆーこった」

「はあ……」

「宝具つてのは、云わば英霊の本能のようなもんだ。半端に理性があると却って出にくい事もある」

「そう…なんですか？」

あれ？ これでも分からなかった？

おつかしいなあ。

「これは、お前を後方に下げてしまっているオレの責任かもな」

「そ…そんな!? 博士は何も悪くありません!」

「いや、もう少しだけお前を前線に出して戦闘経験を積ませてやれていれば、こんな事にはならなかったかもしれない。セイバーの召喚に成功しても油断は禁物だと思っていたオレが浅はかだった。今思えば、セイバーにフォローをして貰う形でもいいから、お前を前で戦わせてやるべきだった。流石にサーヴァント戦は危険だからアウトだが、雑魚戦ならば全く問題は無かっただろうし」

オレの教育もまだだつて事だな。

これはまた、反省材料が一つ増えた。

「なら、今後はマシユの嬢ちゃんも前に出て戦うつて事でいいのか?」  
「そうしようと思う。結果としてサーヴァントが三人に増えたんだ。戦力はかなり充実している。それならば、オレはマスターらしく後ろに下がって指示を出したり、二人の護衛をしたりできる。マシユもそれでもいいか?」

「は…はい! マシユ・キリエライト! 全力で頑張ります!」

「なんか気合が空回りしてそうな感じだが、無いよりはずっとマシか」  
この状況でやる気があるだけでも十分だけどな。

マシユの隣でFXで有り金全部溶かした顔になつて藤丸よりは  
ずつといい。

「おい藤丸。仮にも現役の女子高生がなんて顔をしてやがる」

「はっ!? なんか難しい単語のオンパレードだったので、思わず意識が無限の彼方に行つてた……」

「お前はどこのスペースレンジャーだ」

こいつにもマスターとしての心得を色々叩き込まないといけないようだな……。

「取り敢えず、まずは現状の打破が最優先事項だ。無事にカルデアに戻れたら、その時はオレがセイバーと一緒にみっちりマシユの宝具の特訓をしたり、藤丸のマスターとしての勉強に付き合っただけから、それまでは今を必死に頑張る事だけを考えろ。いいな?」

「はい! その時はよろしくお願いします!」

「なんか今、すっごい不穏な言葉が聞こえてきたような気がしたんですけどっ!? 戻ったら勉強させられるのっ!」

「当たり前だ。一人前のマスターになるには、これから沢山の事をな学んでいかないとイケないんだ」

「そ…そんな……」

なんでそこで愕然となる?

「心配するな。オレだけじゃなくて、オルガにも手伝って貰うつもりだから。いいだろう?」

「私で良かったら喜んでお供します! 藤丸:戻ったら覚悟しておきなさい?」

「そ…そんなあ……」

こいつを勉強地獄に落とす為にも、一刻も早くこの特異点をどうかしないとな。

(これってあれよね? 先生との初めての共同作業よねっ!? そして、そこから一気に交際に発展して…ゆくゆくは結婚っ!? そうしたら、私の名前って『望月オルガマリー』になるのかしら? それとも『オルガマリー・モチヅキ』? この際どっちでもいいわ! 子供は何人がいいかしら……? やっぱり、男の子と女の子が一人ずつが理想よね♡)

……なんでさっきからオルガは百面相してるんだ?

『所長が妄想の世界に入ってしまった……』

「あははははははっ! お堅そうに見えて、意外と頭の中は夢見る乙女だったとはな!」

「残念ですが、オルガマリー。鞠絵の嫁の座は誰にも渡す気はありませんが？」

ん？ セイバー、今なんつった？

「わ…私だって負けませんから！」

「私も、もつちーのお嫁さんになりたい！」

ガキ共が何言ってるんだか。

そんな事を言うのは十年早いだっつーの。

「なんだ。めつちやモテてるじゃねえか。マスター」

「うっせ」

『博士は女性職員たちからも人気があるからね』

よし。戻ったら真っ先にロマニを坊主頭にしてやろう。

ついでに、こつちを見るストーカー野郎でストレス発散だ。

「えくつと…確かコツチか」

「どこ見てんだ？」

「ちよつとね」

遠くでこつちを見ているアーチャー目掛けて……。

「あっかんべー！」

．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．

ずっと監視していた。

いつでも狙い撃てるように。

突如として出現した謎の連中。

その正体は不明だが、こちらの先兵を破壊していることから『敵』であるかと判断出来る。

後ろにいる少女達はそこまでの実力は無いようだが、問題はあの小

柄な白衣を着た幼女だ。

あの見た目なのに、その実力は圧倒的だ。

しかも、あろうことかこの地で英霊召喚をやったのけた。

その英霊を見て本気で驚き、目を見開いた。

なんで『彼女』があそこにいる？

なんであんな風に泣いて、あんな風に喜んでいる？

理解が出来なかった。したくも無かった。

だが、その光景を見て久しく忘れていた感情が湧き出てくるのを感じた。

これは『嫉妬』だ。

自分には決して向けられなかった顔を向けられている、あの幼女に対する『嫉妬』だ。

その後、セイバーとの連携で簡単にライダーとアサシンとランサーを撃破。

あのセイバーと幼女のコンビは間違いなく強敵だ。

生半可な覚悟では絶対に討ち取れないだろう。

更に、こちらがずっと探していたキャスターと合流した連中は、奴と仮契約をしたようで、何やら話し合っていた。

今ならば殺れるか？

そう思つて弓を番えるが、その時：幼女の目がこつちを向いているのが見えた。

馬鹿な。そんな筈がない。

ここからあちらは軽く10キロ以上離れている。

英霊でもない人間の目で見えるような距離ではないのは明らかだ。とどめに、幼女はこちらに向かって舌を出して挑発してきた。

間違いない。彼女にはこちらの姿が完全に見えている。

それどころか、場所すらも把握されているかもしれない。狙撃で一網打尽にするのは無理か。

早々に見切りをつけて、その場を離れる事にした。

仕方がない。『あそこ』で正面から迎え撃つしかないか。

奴等よりも先に到着し、迎撃態勢を整えなくては。



急いで自分の持ち場に戻る事にした。

## 堕ちた弓兵

オレ達は、新たに仲間となったキャスターに道案内される形で燃え盛る瓦礫の海を進んでいった。

その間にも刺客として差し向けていると思われるエネミーと何度となく交戦をしていた。

「マシユ！ 今です!!」

「はあああああつ!!」

セイバーが前に出ていたスケルトンを撃破し、そこをマシユが突撃して後方にて弓を引き絞っていたスケルトンに大盾の一撃をお見舞いする。

直撃はしたものの、それだけでは撃破に至らなかったようで、まだ辛うじて立っていた。

「後は任せな！ エイワズ!!」

最後はキャスターの放つ炎のルーンが炸裂し、この場にいた敵は沈黙した。

「ふう……どれだけ相手をしてもキリがねえぜ」

「全くですね。一刻も早く、聖杯をなんとかしなくては」

「な……なんとかなりました……」

セイバーとキャスターは全く平気そうだが、問題はマシユだった。体力自体はまだまだ有り余っている様子だが、一回一回の戦闘ごとに緊張しているようで、少しだけ動きがぎこちない。

「といっても、最初に比べればかなりマシになって来てるんだが。「キャスター。もうそろそろ聖杯がどこにあるのか教えてくれないかしら?」

「あれ? 言っただけか?」

「言っただけよ!」

「ワザとか? いや、これはなんか天然な気がする。」

「いや。キャスターが言わなくても、なんとなく場所は分かるよ」

「ほ……本当ですか?! 博士っ!?!」

「セイバーも分かっているんじゃないか?」

「そうですね。もしも、私達が知っている『冬木の聖杯戦争』と、この『冬木市』の地形が全く同じならば、聖杯が降臨する場所はたった一カ所しかありません」

「『それは？』」

「『柳洞寺』」

あくまでも可能性の話だけだな。

「この街にある『柳洞寺』って寺は、周囲にある霊脈の交差点であるが故に、日本でも有数の霊地になってんだ」

「知らなかったわ……」

「だから、聖杯なんて代物を呼び出すのにうってつけな訳なのさ」  
「なる…ほど？」

藤丸。別に無理して考えようとしなくてもいいぞ。

「キヤスター、実際はどうなんだ？ オレ達の予想は合ってるのか？」

「大正解だ」

「マジか」

となると、増々この冬木市とオレ達が知っている冬木市とは『極めて近く、限りなく遠い別の街』である可能性が出てきたわけか。

「今、俺達が向かっているのはマスターとセイバーが言った『柳洞寺』って場所だ。もう一人のセイバーもそこに陣取っている」

「そして、その行く手を阻むかのようにアーチャーも控えている…と」

「そーゆーこった。気を付けろよ？ クラスはアーチャーでも、実際にやってる事はアサシンと大差ないからな」

「奇襲に朝駆けに夜打ちとかすんのか？」

「……科学者なのに、よくそんな言葉を知ってるな」

「最近の科学者はよく色んな荒事にも巻き込まれるんだよ」

丁度、今の状況みたいにな。

「苦労してんだな……そのちっこい体で」

「ちっこい言うなし」

「フオウ！」

なに？ 何を言ってもちっこい事には違いないだろうって？

いいんだよ！ アラサーでもまだ希望は捨ててないんだから！

「という事は、今はその『柳洞寺』って場所に向かって歩いてるのね？」  
「そうなるな。山の中腹にある寺だけど、そこまで遠くはないから、日  
が暮れる前には辿り着けるだろうさ」

柳洞寺……か。

けど、オレの記憶が正しければ、あそこには確か……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「着いたぜ。ここだ」

「ここって……」

オレ達の目の前にあるのは、とある洞窟の入り口。

かなり大きくて、その気になれば大型車両とかも余裕で入れそう  
だ。

実際に入れようとするバカはいないだろうが。

「目的の大聖杯は、この洞窟を抜けた先に存在している」

「やっぱ、この世界線にもこの洞窟があったんだな」

「なんだか懐かしくもありますね」

「そうだな」

あの頃もよく、ここで他のサーヴァント達と激闘を繰り広げていた  
もんだ。

狭い場所での戦闘はセイバーにとっても不利な状況だったから、  
キヤスターの援護が無かったら危なかったかもしれない。

「ここってかなり入り組んでた筈だよな？」

「おう。だから、はぐれて迷子とかにならないようにな」

「ならないわよ！」

「は〜い！」

「あんたは返事しない！ 子供か！」

子供だよ。法律上はな。

「なんでしようか……これは天然の洞窟……のようにも見えませんが、所々に何者かの手によつて加工された跡があるような気が……」

「よく分つたなマシユ。この洞窟は半分が天然で、もう半分が人工的に作られてる。冬木に住んでいた魔術師たちが長い年月を使って拡張した地下工房なんだ」

「地下工房……」

「なんせ、冬木市には『御三家』の家が見事に揃つてたからな。そりゃ、人知れずこんなもんだつて作られてても不思議じゃないさ」

初めてこれを見た時、マリスの奴は子供みたいに目を輝かせてたっけ。

オレはただただ驚いてばかりだったけど。

「ここにアーチャーが待ち受けてるんだよな……」

「そうだ。この中はちゃんと道もありはするが、同時に遮蔽物もかなり多いからな。どこから狙撃とかしてくるか分からねえぞ」

「そこは、セイバーの直感スキルに頼るしかないな」

「はい。お任せください」

今更だけど、セイバーがこつちの味方で本当に良かったよ。

そうでなきゃ、ここで全滅……はしなくても、相当な重傷を負つていた危険性がある。

「アーチャーの相手はオレとキャスターがする。今回は雑魚戦じゃない。マシユは専守防衛に努めるんだ。いいな？」

「了解です」

「そしてセイバー。お前は……」

「承知しています。私はここでアーチャーと戦闘を行わず、その後に控えているもう一人の私との戦いに備えて力を……魔力を温存しておく……ですね」

「いや。魔力は温存しておくんじゃないで、チャージしておいてくれ」「チャージ……ですか？」

「アーチャー撃破後、すぐに対セイバー戦に突入するだろう。そして、さつきも言った通り、相手はまず間違いなく、出会い頭に宝具を放つてくると思われる。だから……」

「こちらも、すぐに宝具を放てるように聖剣に魔力を貯めておくのですね?」

「その通り。頼んだぞ」

「分かりました」

取り敢えずはこれでよし。

後は野となれ山となれ……だ。

・  
・  
・  
・  
・  
・

洞窟の中は、相変わらずごっこつごっこつして歩きにくい場所となっていた。

「きやつ!」

「わふ」

いきなり、後ろを歩いていた藤丸が躓いて、オレに向かって倒れ掛かってきた。

いわんこつちやない。

「ご……ごめんねもつち」

「暗くて歩きにくいのは分かるが、もうちよつと足元に気を付けろ」  
「は……い……」

今までにコケたのってお前だけだぞ?

マシユもオルガもキャスターもセイバーもオレも、誰もコケてない。

「さて……奴の性格上、もうそろそろ仕掛けてきそうなんだが……」  
なんかキャストが物騒な事を言い出した。

それを聞いて、オレとセイバーとマッシュは急いで周囲を警戒する。  
「そんな事をせずとも、私は強襲なんて仕掛けないさ」

「!!!」

「出やがったな。聖剣使いの信望者サマがよ」

奴が…アーチャー？

他の連中と同様にモヤが掛かって姿が見えにくいが、どうも見た目だけはかなり普通の男に見える。

服装もかなり現代的だし……マジで何者だ？

「……別に私は信望者などになったつもりはないがね。だが、やって来た外敵を倒すぐらいの仕事はするさ」

「結局は門番とやってることは同じじゃねえか。お前さんが一体何からセイバーを守っているかは知らねえし、興味もねえ。だがよ、このまま永遠に終わりが来ないゲームってのもつまんねえだろ？ どんな結末になるにしろ、いい加減に決着をつけて駒を先に進ませないとダメだろ」

「奇遇だな。私の方もいい加減、お前の顔は見飽きてきたところだ。しかも、その口ぶりだと大抵のあらまは既に理解していると見える」

「一応な」

「それでも猶、お前は自分の中の欲求に素直に従おうとする。例えばクラスが『ランサー』から『キャスト』に変わっても、その本質だけは全く変わっていないようだな」

「当たり前だ。そうそう簡単に俺の性根が変わって溜まるもんかよ」

ルーンを使えて、本来はランサーとして召喚される可能性があった……？

まさか、このキャストの真名は……。

「お前……あのアイルランドの『光の御子』である大英雄『クー・フーリン』か？」

「あ…バレた」

「ク：クー・フリーンっ!？」

『なんだってえっ!？』

「クーフリーン?」

藤丸以外の全員がめっちゃ驚いた。

確かに凄い奴ではあるけど、ちよつとりアクション取りすぎじゃね? ?

ほら、アーチャーもなんかポカーンってなってるし。

「クー・フリーンと言えば、深紅の魔槍『ゲイボルグ』を操る赤枝の騎士! 『クランの猛犬』の異名を持っていて……」

「生涯に渡って一度も敗北をしたことが無いとされる『不敗の英雄』! まさか、キャスターさんがそんな凄い人物だったなんて……」

「いや、確かに俺の遺した偉業は沢山あるけど、なんか無駄に誇張されてないか?」

顔の偉人なんて、往々にしてそんなもんだよ。

「つーか、よく分ったな。俺の真名。全くヒントっぽい事は話してなかったと思うんだが」

「ルーンを操って、本来ならランサーだった英雄なんて、かなり限定されるだろうが。該当するのは、お前を除けば、影の国の女王である『スカサハ』ぐらいだろ」

「意外とウチの師匠と気が合いそうな予感がするのはなんでだろう」  
会えるもんなら一度ぐらい会ってみたいもんだな。

噂に名高い『影の女王』とは。

「もういいかね?」

「「「「あ」」」」」

ヤバい。完全にアーチャーの奴を無視してたわ。

「つていうか、テメエのせいで俺の真名がばれちまったじゃねえか!」  
「いや。それは単純に、お前の仮マスターである少女の推理力が卓越していただけだろう……」

「少女って……」

オレ：敵からも女扱いされてる……? ?

なんかもう訂正するのも疲れたから、好きに思わせておこう。



「しかし……」

「こいつ……オレとセイバーのことを見ている？」

「まさか、この地にもう一騎セイバーが召喚されるとはな。しかも……」

「この向こうにいるセイバー……アーサー王と同じだもんな。俺だって最初は驚いたぜ。けど、同時に嬉しくも思った。俺だけじゃセイバーには勝ち目はなかったが、同じ聖剣ならば十分過ぎるほどに勝機がある」

「ふっ……本当にそうだといいがな」

「なんだと……？」

「こいつ……何を知っている？」

「なんだ、この余裕は……」

「……マシユ。当初の予定通り、お前は盾役に徹しろ。アーチャーからの遠距離攻撃を防いで、キャスターの詠唱時間を稼ぐんだ。勿論、藤丸とオルガを守る事も忘れるなよ」

「はい！」

「キャスターは兎に角、詠唱しまくれ。幾ら生前が白兵戦の達人だったからと言って、今はあくまでキャスターなんだ。無用の接近は控えろ。控えた方がいい」

「可能な限りはな。けど、用心しろよ。あいつはアーチャーの癖に短剣を使った近接戦も得意としてやがる」

「例え弓兵と言えど、近づかれれば剣を使って反撃に転ずることもある……か」

「そう珍しい事じゃないとはいえ、普通は最低限の迎撃の為に忍ばせておくもんだ。」

「それなのに、短剣で普通に戦える弓兵ってどうなのよソレ。」

「まあいい。相手がアーチャーである時点で、真正面から掛かって勝てるような相手じゃないんだ。なら、こっちはこっちなりのやり方で勝たせて貰うさ」

「……分かった。普通なら生身の人間が絶対に勝てない筈のサーヴァントに、何故か普通に勝ってるのがマスターだもんな。俺のマスター」

なら、それぐらいはやってくれないとな。じゃあ……頼んだぜ!! エ  
イワズ!!」

いつの間にか全力で弓を引き絞って矢をこちらに向けているアー  
チャーに向かつて、キヤスターがルーンを唱えて攻撃する。

それに合わせて、オレは全力で走り出した。

## 灼き尽くす炎の檻

「オラオラアツ!! こっちは攻め込む側なんだ! 遠慮なくガンガンいくぜっ!!」

「無駄に火力が高い男め……!」

柳洞寺へと続く空洞にて始まったアーチャーとの戦い。

位置的には、キャスター達が下で、アーチャーが崖の上に立っている形となる。

自分達的には、先へと行けさえすればいいので、後ろにいるオルガや立香のことはさほど気にせずに攻撃が出来る。

後ろ二人へと攻撃は、マシユが文字通りの盾役になってくれているので、キャスターは真つ直ぐにアーチャーだけを見据えていればいいのだ。

「槍を持たずとも、ここまでの力を発揮するとは……! 流石は噂に名高い『光の御子』ですね……」

「よせやい。そんなことを言われちまったら……」

杖を使って自分の前方に複数のルーンを展開。

それを一気にアーチャーに目掛けて放つ。

「思わず張りきつちまうだろうがよ!!」

セイバーの素直な感想に興が乗ったのか、キャスターの火力が明らかに上がった。

それはまさに一種の灼熱地獄。

だがしかし、そこまでされてアーチャーとて黙っているわけではない。

「余り調子に乗らない事だ! キャスター!!」

その手に弓を作り出し、もう片方の手には鋭い矢を創り出す。

「別にお前を狙わずとも、マスターさえ殺してしまえば……何っ!？」

将を射んと欲すれば、まずは馬を射よ。

その精神でキャスターのマスターである鞠絵を探すが、どこにも見当たらない。

視界にいるのは、さつきからルーンを撃ちまくっているキャスター

と、その後ろで盾を構えているシールドだ。

そして、その盾の後ろに隠れるようにして立っている二人の少女と、その隣でジツと静かに佇んでいるセイバー。

それを見て、アーチャーは思わず息を飲んだ。

(セイバーの剣に魔力が集中している…？ まさかつ!?)

およそ考えうる最悪の事態。

そこで彼は先程、キャスターが言った言葉を思い出す。

(あいつは確か『遠慮をしない』と言っていた…！ もしや、セイバーの宝具の威力で、柳洞寺ごと我々を一気に葬り去る気かつ!?)

普通ならば無理だと思うだろう。

だが、アーチャーは知っていた。

あのセイバーの宝具の威力を。その効果範囲を。

(彼女の宝具は『対城宝具』！ その気になれば、一気に決着をつける事も不可能ではない！ キャスターのこの攻撃は、セイバーの準備が整うまでの時間稼ぎか！)

ここでアーチャーは致命的なミスを二つ犯した。

まず一つは、セイバーの様子を見て勘違いをしてしまった事。

もう一つは、焦りの余り、鞠絵を探す事を放棄してしまった事だ。

「そうはさせん!!」

急いでアーチャーは矢の照準をキャスターや後ろの面々ではなく、セイバーへと変更した。

焦燥に駆られて放たれた矢の一撃は、そうなる事を予め想定していたかのような動きでセイバーの前に出てきたシールド…マシユの大盾にて完全に防がれてしまった。

「やらせません！ 皆さんは…私が絶対に守ります!!」

「ちいっ！」

「その意気だ！ 盾の嬢ちゃん!!」

このままでは埒が明かない。

可能であれば、キャスタークラスが最も苦手とする接近戦に持ち込むべきなのだろうが、絶え間なく放たれる炎のルーンにて行く手を塞がれ、近づくためには自分自身も相当なダメージを覚悟しなければい

けない。

(油断をして相手に先手を譲ってしまった結果がこれか…！)

もう完全に、勝負は遠距離戦での戦いになってしまってる。

本来ならば、それはアーチャーのクラスの独壇場。

しかし、相手は攻守共に腹立たしくなる程に完璧な布陣。

このような状況ではもう、己にやれるべき事は必然的に限定されてくる。

「そんじゃ、そろそろ決めさせてもらおうとするかねっ!!」

突如、キヤスターの魔力が大きく膨れ上がる。

それを感じたアーチャーは、すぐに相手が何をしようとしているかを理解した。

(どうするっ!? こっちは『アイアス』で防ぐかつ!? いや…『今の私』ではアイアスは使えないのだったな。ならば、やるべき事は一つのみ!)

その手に先程とは違う、派手な装飾がされたドリルのような剣を出現させ、それを一本の矢のように細く、鋭く変化させた。

「我が骨子は捻じれ狂う…!」

「我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人! 因果応報、人事の厄を清める社!」

キヤスターの詠唱が終わると同時に出現したのは、無数の細木の枝によって構成されている灼熱の巨人。

それが、まるで何かに飢えているかのように暴れ回っていた。

だが、アーチャーの方もそれに対して一切怯むことなく立ち向かい、己の渾身の一撃を最大限まで引き絞る。

「焼き尽くせ木々の巨人! 『<sup>ウイック</sup>灼き尽くす炎の檻!!』」

「爆ぜるがいい!! 『<sup>カラドボル</sup>偽・螺旋』……」

だが、アーチャーの言葉が最後まで紡がれる事は無かった。

何故ならば、彼の胸が明らかに無機物と思われる腕によって貫かれていたから。

「ずっと待ってたよ。お前が『とっておき』を披露する瞬間をな」

「なん…だと…!?!」

その貫いた腕の持ち主は、先程からずっと姿を消していたキャスターとセイバーのマスターである望月鞆絵その人だった。

不敵な笑みを浮かべながら、その血の通っていない腕にて、サーヴァントであるアーチャーの体を貫く。

それは、英霊や聖杯戦争の事を知っている人間ならば、絶対に考え付かない事だった。

人間では英霊には勝てない。

その絶対的な法則が常識的なレベルで存在していたから。

「ま…まさか…：キャスターやセイバーこそが囿であり…君こそが本命だったと言うのか…：…！」

「その通り。覚えときな。本当の天才つてのはな、いつの世も『常識』を真正面から覆してなんぼなんだよ」

そうしている間にも、キャスターの召喚した巨人が迫ってくる。

その激しい熱気を感じた鞆絵は、すぐに腕を引き抜いてから、その場を離脱して、急いで皆の元まで駆けていく。

残されたのは、致命傷を負わされて攻撃も防御も離脱も出来なくなったアーチャーだけ。

「…成る程。これが堕ちた者の末路と言う訳か」

その眩きを最後に、アーチャー凄まじい爆熱と衝撃に包まれた。

・

・

・

・

・

さて…と。

アーチャーを無事に撃破したことだし、ライダーの時のように完全に消えてしまう前に事情聴取でもしますかね。

けど、その前に一言物申す。

「おいキャスターさんよ」

「なんだ？」

「宝具を使うなら使うって前もって言っとけよな。勝手に真名解放なんかしやがって」

「いいじゃねえかよ、過ぎちまったことは。んなこと言ってたら大きくなれねえぞ？」

「もうとつくに成長期は終わつとるわ!!」

眩しい笑顔でオレの頭をグリグリと撫でるな〜!

髪の毛がボサボサになつちゃうじゃんかよ!

「あれが英霊の宝具なのね……凄い威力と迫力だったわ……」

「う……うん……マジで凄かったよね……」

「私にも……あんな事がいつかは出来るようになるんでしようか……」

「大丈夫ですよマシユ。今の貴女も立派な英霊。必ずや宝具を使えるようになりますとも」

女性陣も女性陣で色々と話してるけど、まずはアーチャーだな。

おーおー。なんともまあ……見事なクレーターになってますこと。

「げ。あの一撃を受けてもまだ生きてんのかよ? 往生際が悪すぎんぞ」

「ふっ……それがアーチャーのサーヴァントの特徴だからな……」

なんか普通に話してるけど、もう下半身は完全に消えている。

残りの上半身も消えるのは時間の問題だ。

「にしても、よもや無手で英霊の体を貫くとはね……。君のその腕は一体……」

「これか？」

袖を捲ってから、ずっと隠れていた両腕の『義手』を見せた。

「もつちー……それって……」

「おいおい……嬢ちゃん……そいつは……」

全く事情を知らないキャスターや藤丸が驚いた顔をしている。

マシユやオルガといった、最初から義手の事を知っていた二人は暗い表情になったが。

セイバーに至っては、今にも泣きそうな顔をしてしまっている。

お前は何も悪くは無いんだよ。

「お前達にはもう言っただろ？ オレが前に冬木の聖杯戦争に参加してたって」

「う……うん……」

「その時にな、ちよつと不覚を取ってしまったって、アサシンの奴に両腕を持っていかれたんだ」

「マジかよおい……！」

我ながら、よくあの時は悲鳴を上げなかったと思うよ。

必死に痛みを耐えながら、マリスの奴の魔術で痛覚を押さえて貰ったっけ。

「両腕を失ったってんなら、令呪はどうしたんだ？ まさか、そのまま奪われたなんてことは……」

「ンなわけないだろ？ 天才たる者、いつ何時も最悪の状況を想定すべし……ってな。令呪は発現した瞬間に予め手の甲から背中に移動させてたよ」

「令呪の移動なんて出来たのかよ……」

「マリスのキャスターに頼んだら普通に出来た」

「お父様は一体どんなサーヴァントを召喚したのよ……」

それを知ったら、色んな意味で驚くと思うぞ。

「んで、この義手なんだがな。聖杯戦争が終わった後に知り合いの『人形師』に頼んでな、特別製の義手を作って貰った」

「特別製……だと……？」

「この義手を使えば、霊体のように『本来ならば実体のない存在』を普通に掴めるようになるんだと」

「英霊とタメ張れる理由はそれだったのかよ……。確かに、そういった特性を持つ義手ならば、サーヴァントとも互角に戦えても不思議じゃねえな」

本当はそれだけじゃないんだけど、そこはまだ言わなくてもいいかな？

「その『人形師』とは、まさか……」



ん？ アーチャーの奴、あいつの事を知ってるのか？  
何気に交友関係が広がったからな。

オレが知らない友人がいても不思議じゃないか。

「だが…君が我々と戦えるのは、それだけが理由じゃないだろう…？」  
「なに？」

「君に貫かれて…私には…俺にだけは分かった。君の…体の中には  
……」

「あ…ちよ…おいつ!？」

「セイバー…俺は…君の…事を……」

「アーチャー…貴方は……」

しまった…！ 色々と話している間にアーチャーの限界時間が来  
ちまった！

言いたいことだけ言ってから消滅しやがって！

「この野郎…最後に何を言おうとしてたんだ？」

「先生の中に何かがあるとのおうとしてたみたいだけど……」

ギリギリのところでは知られずに済んだけど、意味深な言葉を遺して  
いきやがって……。

これで皆に知られたら、お前のせいだかな！

もし仮に召喚出来たら、めっちゃこき使ってやる！

「彼と私は、別のどこかで面識があつたのでしようか……」

「多分な。けど、今はそれを論じている場合じゃない」

「承知しています。行きましょう…もう一人の私がいる場所に」

「うん！」

「はい！」

「おう！」

この先に…この特異点のセイバーがいる……！

ここからが正念場だな……。

……  
……  
……

・  
・  
・

アーチャーを撃破して、オレ達は空洞の中を歩いていく。

どうやら、あいつこそが最後にして唯一の障害だったようで、他にはもう何にも罨らしきものは存在していなかった。

それだけ、アーチャーには全幅の信頼を置いていたって事か。

「もうすぐ出るぞ。セイバー」

「はい。お任せを」

出口が近づき、そこを抜けると……。

「来たか。もう一人の私よ」

漆黒の甲冑に身を包んだアルトリアが、ドス黒い球体を背にして、暗い空の下で佇んでいた。

この特異点での最後の戦いが始まる。

## 聖剣VS聖剣

空洞を抜けた先に待ち受けていたのは、この特異点の聖杯に召喚された、もう一人のアルトリア・ペンドラゴン。

だが、その姿はオレ達の側にいるアルトリアとは、余りにも大きくかけ離れていた。

白銀の鎧と対を成すかのような、漆黒に染まり赤い線が浮き出ている鎧。

着ている服もまた漆黒に染まっていて、その顔には禍々しいバイザーが装着されている。

トドメは、その綺麗なブロンドの髪がくすんで、頭頂部から出ていた筈のくせつ毛が無くなっていた。

「あれが……この特異点における私……」

「ああ……その通りだ。見た目だけならお前さんともいくつか共通点があるかもしれないが、性格の方は期待しない方がいいぞ。あれはもうサーヴァントなんて生易しい存在じゃねえ。正真正銘の破壊の化身だ」

キヤスターが警戒を促すようにセイバーに忠告をする。

にしても『破壊の化身』……ね。

言い得て妙だが、不思議としつくりとくるな。

「ここまで来たという事は、アーチャーを倒した……という事で良いのだな？ キヤスター」

「ああ。この俺と、仮マスターであるこの嬢ちゃんの連携の前に敗れたよ」

「そうか……」

声は一緒でも、その口調は何処までも機械的で冷たい。

とてもじゃないが、同一人物とは思えないな。

っていうか、なんかこっち見てないか？

「貴様がもう一人の私のマスターか」

「だったらどうした？ 真っ先に狙うか？」

流星のオレも、聖剣とまともに戦り合ったらタダじゃ済まない。

下手したら、この義手が壊されるかも。

「も…もっちー……」

不安そうな顔で藤丸がオレに寄り添う。

声と足が震えていることから察するに、あいつが放っている殺気に怯えているって所か。

それでも必死に両足で立っている辺り、お前は充分に凄いよ。

並の魔術師なら、とつくに小便漏らして白目を向いてから気絶して  
る。

「お前は後ろに下がってからマシユやオルガの傍にいろ。いいな？」

「う…うん……。もっちーも気を付けてね……」

「心配すんな。真の天才に不可能はない」

ゆっくりと背後に下がる藤丸を確認しながら、オレはマシユに目配  
せをする。

こつちの意図をすぐに察したのか、あいつは力強く頷いてくれた。

「キャスターも後方に下がっててくれ。さっきの宝具で相当に魔力を  
消費してるんだろ？」

「……嬢ちゃんにはバレてるか」

「仮契約でも、オレはお前のマスターだ。それぐらいは手に取るよう  
にわかる」

「そっか」

「ここからはオレとセイバーの仕事だ。お前もマシユと一緒に二人の  
事を守っててくれ」

「了解だ。なあに、お前達のコンビなら絶対に勝てるよ。さっき、アー  
チャーの野郎が言い掛けてたことだが、お前さんには『アレ』がある。  
パスを繋いでいる俺だからこそわかる『アレ』がな。この戦い……一  
見すると向こうにアドバンテージがあるように思えるが、実際にはそ  
うじゃない。単純な『条件』だけなら間違いなく互角。だが、向こう  
には無くてコツチにはある物がある。アイツは気が付いていないよ  
うだが、この勝負……勝ち目は充分にあるぜ」

「んなことは最初から分かっているよ。でもなキャスター。お前は一つ  
だけ大きな勘違いをしているぞ」

「なんだよ?」

「条件云々に関係なく、本物の天才は、目の前にどんなにデカイ壁が立ち塞がっていても、それを真正面からぶち壊していくもんなんだよ」  
「違いねえ」

拳と拳を軽くコツンとぶつけ合ってから、キャスターは皆の傍まで歩いて行った。

前に残っているのは、オレとセイバーの二人だけになった。

「最後の会話は終わったか?」

「お蔭様でな。でも、最後は余計だ」

「最後だ。お前達の運命は我が剣にてここで潰えるのだからな」

勝手に言ってる。その顔、今から驚きに染めてやるよ。

「もう一人の私よ」

「なんだ」

「貴様の後ろにて禍々しく蠢いている漆黒の球体が、この世界における『聖杯』なのか?」

「だとしたら?」

「必ず破壊する。あれはもう万能の願望器などではない。破滅しか生み出さない悪意の塊だ」

「やれるものならばやってみるがいい」

「言われずとも! マスター!!」

「ああ!!」

魔術回路をフル回転させて、セイバーに魔力を送り込む。

すると、今までずっと魔力を蓄積し続けた聖剣の輝きが更に増した。

「その輝きは……面白い!!」

あいつ……ってのはなんだかあれだな。

よし。ここは仮の呼称としてあいつの事は『セイバー・オルタ』と呼ぶ事にしよう。

セイバー・オルタの黒い聖剣もまた漆黒の光を放ち、その刀身に見た目で分かるほどに魔力が集中していく。

これは……間違いなく特大の一撃が来るぞ!!

「束ねるは星の息吹……輝ける命の奔流……受けるがいい!!」  
「卑王鉄槌……極光は反転する。光を飲め!!」

白と黒。

光と闇。

陰と陽。

正と邪。

元は全く同じだった二本の究極の剣が今、この地でぶつかる。

約<sub>エ</sub>約<sub>エ</sub>  
束<sub>ク</sub>束<sub>ク</sub>  
さ<sub>ス</sub>さ<sub>ク</sub>  
れ<sub>カ</sub>れ<sub>ス</sub>  
た<sub>バ</sub>た<sub>カ</sub>  
勝<sub>モ</sub>勝<sub>カ</sub>  
利<sub>ル</sub>利<sub>リ</sub>  
の<sub>ガ</sub>の<sub>バ</sub>  
劍<sub>ン</sub>劍<sub>一</sub>

「ぎやああああああああああっ!!?」

「マ…マスター！ 所長！ 私とキャスターさんの後ろに！」

「なんちゅー威力だよ…：冗談じゃねえぞ!!」

なんか後ろで騒いでいるが、それを気にしている暇なんて全く無い！

聖剣と聖剣の全力のぶつかり合い。

それは余波だけでも凄まじい威力を發揮し、オレ達の周囲の岩肌を容易に削り取っていく。

「はああああああああああああああああっ!!!」

二人の魔力が更に増大する。

セイバーには予め、こつちに事は全く気にせず全力でいけと伝えられている。

そもそも、節約をして勝てるほど、円卓の騎士は甘くはない。

それぞれの聖剣から放たれた一撃は、中央付近で激しくぶつかり合い、威力は完全に拮抗していた。

やがて、それは力の行き場を失い、混ざり合ってから轟音を轟かせながら上空へと消えて行った。

「そ…相殺…された…?」

「みたい…ね……」

「余波だけでこの威力って…強すぎだろ……」

「けど、これで相手の宝具は防げました！」

「いや…まだだ」

「「え？」」

安心しきっている女子三人には悪いが、まだまだ全然終わってない。  
い。

だって、向こうさんは超ピンピンしてるから。

「やるな。だが、今の一撃で終わりと思わない事だ」

再び、オルタの剣に黒い魔力が迸る。

「ほ…宝具を二連発ですってっ!? そんな事有り得ない! あんな威力の一撃を連続でなんて、魔力が持つ筈がないわ!!」

「普通はな。だが、今の私は聖杯と繋がっている。即ち、私は聖杯から無限に等しい魔力を常に供給されているのだ」

「そ…そんな……」

「どんだけチートだよ……クソが!」

キャスターが顔を歪ませ、オルガが愕然として膝をつく。

ふむふむ……聖杯と繋がってる…ねえ。

「さて…私はまだ余裕なわけだが、そちらはどうする? 素直に私の宝具を受けるか?」

「そうだな……んじゃ、セイバー。頼むわ」

「承知」

セイバーが剣を下段に構えると、再び刀身に光が宿る。

「なっ!」

「ん? 何をそんなに驚いてんだ?」

「何故だ……何故に再び宝具を放とうとすることが出来るっ!? 今の一撃で、貴様の魔力は完全に尽きた筈だ!」

「おいコラ。人の魔力量を勝手に決めつけんなよな」

「ったく……幾ら体が小さいからって、そーゆー偏見はいけないと思いますー!」

もっちー怒りますよ! ふんぷん!

……ごめん。ちよつちぶぎげ過ぎたわ。

「貴様は……一体なんだ……! ただの子供ではないな……!」

「どこにでもいる、ただの天才科学者様じゃ。っーか、子供言うな」



本当はもつと詳しく弁明したいけど、流石に空気を考えてこれだけにしておく。

「その体のどこに、それだけの魔力を抱えているというのだ……!」  
「ンなもん簡単な理屈だよ。お前が聖杯から魔力を供給してるんなら、こつちも同じように聖杯から魔力を供給すればいい」  
「なんだとっ!？」

ここで服の胸元を少しだけ開けてから、そこに施されている封印術式を少しだけ解く。

すると、オレの全身が黄金に光り輝く始め、そこから同じように黄金に光り輝く杯が姿を現した。

「せ…聖杯だとッ!？」

「その通り。オレ達の世界で起きた聖杯戦争。それに勝利したキャスターと、そのマスターであるマリスビリーは見事に自分達の願いを叶えた。けど、それで全てが終わるわけじゃないんだよ」

「聖杯戦争が終わると、その次の聖杯戦争に備えて、魔術教会の手によって再び聖杯を封印しなくてはいけない…ですよね？」

「セイバーの言う通りだ。だが、聖杯を再封印するってことは即ち、またいつの日か聖杯戦争が開始される事を意味している。そんな事はオレもマリスもキャスターも全く望んでいなかった。だから、願望器としての役目を終えた聖杯を、未来の為に有効活用しようと考えたわけだ」

「ま…まさか……!？」

どうやら、向こうさんもなんとなく想像が出来たみたいだな。

「そうだよ。キャスターの力を使って、オレの体の中に聖杯を封印した。ちゃんと、それが他者にバレないように嚴重な隠蔽処理もしてな」

「つ…つまり…貴様は……」

「そう。オレ自身が云わば『聖杯』なんだよ。願望器としての力は全く無いが、それでも聖杯が内蔵している魔力は超膨大だ。こんな無茶が出来るのは、オレ以外にはウチの両親ぐらいだろうさ」

あの人達の場合、嬉々として聖杯と一つになりそうだけだ。

「分かるか？ お前とこっちとでは、魔力の量だけで言うなら完全にイーブンなんだよ。ってことは、この戦いの勝敗を分けるのは別の要因って事になる。もう…分かってるよな？」

「クツ……！」

やっと悔しそうな顔を見せてくれたな。

それでこそ、こっちの切り札を出した甲斐があったってものだ。

けど、その前に聖杯を体の中に戻さないとな。うんしょつと。

「こっちのセイバーにはマスターがいるが、お前にはいない。それがどうしてなのかは未だに疑問だが、今はそれを論じている暇じゃないから置いておく。マスターの有無…それは即ち、令呪の有無と同義だ。お前には無い切り札が、こっちにはある。それだけでもう十分に勝機はあるって思うんだけどな？」

かといって、令呪の乱用はしないけどな。

ちゃんと使用するタイミングは計らないと。

「そうだ。因みに言っておくとだな……」

少しだけ目を瞑って精神を集中させる。

すると、背中に移植されている令呪が大きく浮かび上がり、光の塊となって出現した。

「オレは『七枚羽』だ」

「第一位……熾天使……！」

「御名答。そして、お話しタイムはここまで。そろそろケリ…つけようや」

セイバーがオレから更に魔力を持っていたのを感じた。

聖剣の輝きが大幅に増し、視覚的にも向こうよりも威力が上なのに分る。

「ゆくぞ……闇に堕ちたもう一人の私よ!!」

「おのれ……！」

先程と同じく、二人揃って聖剣を振りかざし、全力で振り下ろす！

それは圧倒的な力の奔流となって、再び大地を駆ける。

「はあああああああああああああああああああつ!!!」  
力と力。威力と威力のぶつかり合い。

ここまでではさつきと一緒だ。ここまでではな。

「セイバー！ 汝がマスター『望月鞠絵』が令呪を持って命ずる!! オレの…聖杯の魔力を好きなだけ使って、聖剣の威力を可能な限りブーストしろ!!」

「分 か り ま し た!!  
おおおおおおおおおおおおおおおつ!!」

最初は拮抗していた威力が、徐々にではあるがこちらに傾きつつあった。

それを見たセイバーがニヤリと笑い、トドメと言わんばかりに更なるブーストを掛けた。

ちゃんと足を踏ん張ってないと、オレの体が余波で吹き飛びそう  
だ。

実際、後ろじゃ藤丸とオルガが飛びそうになってマシユとキャスターに支えられている。

「この私が…押されている…だと…!」

「これが私と鞠絵の力! 私達が紡いできた…絆の力  
だあああああつ!!」

声も挙げる事無く、セイバー・オルタは圧倒的なまでの光の奔流に飲み込まれ、彼女が立っていた場所には巨大な光の柱が屹立した。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「そうか…これが…敗北か…」

あれだけの威力の直撃を受けたにも関わらず、オルタは完全消滅しておらず、自らの剣を杖代わりに辛うじて立っていた。

だが、流石にもう限界なのだろう。顔に付けていたバイザーは砕け、その顔が僅かではあるが見えていて、黒い鎧も全体的に罅割れ、足元から消えかけて居た。

「よもや……自分自身に敗れ去るとはな……笑い話にもならない……」

口調だけは強がっているが、額や口から出血していることから、本当はもう喋る事も難しい筈だ。

それなのに話すのを止めないのは、こいつなりの意地なのか。

「最後に一つだけ聞かせろ……もう一人の私よ……」

「なんですか？」

「どうして……貴様はそんなにも強い……」

「鞠絵がいるからです」

「なに……？」

「マスターが……愛する者が傍にいるから、私はどんな戦いにも赴けるし、絶対に怯まない」

「愛する者……か。偽りの婚姻しかしてこなかった自分の口から、そんな言葉を聞けるとはな……」

もう完全に死に体となっているオルタが、ゆっくりとこつちを向いた。

「もう一人の私のマスターよ……貴殿の名前を聞かせてほしい……」

「望月鞠絵。いずれ、世界一の天才科学者になる人間だ。そのちっさい頭によく刻んどけ」

「世界一の天才科学者……か。ふふ……それぐらいの人物でなくては……私の負けた意味が無い……」

最後の最後までプライドが高い奴。

どこまで自尊心高いちゅーねん。

「キヤスター……最後に残ったのはお前になったな……」

「そうだな。だが、俺はあんな汚ねえ聖杯なんざいらん。こつちから願ひ下げだ」

「貴様らしい……な……ごはっ……」

派手に吐血をして、その血が地面に沁み込んでいく。

いつの間にか傍まで来ていた藤丸がオルタの体を支えようとしたが、オレがそれを制して止めさせた。

最後の最後まで、せめて騎士らしく逝かせてやりたい。

「キヤスター……これだけは覚えておけ。これから先、どんな風に運命が変化しようとも、結末は変わらない」

「んだと……？ おい、それは一体どういう意味だ？」

「ここで語らずとも、いずれ分かる日が必ず来る。そう……『グランド・オーダー冠位指定』……聖杯を巡る真の戦いは、今この瞬間から始まるのだという事をな……」

……は？ おい……今こいつ……なんつった？

「ちよい待てよ……なんでお前がその言葉を知っているっ!? そいつは……そいつは!」

その単語の真の意味を知っている人間は、オレを含めて世界にごく少数しか存在しない筈。

それなのに、どうしてこいつがそれを知っているんだっ!?

「もしも……もしも……私にもマスターがいて……それが貴殿だったならば……私も……そいつのように……」

満身創痍の体を必死に動かし、オレの頬を撫でるような仕草をしてから、セイバー・オルタは今度こそ完全に消滅した。

散り際に見せた彼女の笑顔は、とても美しく……眩しく見えた。

こんな事もあるのかと

セイバー・オルタを撃破したオレ達は、精神的な意味で少しだけ安息を得ていた。

実際に安心していたのは藤丸やオルガ、マシユと言った実戦経験に乏しいメンバーばかりで、オレやセイバーは未だに気を引き締め続けていた。

「おつと。俺もここまでか」

「キャスター……」

役目を終えたからなのか、キャスターの体も他のサーヴァント達と同じように消えかけていた。

「キャスターさん……」

「そんな悲しそうな顔をすんなって。また縁があれば会えるさ。例えば、お前さんか嬢ちゃんが俺を召喚するとかしてな」

「……うん！」

少しだけ泣きそうになっていた藤丸だが、キャスターの言葉ですぐに元気を取り戻した。

こいつのこの性格だけは、本当に凄いと思う。

「キャスター……いえ、クー・フリーン。貴方と共に戦えた事は、本当に得難い経験でした」

「おいおい。これでもう終わりみたいなのを言わないでくれよ。さつきも言ったろ？ また縁があれば会えるかもしれないって」

「そうですね。その時は是非とも、伝説に刻まれる程の槍の冴えを見せてほしいものです」

「もしも俺がランサーのクラスで召喚されたらな。つつーわけで、嬢ちゃん！ もしもカルデアとやらで俺を召喚する時は、ランサーのクラスで頼むぜ！」

「上手くいったらな。……ありがとな。お前がいなかったら、本当にどうなっていたか分らない。世話になった」

「礼を言うのはこつちだぜ。こんな地獄みたいな場所で、最高の味方と巡り合った。しかも、その内の一人は最上級のマスターと来てやが

る。…仮とはいえ、嬢ちゃんと契約して、一緒に戦えてよかったぜ」  
別れの言葉替わりか、キャスターは消えゆく体で俺の頭を乱雑に撫  
でた。

いつもならば文句の一言でも言うところだが、今回は流石に空気を  
読んで黙っていた。

「そうだ。最後に一言」

「なんだ？」

「いい加減にオレの事を『嬢ちゃん』って呼ぶのだけは止めろ。オレは  
立派な男だし、歳も35なんだぞ」

「こつちも何度も言うけどよ、その見た目で言われても説得力皆無  
だって。んじゃな！」

結局、最後の最後まで呼び方を訂正することなく、キャスターは消  
えていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

冬木の聖杯の呼ばれた英霊が全て消滅し、この場に残っているサー  
ヴァントは、オレが自分の聖杯で呼び出したセイバーのみ。

「あの…先生……」

「なんだ？」

「あの真っ黒いのが…そうなんですよね？」

「真っ黒いの？ ああ…あれな。」

「その通りだ。本来の姿をしてはいないが、あれがこの地における聖  
杯…より正確に言えば、願望器としての力を発揮する『大聖杯』だ」  
「凄すぎる……文字通り、超弩級の魔術炉心じゃないの……！」 前々

からずつと疑問には思っていたけど、どうして聖杯なんて代物が日本に存在しているのよ……。私の記憶が正しければ、少なくともこの国は『聖杯伝説』とは全くの無関係だったはず……」

まあ…時計塔に属する者として、その疑問は尤もだよな。

藤丸は話に着いて来れずに、またFXで有り金全部溶かした顔になつてるけど。

「聖杯を生み出したのは『アインツベルン』の連中だよ」

「ここに来る道中でも聞いた、御三家の一角と言われている、あの……」

「そうだよ。その殆どがホムンクルスで構成している特殊な連中だな。その魔術回路や血筋は間違いなく超一流だ」

あそこのジジイとはオレも知り合いだからな。

会う度会う度に憎まれ口を叩いてくるクソジジイだけど。

「けど、目の前にあるアレには願望器としての機能は愚か、聖杯としての存在すら保てなくなつてやがる。あれは…空っぽの器だよ」

「もつちー…空っぽってどういう事？」

「それは……」

オレが藤丸に説明をしようとした時、いきなり通信でロマニが割り込んできた。

『聖杯を万能の願望器として機能させようとするには、その中に英霊の魂が必要になるんだよ』

「英霊の魂……」

『そう。聖杯戦争で脱落した英霊の魂は、そのまま自動的に聖杯の中へと溜まつていく仕組みになつてるんだ』

「そっか……それで、最後まで残ったペアが自動的に願いを叶えられるようになるわけなんだね」

『その通り！ いや、立香ちゃんは理解が早くて助かるなあ〜！』

「えへへ……」

人のセリフを全部奪つておいて、よく言うよ。

しかも、一番肝心な事は全部ぼかしやがった。

聖杯を願望器にするには、合計で『7つの英霊の魂』が必須なんだっ



てことを。

それこそが、令呪が存在する本当の意味。

これを生み出した『間桐』の連中は、相当に性格が悪いよな。

「色々はまだ不明な点が多いが、取り敢えずはこれでミッション終了  
…つてことでいいよな？ オルガ」

「え？ あ…はい！ そうですね。それじゃあロマニ。回収して  
……」

「ちよつと待ってくれ」

「え？ ど…どうしたんですか？」

「カルデアに戻る前に、少しだけ一服させてくれよ。体が持たないぜ  
……」

白衣のポケットから中華風のパッケージな煙草『煙龍』を一本だけ  
取り出して、口に咥えてから指先から火を出して思い切り吸った。

「プハ〜……」

「鞠絵…いつの間に煙草なんかを？」

「あの聖杯戦争が終わった直後ぐらいかな。この義手を作ってくれた  
『人形師』に進められてな。気が付けば、普通に吸うようになってた」

あく…体動かした後の煙草は超うめ〜！

後は美味しい酒でもあれば完璧だな。

「とこころで……」

「……いつまでコソコソと隠れているつもりだ？ レフ」

「『えっ!?!』」

セイバー以外の四人が揃って面喰っていた。  
落ち着いているのはセイバーだけで、こいつは既に気配を感じ取っていたようだ。

「……まさか、気が付いていたとはね。お見事だよ。流石は博士だ」  
パチパチパチという拍手と共に、見慣れた緑のスーツを着た男が崖

の上から姿を現した。

「レ：レフ：？？ なんで貴方がここに……？ だつて貴方は……」

「しかも、其処にいるのは48人目のマスター候補生の子か。微塵も見込みがないから見逃していたが、博士がここにいるのなら納得がいく。彼ならば、多少の足手纏いがいても全く問題が無いだろうからな」

オルガの事を完全に無視して、オレと藤丸の事だけを見てやがる。相変わらず、ムカつく目をしてるよ。

『レ：レフ教授っ!?! なんで彼がそこにつ!?! 貴方は確かに……』

「死んだはず……か？ 酷いな。勝手に私の事を殺さないでくれないか？ ロマニ」

普段は細目になっているレフの目が大きく見開かれ、瞬間、物凄く不快な気が辺りを覆った。

といつても、藤丸みたいな生粋の一般人には感じられてないようだが。

「全く……正しく状況把握もせずに、自分勝手に結論を付けたがる。本当に……本当に……どいつもこいつも、愚か過ぎて吐き気が止まらない」

「そーかよ」

「博士。どうして人間という生き物は、こうも定められた運命からズレたがるのだろうか？」

「それは、人間が生まれた時から自由だからだ」

「自由……か。この世で最も価値のない言葉と概念だな」

好き勝手に言つてろ。

それよりも……。

「ああ……レフ……？？ な……なんで……」

やっぱり、オルガはショックが大きいか。

オレと同じぐらいに、レフの事も慕ってたからな、こいつは。

「マスター……博士……下がってください」

「マ……マシユ……?」

「上手く言葉には出来ないのですが……今のあの人は危険です！ あの

人は、私達が知っているレフ教授じゃありません！」

デミサーヴァントとなった事で、マシユは本能的な部分でレフの事を危険視しているようだな。

いい観察眼だ。悪くない。けどな……。

「そいつは違うぞマシユ」

「え？」

「あいつはオレ達がよく知ってるレフだよ。ただし、『本性を現した』って言葉が前に付くけどな」

煙草が短くなってきたので、口から落として足で踏み潰す。

「……矢張り、君だけは分かっていたのか」

「あつたりまえだ。天才舐めてんじゃねえ」

「参考までに聞きたい。いつからだ？」

「最初からだ。より正確に言えば、お前という存在を知った時から……だな」

「成る程な。伊達にあの両親の子供ではない……ということか」

それを言われると少しだけ複雑な気持ちになる。

なんせ、この事に確信が持てたのは、他でもない両親の『助言』のお蔭なのだから。

「レフ……レフ！ 貴方が生きてて本当に良かった！ 博士と貴方がいてくれさえすれば、どれだけ損害を受けても、またカルデアを立て直せる！」

「所長！ ダメです！ その人は……」

マシユの静止を振り切って、フラフラとした足取りで前に出るオルガ。

それを見て、レフは実に嫌らしい笑顔を浮かべた。

まるで、悪戯が成功したガキのように。

「やあ……なんだか五月蠅い奴がいると思つたら、オルガじゃないか。元気そうで何よりだ。どうやら、そっちも大変だったようだね」

「そうなのよレフ！ 管制室がいきなり爆発したと思つたら、いきなりこんな場所に放り出された挙句、カルデアには帰れなくなつてるし……」

オレはセイバーの傍まで行き、そつと彼女に耳打ちした。

「セイバー……」

「承知しています。任せてください」  
「頼む」

こんな時、詳しい事を言わなくても理解してくれるから、セイバーの事が好きなんだよな。

冗談抜きでめっちゃ頼りになる。

「む？　なんだか今、鞠絵から告白されたような気がします」

お願いだから、直感スキルでこっちの心を読まないでください。

「マシユ。お前は藤丸の傍から絶対に離れるな。お前もいいな？」

「は……はい！」

「うん！」

これでよし。後は……。

「予想外の事ばかりで本当に困り果ててた！　先生がいなかったら、

私……私……」

「そうかそうか」

全く耳に入っていないな。

だって、あいつの目はオルガじゃなくて、ずっとオレばかりを見ているから。

「確かにそうだね。世の中、予想外の事ばかりで本当に困る。その中でも特に予想外なのが君だよ、オルガ」

「わ……私？」

「ああ。あの時、確かに私は……」

「オルガの足元に爆弾を設置していたのに、生きていたから……か？」

オレが話に混ざって、セイバー以外の視線がオレに集中する。

「……え？　は……博士？　今……なんて……？」

「あの爆発の犯人が……」

『レフ教授……だっていうのか……!?!』

「そんな……」

皆が絶句するのも無理はない……か。

あれだけカルデアに馴染んでた奴が、実は裏切り者でした……なん

て、笑い話にもならないからな。

「そこまで見抜いていたのか」

「見抜くつてよりは、ここを探索している間に考察したつてのが正しいかな。ぶつちやけ、こうしてお前に会うまでは確証は無かった。けど、お前が姿を現したことで、その言葉の全てを聞いて、オレの中の疑問が確信に変わった」

「ほう……？」

「お前はカルデアでもかなり特殊な地位にいる奴だ。それこそ、どんな場所にも普通に入れるし、どんな時間にどんな場所にしても違和感が無く、言い訳が出来る。あのカルデアであんな威力の爆弾を仕掛けられる人間は本当に限定される。けど、オレにはそんな事をする理由はないし、所長であるオルガだつてそれは同じだ。となると……」

「消去法で犯人が私になる……という訳か。君は科学者よりも探偵の方が向いてるんじゃないかな？」

「かもな。けど、お生憎様。まだ転職をするつもりはないんでね」

「それは残念だ」

町外れにある小汚い探偵事務所よりも、オレには小奇麗な研究室の方が似合つてるよ。

「聡明な博士の事だ。オルガの体の事も気が付いているのではないかな？」

「……まあな」

「せ……先生……？」

できれば、ずっと隠したまままでいたかった。

けれど、あんな風に話を振られたら、話すしかないじゃないか……クソッ！

「あの時の爆発で、オルガの肉体は確かに死滅した。けど、その魂……残留思念はまだ残っていた。それをトリスメギストスがこの場所に転移……レイシフトさせてしまったんだ」

「え……？ 何……を言つて……」

「オルガにはレイシフト適性が全く無かった。その『適性』とはあくまで肉体に依存するものだ。魂だけの状態になつてしまえば関係なく

なる。皮肉にもオルガは肉体を失う事で初めてレイシフト適性を得ることに成功したんだ」

まともにオルガの顔が見れない。

さつきから、心の中で罪悪感がグサグサと突き刺さる。

だから、オレは一息で言ってしまうことにした。

「その通り！ 君はもう二度とカルデアには戻れない。何故なら、戻るべき肉体が存在しない君が戻ったが最後。その瞬間にその意識が完全消滅してしまうのだから！」

「しよ…消滅…？ 私…？」

……はあ……もうこれぐらいでいいか。

流石にレフのドヤ顔は見飽きた。

「おいレフ」

「なになかな？」

「お前…何か大きな勘違いをしてないか？」

「…なんだと？」

「確かに、このままカルデアに戻ればオルガは消滅してしまうだろう。けど、オレはただの一度も『オルガがカルデアには戻れない』なんて言った覚えはないぞ？」

「『！』『！』『！』」

よっし！ 初めてレフが驚く顔を見れた！

「な…何を言っているんだ君は……。あの時、オルガの肉体は……」

「そうだな。あの爆発で木端微塵になった。けどな、このオレが！

この望月鞠絵が！ 万が一の時に備えて全くの対策をしていなかったと、本当にそう思っているのかッ!？」

「ま…まさかあッ!？」

「そうだよ！ その『まさか』だよ！」

ここでレフに向かって超ドヤ顔を披露。

オレからのお返しだ！

「こんな事もあるうかと…ってな。カルデアの所長であるオルガに万が一の事が起きた場合に備えて、時計塔にいた頃に知り合ったサンダラスを掛けたデカイ凶体をしたネクロマンサーに魂を別の肉体に定

着させる魔術を教わっていてな。そいつを利用して、オルガの髪の毛からオレが生み出したオルガと全く同じ遺伝子を持つ素体：ホムンクルスに魂を乗り移らせる算段だったんだよ！ まさか、こんな形で使うことになるとは思ってもみなかったけどな！」

「じゃ…じゃあ！ 私は!?!」

「安心しろ！ ちゃんと戻れる！ その素体はオレの研究室の中にあるカプセルの中に保存してあるから、戻る場所は藤丸たちとは違ってオレの研究室になるけどな」

「それでいいです！ 寧ろ、そっちの方がいいです！」

さつきまでレフの方を見ていたオルガだったが、急にこつちを向いて走ってきてオレに抱き着いた。

……今回だけは許してやるか。

「先生……ありがとうございます……♡」

「おうおう。感謝しろしろ」

隣で怖い顔をしているセイバーが気になるけど、ここは敢えて見ない振り。

「……別に構わんさ。今更、小娘一人多く生き残ったところで、何も事態は変わらないのだからな……」

「だといいな」

なんとなくだけど、こいつが言おうとしている事は分かっている。

オレや藤丸、マシユもこの目で直に見てるからな。

けど、だからこそ更にこいつの顔を悔しがらせることが出来る。

「おいロマニ。聞こえるか？」

『な…なんだいっ?! 一応言っておくけど、さつきまでのやり取りはちゃんと聞いてたよ！ まさか、予備の肉体を用意するなんて、全く想像出来なかったよ！ 色々と倫理的な問題はあるんだろうけど、この場合は例外だと認められるだろう！』

「当たり前だ。なんたって、オレは天才だからな」

『全くだね。で、いきなり呼び出したりしてどうしたんだい?』

「いやな。お前に少し聞きたいことがあって」

『何かな?』



「カルデアスの色は何色だ？」

『何色って…さっきまでずっと燃えるような赤に染まっついて…つて、あれえっ!? 一つの間にか、元の青い色に戻ってるぞっ!? これはどういう事だっ!?』

「な…なんだとおっ!? そんな馬鹿なっ!?」

いや〜…超爽快!

ムカつく奴が狼狽える姿を見るのって、マジで気持ちいいわ!

「どうしてカルデアスの色が元に戻っているっ!? どうして人類の生存が未だに示されたままなんだっ!?」

「それは……」

「それは……私達が瀬戸際で防いでいるからよ」

「……………ここに来るのかよ……」

突如として出現する一人の女性。

オレと同じような白衣を着て、少し色素が薄くなった緑色の長い髪に、オレと同じタイプの眼鏡を掛け、体のスタイルや顔からは本来の年齢が全く想像が出来ない美女。

「き……貴様はっ!?!」

そりや、レフもマジで驚愕するよな。

オレも心の中じやめっちゃ驚いてる。

「随分と頑張っているようね。鞠絵ちゃん♡」

「母さん……」

この美女こそが、オレの実際の母親にして、もう一人の世界一の天才科学者。

「望月……京子……!」

レフが本気で戦慄してる。

こりやもう、オレの出る幕は無いかもな。

## Grand Order

「な……なぜ貴様がここにいるっ!？」

「あら。私がどこにしようかと、そんなの私の勝手でしょ？」

そりやそうだ。

けど、それは決していきなりここに表れていい理由にはならないだろうに。

「あ……あれが先生のお母様の……」

「望月京子博士……」

「うわあ……超美人だあ……」

「話に何度か聞いていましたが、よもやこの目で見る機会があらうとは……」

うん。なんとなく想像はしてました。

女性陣はこんな反応するよな。

大抵の奴が似たような反応するから、なんとなく分かった。

「そ……それよりも貴様……先程、何と言った？」

「瀬戸際で防いでいる……そう言ったのよ」

瀬戸際……ね。

この人がそんな言葉を使うのを見れる日が来るとは思わなかった。

例え、それが本心でなかったとしても。

「あ……あの……それは一体どういう……」

「あらー！ 貴方がうちの鞠絵ちゃんの自慢の教え子だっというオルガマリーちゃんね！ほんと、よく見ると色んな部分がお父様にそっくりだわー！」

「ええっ!？ 私の事を知って……？ とうるか、お父様の事を知ってるんですかっ!？」

「もっちろん！ 彼と私達夫婦は長い付き合いだもの。実際、鞠絵ちゃんに彼を紹介したのも私達だし」

「物凄く初耳なんですけどおっ!？」

だろうな。

マリスはかなりの秘密主義だからな。

「そして、その大きな盾を持っているのがマシユ・キリエライトちゃんね」

「わ…私の事も知ってるんですかっ!？」

「当然じゃない♡ お姉さんに知らない事は無いのよ？」

「自分で言いますか……」

この人にツツコんだらキリが無いから黙ってよう。

「で、その人畜無害そうな子が藤丸立香ちゃんね」

「まさかの私もですかあッ!？」

「藤丸。母さんに関しては、気にしたら負けだぞ」

「なんとなくだけど、私もそんな気がする……」

この流れ的に、次は……。

「と言う事は、貴女が鞠絵ちゃんと契約しているセイバーのサーヴァント『アルトリア・ペンドラゴン』ちゃんね」

「矢張り、私の事もご存知でしたか……」

「世界的な有名人な上に、大切な一人息子がパートナーとして選んだ子ですもの。知ってて当然でしょ？」

「パ…パートナー…ですか……」

うん。どうしてそこで照れる？

「わ…私を無視するなあっ!! この人間風情が!!」

「まあ酷い。人間風情ですってよ？ 鞠絵ちゃん。彼に教えてあげたら？ どうしてカルデアスが赤い状態から青い状態に戻っているのかを」

「りょーかい」

流星は母さん。

少しはオレに出番をくれるってか。

いいだろう。なら、その期待に応えてやるよ。

「レフ。そもそものお前の一番の失敗は、ウチの両親の事を『人間』だと思い、見下して最大級に警戒をしなかったことだ」

「なんだと……!？」

「息子であるオレが言うのもアレだけど、ウチの父さんと母さんは、この星と人類を心から愛して、尊敬してるんだよ。そんな人達が、人類

の存在を否定しようとする輩の事を警戒しないとでも？ 何の対抗策も準備してない？ どうしてそう思えた？ オレにはそれが本気で理解出来ない」

「ぐぐ………」

おくお。めっちゃ悔しそう。

これはマジで爽快だな。

「大体な、この人達は新婚旅行に散歩気分でブラックホールを抜けて別の並行宇宙に行くような、人知を超越しまくってる超人だぞ？ コンビニに行く感覚で銀河系の遙か彼方まで行つて鉱物採取したり、次の日には時空の壁を越えて普通にジュラ紀までタイムワープしてティラノサウルスを生きたまま捕獲して剥製にしたり、もう訳が分からない人達が存在しているのに、それをただ『人間だから』なんてくだらない理由で過小評価していた。ハッキリ言うわ。お前はバカか？」

自分の頭を人差し指でツンツンしながらのドヤ顔。

誰の真似とかは言わないで。

「お前が何を企もうとしたのかはオレには分からない。けどな、この世界には既に規格外の存在が普通に居座ってるんだ。何をやっても、絶対に無駄に終わるのは明白なんだよ」

割とマジで、オレにはレフの気持ち理解出来ない。

この人達の事を少しでも調べていけば或いは……いや、ないわ。

どんな策を取っても、この人達に意味ないわ。

「人理焼却よ」

「へ？」

「彼が…彼らがやろうとしたことは即ち、人理の焼却。今いる時代：2016年以降の人類史の焼却なの」

「なっ…!？」

「しょーきやく？」

「なんという事を……!？」

マシユとオルガは絶句、セイバーはレフの事を睨み付け、藤丸は相変わらず。

帰ったらちゃんと教えてやるよ。徹夜コースでな。

「そこまで把握していたのか…！ ならば、瀬戸際で止めているというのは……」

「そう。本来ならば、あのままカルデア以外の外の世界は消えてなくなっていた。けれど、ギリギリのところまで私と彼が結界を張って、人理焼却のエネルギーを食い止めてるの。外の世界に影響が一切出ないように」

「そんな馬鹿な事があるかつ！ 分かっているのかつ!? 一体どれだけの力が集約しているのかをつ!？」

「知ってるに決まってるじゃない。この世界を丸ごと焼き尽くすほどに超絶的な魔力の奔流。だけどね……『その程度』なら頑張れば防ぐことぐらい可能なのよ？ 少なくとも、私達ならね」

「ば…化け物が……!」

「えく？ 貴方がそれを言っちゃうのく？ お姉さんシヨックだわく」

ぶつちやけ、どつちもどつちだと思う。

「ちよい待ち。まず順番に聞きたいことがあるんだけど」

「何かしら？」

「最初に、二人は今までどこに行ってたんだ？ ムーンセルとか言ってたけど……」

「分かり易く言おうと、並行世界のお月様よ♡」

「お月様あ？」

「その通り。そこで『ちよつと捻くれてる可愛い後輩系美少女AIちゃん』と楽しく遊んでたの」

「はあ？」

な…なにそれ？

「そんな時に、なんかこつちに世界がピンチっぽい空気を感じたから、急いでお父さんと一緒に戻ってきたって訳。一瞬で事態を把握した私達は、すぐに結界を発動させて最悪の事態だけは防ぐことに成功したって訳」

『そうか！ それでカルデアスの色が真っ赤な色から青色に戻ったんだ！ 彼女達の結界のお蔭で、人類がまだ存在していると判断したか

ら!』

「その声は…貴方が話に聞いてた『ロマニ・アーキマン』君ね」

『は…始めまして! 貴女のような高名な方にこのような形で失礼だとは思いますが……』

「大丈夫よ。その程度ならば気にしないわ。お姉さんの心はエーゲ海と同じぐらいに広いから」

『なんて反応したらいいのかわからない例を出された……』

やっぱ、母さんもロマニの事に気が付いているんだろな。

基本的に、この人達に隠し事は絶対に出来ないから。

「そもそもね。鞠絵ちゃんの大切なお嫁さん候補が生きてる世界を、そう簡単に壊させるわけないでしょ?」

「「お…お嫁さん候補っ!?!」」

お…おう…どうしてそこでオルガとセイバーとマシユと藤丸が一斉に叫ぶ?」

「これから先、もつと候補は増えるかもしれないわね。そう思うと尚更、この世界は守らないといけなくなる」

「そんな理由で貴様等は……!」

「そんな理由? ふざけないで。母親として、子の未来を守るは当然の事よ。それを『そんな理由』なんて一蹴する時点で、貴方には勝ち目なんてない」

なんだろう…すげー説得力。

母は強し…ってことなのかな。

「なあ…母さんがここにいてるって事は、今頃父さんは……?」

「一人で頑張ってるんじゃないかしら? カップラーメンでも食べながら」

.....  
.....  
.....

「ふむ……僕達が出かけている間に、まさか新作が出ているとは……ズズズ：うん！ 美味しい！ この『カップヌードル 激辛麻婆味』は中々に美味じゃないか！ って、また人理焼却の力が煩くなってきたな。少し黙っててくれないかなっ!? 食事の邪魔なんだけどっ!? おりゃ！ 必殺、お父さんデコピン！ これでよし！ この一撃であと3カ月ぐらいは大丈夫だろう。また危なくなったら、今度は必殺お父さんパンチをお見舞いしよう」

・  
・  
・  
・  
・  
・

「……ってな具合で」

「……………」

全く別の意味で言葉を失った。

もう、何から指摘すればいいのやら……。

「せ……先生……」

「言うな……」

オルガが何か言おうとしたけど、ここは敢えて黙って貰った。

じゃないと、普通に心が折れそうだ。

「でも、私達がしている事はあくまでも『人理焼却 一步手前で事態を食い止めている』に過ぎない」

「根本的な解決が必要って事か……」



「そうよ。そこからが鞠絵ちゃん達の仕事になる。何をすればいいのかは……もう大体は理解してるんでしよう?」

「一応な……」

はあ……時間的猶予は滅茶苦茶あるとはいえ、それをアテにするのはオレ自身のプライドが許さない。

こりゃ、マジで気を引き締めないとダメかな……。

「それと、貴方にはこれを渡しておくわ」

「おっと。これは……」

母さんから投げて渡された物。

それは、何処にでもある普通のUSBメモリだった。

「その中に『真実の一端』が入ってるわ。帰ってから読んでみなさい」

「真実の一端……?」

一体、何に対する『真実』なのか。

該当する事柄が多すぎて、全く特定できない。

「さて……そろそろかしらね」

母さんが周りを見渡した途端、いきなり地面が揺れ出した。

最初は地震かとも思ったが、すぐに今いる場所がどこなのかを思い出して、考えを改めた。

「特異点の限界か」

「この特異点を維持していたのは、この地で召喚されたセイバーと、それと接続していた汚染された聖杯。その下手人こそが、あの『レフ・ライノール』。だけど、その大元は鞠絵ちゃん達の手によって排除された。それにより、この地が崩壊しようとしている」

「あわわわわっ!! もっちー! どうしようっ!!」

「大丈夫よ立香ちゃん。ロマニ君」

『は……はい! なんてしようかつ!』

「今すぐにこの子達を戻す準備をして頂戴。修理はとっくに完了してるんでしょ?」

『どうしてそこまで……って、今はそんな事を考えている暇じゃなかった!』

ロマニの声が消え、その代わりに何か作業をしているような音だけ





「博士。君達に人類の未来を託す。頼んだぞ」

「天才に不可能はない。任せときな」

「頼もしい言葉だ」

もうそろそろ、オレ達も戻る時間のようだ。

なんかさつきから静かだと思つたら、もう既にマシユと藤丸はいなくなっていた。

残っているのはオレとセイバーだけのようだ。

「さて…と。よもや、自分自身と戦う事になるとはね。本当に…お二人と一緒にいると人生に飽きが来ない」

「最高でしょ?」

「全くだ!」

「貴様あああああああああああつ!!」

二人のレフが激突する様子を見ながら、オレ達もまたこの場から消えようとしていた。

けど、最後に母さんが何かをオレ達に言い残した。

「鞠絵ちゃん。これから先、貴方には無数の出会いが待っているでしょう。その中で貴方はもつと成長する。人類史を救う旅路…『グランドオーダー』…これが成された時、貴方は…」

「母さん…」

思わず一歩だけ足を踏み出そうとすると、いつの間にかセイバーと手を繋いでいたので動けなかった。

だから、オレは行動じゃなくて言葉で示す事にした。

「……いつてきます」

「いつてらつしゃい。私達の大切な…」

そこで、オレの意識はぷつぷつと消えた。

今思えば、この瞬間から既に始まっていたのだ。

人類史最大の英雄譚。

後に『グランドオーダー』と呼ばれた戦いの物語は。

死亡フラグをぶっ壊せ！

「あ〜……」

真つ暗な闇から意識が浮上する。

なんか体がフワフワする物に乗っている…ってというか、背中側だけじゃなくて体の方にもなんか乗ってる？

「おっと。流石の私もそこだけは譲れないよ」

「何を言うのですか。元を辿れば、一番最初に鞠絵と契約したのは私です。ならば、私にこそ鞠絵の看病をする義務があります」

「確かに、嘗ての聖杯戦争ではそうだったかもしれないが、あれからもう10年以上の時間が経過している上に、ここはカルデアだ。君は一度、英霊の座に戻っていて、あの場所で再召喚されたような存在だ。という事は、少なくともカルデアに置いては私こそが先輩になるんじゃないかな？」

「ぐぬぬ…！」

「フオウ……」

………なんだろう。

猛烈に今だけは目を開けたくない。

めっちゃ聞き覚えのある二つの声が痴話喧嘩してるから。

けど、ここで起きないとタイミングを逃しそうな気がするんだよなあ〜…。

仕方がない。ここは覚悟を決めて大人しく起きるか。

「…何やってんだ二人して」

「マスター！」

そこにいたのは、心から嬉しそうな笑顔を浮かべているダ・ヴィンチと、いつの間にか鎧の部分を消して青いドレス姿になっているセイバー…アルトリアだった。

で、さっきからオレの体の上に乗っていたのはフオウだったのか。

道理でフワフワしてた筈だ。

「ここは…カルデアのある空き部屋の一つ…ってことは、オレ達は無事に戻って来れたんだな」

「その通りさ。と言っても、向こうが崩壊するのとはほぼ同時に戻ってくる形となったから、流石のマスターの体にも相当な負担が掛かったみたいだ。藤丸立香ちゃんやマシユと一緒に気を失っていたよ。唯一、意識を保ったまま戻って来れたのは、其処にいるアルトリアだけさ」

流石は伝説の騎士王……普通に凄いな。

「それよりもマスター。どこか身体が痛んだりはしてませんか？」

「大丈夫だ。痛むどころか、熟睡出来たお蔭で調子がいい」

半身だけを起こしてから体を動かす。

首や腰の骨がゴキゴキとなって、一気に目が覚めてきた。

「そういや、藤丸とマシユはどうした？」

「あの二人なら、立香ちゃんの自室で休んでるよ。少し前に目覚めたって報告があつたから、今頃は管制室にいるんじゃないかな？」

「そっか。なら、オレもいかないとな……っつと」

ベッドから降りようとした時、ちよつとだけふらついてしまった。

咄嗟にアルトリアが体を支えてくれたから、事なきを得たけれど。

「大丈夫ですか？」

「おう……ちよつち油断してたわ」

「気を付けてくださいね」

「うん。ありがとな」

アルトリアに手を引かれる形で床に降りる。

それはいいんだけど、どうしてアルトリアはドヤ顔でダ・ヴィンチを見てる？

「ふふん！」

「クツ……！ キャスターのクラスじゃなかったら、もう少し俊敏に動けるのに……！」

一体お前達は何を張り合ってるの？

「フオウフオウ……」

ほら。フオウも溜息を吐きながら首を横に振ってるぞ。

動物に呆れられてどうするよ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

フオウを頭の上に乗せてから、オレ達は管制室へと向かった。  
まずは帰還報告をするべきなんだろうが、その前にやるべき事がある。

そして、その為には皆の協力が不可欠だ。

「おくつす」

「博士！ おはようございますー！」

「もっちー！ おはよー！」

「あんな事があつたつてのに、お前らは元気だな……」

若いつていいよな…ほんと。

「博士。まずは無事に帰還してくれて本当に良かったと言わせて貰うよ。まさか、あの場面であの望月京子博士だけじゃなく、並行世界のレフ教授なんてのも出現するとは思わなかった」

「それはオレも同感だ。けど、母さんは当然として、あのもう一人のレフも間違いなく味方だ。これは母さんが行動を一緒にしている時点で断言出来る」

「博士がそこまで言うのなら、ボク達もそれを信じよう。ボクからしても、彼が悪人には見えなかったしね」

あのもう一人のレフは魔術師ってよりは、使命を帯びた戦士って感じだった。

ありや、並大抵の奴じや絶対に勝てないぞ。

悪い方のレフも、年貢の納め時かもな。

「つて、今はんな事を話している暇じゃなかったんだ。ロマニ、今から時間あるか？」

「え？ いきなりどうしたんだい？」

「今から、オルガの蘇生…っていうか、魂の定着を行う。少し手を貸してほしい」

「そうだった！ まだ所長が残ってたんだった！」

忘れてたんかい。

聞かなかったことにしてやるが、二度目は無いぞ。

「博士、こう言ってはなんです、本当に出来るんですか？」

「可能だ。最初はオレも半信半疑だったんだがな、詳しく説明をされて納得した」

まさか、オレの研究分野が『魂』にまで及ぶだなんて、昔は想像もしてなかった。

けど、どんな分野であれ、将来の為に勉強をしておくことは決して悪い事じゃない。

「聞いたことがあるかもしれないが、魂には『尾』のようなものがあった、全ての生物はその『尾』が肉体側にも同じように存在しているんだ。んでもって、その『尾』と複雑に絡み合い一つとなることで肉体と魂が一つになっているんだと」

「成る程…：陰陽道なんかでよく聞く言葉だね」

「生き物が死んだ時、その魂の『尾』が肉体から離れていくらしい。因みに、英霊の体は基本的に魔力で構成されているから、今言ったみたいな『尾』は基本的に無いとの事だ。肉体と魂の境界線が非常に曖昧だから、まるで粘土みたいになんか混ざり合っているんだよ」

「肉体と魂の境界線が曖昧…：だから、英霊は『霊体化』が出来るんですね」

「そーゆーこった。で、ここからが本題なんだけど…：」

少し気分を変える為に白衣のポケットを探したが、何処にも煙草が無い。

むう…：もしかして、あの特異点に落ちてきちゃったかな？

「本来、全く同じ遺伝子を持つ肉体とはいえ、一度離れた魂をもう一度完全に定着させるのは絶対に不可能だ。それは、自然の摂理に反するからな。だが、この『摂理』に真っ向から対峙しているのが



『死霊使い』って連中だ。本来ならば、これは間違いなく禁忌に該当する術なんだが、何回も何回も頼み込んで、なんとか教えて貰うことに成功した」

その代価として暫くの間だけ、あのグラサン野郎の仕事の手伝いをやらされたけどな。

あれはあれで非常にいい経験だった。

「分かり易く言えば、魂と肉体の『尾』を無理矢理に接続させて定着させる術だ」

「瞬間接着剤みたいに？」

「接着剤ってよりは、パテって言った方が正しいな」

藤丸の素直な疑問は、逆に分かりやすいから説明がしやすい。

「それ…反作用とかないのかい？ 聞く限りじゃ相当にヤバそうだけど……」

「オレも最初はそれを懸念した。だが、その手の事はとつくの昔に研究と技術の発展で克服したとグラサン野郎が言っていた。実際、オレの目の前で蘇生した人間は、今でも普通に生活してるからな」

あの時はマジで『ネクロマンサー恐るべき』って思ったわ。

同時に、自分の視野の狭さも思い知らされたしな。

「今から、オレの研究室に保管されているオルガのクローン素体にその術を施す。あそこはダ・ヴィンチの研究室と同様に核シエルター並の強度があるから、あの爆発でも傷一つついてない」

「道理で、あそこだけ嚴重になってる筈だよ……」

「このオレが直々に設計したからな。」

「そこで、まずはロマーニ」

「なんだい？」

「オレは儀式を絶対に成功させるつもりだが、それでも万が一って可能性は否めない。だから、お前には医務室の準備をしておいてほしい。オルガが目覚めたら、まずは体の検査をして欲しいんだ」

「そういうことか。任せてくれ！ ようやく医療スタッフらしい仕事が出来る！」

悲しい喜び方だな…それ。

「マシユ。藤丸。お前達二人は適当に服を見つけてきてくれ」  
「服？」

「保存中のクローン素体が服なんて着てると思うか？」

「あ」

まあ、オレはその程度じゃ動じないから平気だけど。

「アルトリアも二人の事を手伝ってやってくれ。頼んだぞ」

「了解です」

これでよし…つと。後は……。

「ダ・ヴィンチ。お前はオレと一緒に来い」

「君と？」

「お前には俺の術を手伝って貰いたい。一人でも出来なくはないが、今回ののは絶対に失敗が許されない。故に、少しでも成功率を上げる為にキャスターであるお前の手を借りたいんだ。頼めるか？ 天才」

「全く……そこはマスターらしく『頼み』じゃなくて『命令』をすればいいのに」

「オレはサーヴァントに『命令』なんてする気は無い」

「そう言うと思った。いいよ。喜んで手伝わせて貰うさ。これもまた貴重な経験だ」

こんな時、本当にキャスターのサーヴァントは頼りになる。

いや、別にオレ一人でも出来る自信はあるけど、念には念を入れて…ね？

「それでは、これよりオルガマリー・アニメスファイアの蘇生を行う！

これが終わって初めてオレ達のミッションは終了になる！ 各員、行動を開始せよ！」

「了解！」「了解！」

……なんか、オレが現場指揮官みたいなことになってない？

オレってこんなにもリーダー気質な人間だったっけ…？

……  
……

・  
・  
・

オレのお手製研究室。

室内にある隠し扉の前で、オレは勝手に設置したパネルを操作する。

「ほいほいほい…つてな」

パスワードを入力すると、隠し扉がシュツと開いた。

中は真つ暗だが、オレ達が入るとすぐに自動的に明かりがついた。

「どこに隠したのかと思ったら、こんな所に……」

「万が一の事も考慮してな。それよりも……」

中には、レイシフト用のコフィンと全く同じサイズ、同じデザインのカプセルが鎮座していた。

勿論、これにはレイシフトをする機能なんてのは無い。

あくまで、一時的に冷凍保存する為の代物だ。

「よし。異常はないようだな」

「いつ見ても見事なものだよね。マスターは確実に、天才生物学者である母親の才能も継承しているよ」

「よせよ。母さんなら、オレ以上に完璧な素体を創り上げるさ」

これは自分を卑下しているんじゃないかと、純然たる事実だ。

いずれは必ず乗り越えるつもりだが、少なくとも今のオレとあの人達を比較対象にするのは間違っている。

だって、比較にすらなっていないから。

「それじゃあ、早速始めるぞ。急がないと、マジで危ないからな」

「了解だ。私は何をすればいい？」

「まずは『陣』をこの周りに書くのを手伝ってくれ。ちゃんと、オレの指示通りに動いてくれよ？　ほんの少しでもミスしたら終わりだからなっ。」

「分かってるって。けど、何で書くんだい？　まさか……」

「んなの、オレの血に決まってるだろうが」

「やっぱり……」

「つつても、この時に備えて予め冷凍保存しておいた術用の血液だけどな。何が悲しくて、ついさつきまで寝ていた身体から血を出さなきゃいけないんだ」

「本当に…マスターは用意周到だよね……」

そうして、オレ達はオルガを蘇らせる為の儀式を開始した。

・

・

・

・

・

まるで、それは海の中を彷徨うような感覚。

上下左右が存在せず、全てが暗闇に包まれている。

私はどうなったのだろうか。

何も分からない。何も見えない。何も感じない。

誰もいない。誰も私を見てくれない。誰も私を……。

「え……う？」

それは光。

私には眩しすぎる光り。

「あれは……」

自然とそれに手を伸ばすと、そこから『声』が聞こえてきた。

それは、私の大好きな人の声。

私が唯一、愛する人の声。

私がこの世で一番愛する人の声。

『戻って来いオルガ。皆、待ってるぞ』

待ってる…私を？

『オレにはお前が必要だ。だから、戻って来てくれ……』

ああ……本当にこの人は……。

そんな事を言ってくれるから……私は……。

「先生……私は……」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

眩しい光が私の瞼を刺激する。

思わず目を細めると、その僅かな視界に見覚えのある姿が見えた。

「せん……せい……?」

「ようやくお目覚めか? お姫様」

一番最初に目に入ったのは、私の大好きな先生の姿。

その隣に並ぶようにしてキャスター……レオナルド・ダ・ヴィンチが笑っていた。

「どうやら無事に成功したようだね。やれやれだ」

「本当に助かったよ。サンキューな」

「なに。こつちも貴重な体験をさせて貰ったから御相子だよ。変則的ではあるけど、まさか死者の蘇生なんて有り得ない事象に関与できるとは思わなかった」

どうやら、先生だけじゃなく、この女も手伝ってくれたらしい。

悔しいけど、そのお蔭で戻ってこれたのだから、その分の礼は言わないといけないだろう。

「大丈夫ですか所長ツ!」

「本当に良かった……」

「鞠絵の事ですから、絶対に失敗しないとは思ってましたけどね」

後ろに控えていたらしいマシユと藤丸とセイバーが私に上着を着せてくれた。

って、よく見たら私ってば服着てないッ!? なんでっ!?

「あ……ありがとう……。けど、これは一体……」

まだ完全にハッキリとしていない頭を動かして思い出す。

確か私は……あの特異点でレフにお前を殺したのは自分だと言われて、その後先生が……。

「あ……そっか……」

思い出した……!

先生が『私を戻す手段がある』って言って、そして……。

「先生……私……」

「そうだ。お前は戻ってきた。このカルデアに。肉体的には『生まれ変わった』って言った方が正しいかもしれないけどな」

「せ……せ……せ……せ……」

生きて帰って来れた事。

大切な人に救って貰った事。

色んな気持ちがちや混ぜになって、自分の気持ちが上手く整理できなくなつて、私は我慢が出来なくなつて、泣きながら先生に抱き着いた。

「先生———っ!!!」

「うわあっ!?!」

またこの人に触れられる……。

その事が只々嬉しくて仕方がない。

やっぱり、私はこの人の事が好きだ……!

「まあ……今だけはいいか」

ポンポンと優しく私の背中を叩いてくれる先生。

子供を慰めるような仕草も、今の私にとつては愛おしい。

皆、後ろで悔しそうにしているけど、絶対に負けないから。

先生のお嫁さんになるのは、この私なんだから!



## 未来を取り戻す物語

カルデア内にある医務室。

本来ならばロマニが常駐している筈のこの部屋が、初めて本来の役割を果たしていた。

「どうだロマニ。オルガの具合は？」

「うん。少し体力が低下している事を除けば、全く問題は無いよ」

「そっか……本当に良かった……」

オレとダ・ヴィンチが製作した素体にオルガの魂を定着させて蘇生させた後、予め準備させておいた医務室へと直行し、ロマニによるオルガの体の検査をして貰っていた。

初めてロマニが聴診器を持つている姿に地味に新鮮味を覚えつつ、オレはロマニの口から出た言葉に本気で安堵していた。

「それにしても、博士は本当に凄いな。今の所長の体はそこら辺にいる人間と殆ど大差が無い。しかも、ちゃんと魔術回路まで備えているだなんて……」

「元々がオルガの遺伝子から生み出したものだしな。アニムスファイアの魔術回路を継承しているのは、ある意味で当然の事だ」

「ロマニ。先生のすることに一々驚いていても無駄よ。この人は私達の想像なんて簡単に飛び越えていく人なんだから」

「確かに所長の言う通りだ。今回は、その博士の想像を超えた能力に幾度となく助けられた形になるんだからね」

想像を超えた……ね。

オレなんかまだまだただけだな。

ウチの両親の本気を知ったら、こいつら全員が立ったまま気絶するぞ。

「これでようやく、本当の意味でミッション完了……って事になるのかな？」

「そうだな。紆余曲折はあったが、結果として全員が無事に帰還できたんだ。今はそれで良しとしよう」

終わりよければ全てよし……ってな。



「では、これから改めて管制室に移動してこれからの事について話し合おうと思うんだけど……」

「それがいいが、その前にオルガの為に車椅子を用意して貰えないか？」

「車椅子かい？」

「せ…先生！ 流石にそれは……」

「何言ってるんだ。精神面で疲弊している上に、今のお前の体は長い間寝たきりの状態だったに等しいんだぞ？ 後々はともかく、今はまず体のリハビリをしながら『新しい体』に少しずつ慣れていけ。ちゃんと立って歩けるようになるまでは、車椅子を使え。いいな？」

「は…はい。先生がそう仰るなら……」

「よろしい。ちゃんと年長者のいう事は聞くもんだぞ？」

「年長者……」

おい。なんだその背伸びをしている子供を見ているような目は。

「今の発言で思っただけけど、もしかして博士って医学に関しても詳しくかったり？」

「うんにや。確かに勉強をしたことはあるし医師免許も持ってるけど、あくまで持ってるだけだ。本職の人間には敵わないよ」

「いやいやいや！ 免許を持つてるだけでも十分に凄いからねっ!？」

「はあ…君は一体どこまで万能なんだい…?」

「んな事言われても、オレは単純に将来の為に色んな事を勉強しただけなんだけどな……」

そこまで驚くような事でもないと思うんだけどな……。

結局、オルガはロマニが用意した車椅子に乗って管制室へと行くことになった。

.....  
.....  
.....  
.....

管制室に行くとき、其処には既にマシユと藤丸、アルトリアとダ・ヴィンチが待っていた。

「待たせたなお前ら」

「いえ。私達も先程来たばかりなので…って、所長ツ!? なんで車椅子にのってっ!?!」

「もしかして、どこか具合が悪いのっ!?!」

「そうじゃないわよ! まだ、この体を動かすことに慣れてないから、リハビリが終わるまでの一時的な処置よ!」

「よかった…」

「つたく…大袈裟なのよ…」

なんて文句垂れてるけど、顔が笑ってるぞ。

心配してくれて嬉しかったんだろ?

相変わらず素直じゃない奴だな。

「これで、ようやく全てのスタツフが揃ったわけか。それじゃ、これらの事について話し合おうか」

「そうだな」

オルガはまだ本調子じゃないので、ここは代理としてオレが前に立つことに。

「まず、あの特異点の最後の戦いの後に『この世界のレフ』が言っていた事だが…：ロマネ」

「うん。博士の御両親と並行世界のレフ教授のお蔭でカルデアスは燃えるような真紅から元の青い色へと戻ってはいるが、外部との連絡は出来ない状況だ」

「多分、母さんたちが人理焼却のエネルギーを何らかの方法で防いでいる間、その影響を世界中に与えないように母さんたちが何かしてるんだと予想出来る」

「何かって?」

「さあな。それは流石に分からない。恐らくは時間停止術式に近い事

だとは思うが……」

「じ…時間停止ツ!? 博士の御両親はそんな事も出来るのかいツ!?」  
おうおう。いつもながらロマニのリアクションは見ていて面白い  
なく。

他の皆は口をポカ〜ンと開けているだけなのに。

「出来る出来る。今から7年ぐらい前に父さんが『時粒子』っていう  
『時間の流れる場所にならどこにでも存在する特殊な粒子』を発見し  
て、それをエネルギーにしてエンジンを回す『時流エンジン』つての  
を開発してさ、色々と実験をしている間にそれが『タイムマシン』に  
なる事が判明したんだ。で、その応用で時間を停止させたり、遅くし  
たり、早くしたりする術式を生み出したんだ」

「「「「「………」」」」」

あ…あれ? なんて皆固まつちやつてるの?

なにかおかしいなことも言った?

「い…いや、ここで色々ツツコミをしていったら、それこそキリがな  
い。ここはグツと我慢をして博士の話を聞こうじゃないか……!」

「奇遇ねロマニ…私も丁度、同じ事を考えていたところよ……」

「もっちーのお父さんって凄いなだね〜……」

「あの鞠絵の父上なのだから、かなりの人物を想像していましたが、こ  
れはまたなんと……」

「はは……時間に干渉出来る技術だなんて、私でも不可能だよ…これ  
は参った……」

話…続けてもいいんだよな?

「コホン。とにかく、連絡が取れないのは外の世界や人類が滅びてい  
る訳じゃなくて、単純にウチの親達に何らかの手段で守られているか  
らと判断するのが妥当だろう」

「それじゃあ、カルデアだけ通常通りに稼働出来ているのは……」

「ここだけ、術式を展開していないからじゃないか?」

さつきはああ言ったけど、実際には人理焼却の影響が及ばない異空  
間にカルデア以外の全てを閉じ込めて、ある種のシエルターのように  
しているんだろうな。

んな事を言えば、またぞろ変な空気になるから黙ってるけど。

「母さんも言っていたが、これはあくまでも応急処置に過ぎない。全  
ての原因となった存在を排除しない限りは何の解決にもなりはしな  
い」

「全ての原因……」

敵の正体は全く不明。

けど、やるべき事だけは明確だ。

「ロマニ」

「了解だ」

今度はロマニが前に出てコンソールを操作すると、目の前のディスプレイに地球の映像が表示された。

「まずはこれを見てくれないか？ 君達が特異点で頑張ってくれてい  
る間にボク達でなんとか修復をしたシバでスキャンした過去の地球  
の状態だ」

表示されている地球には、さっきまでオレ達がいた場所が完全に無  
くなっていた。

「皆の活躍のお蔭で冬木の特異点は消滅をした。けれど、未だに人理  
焼却のエネルギーは顕在したまま。博士の御両親ともう一人のレフ  
の尽力で世界と人類は辛うじて崖っぷちで耐えている状態だ」

「あの特異点が無くなっても、まだ事態が収束していないってことは  
……」

「他にも原因が存在している……ってことね」

「所長の言う通り。ボクたちもそう仮定したんだ。その結果が……」

ロマニがまた操作すると、今度は異形の姿となった地球が現れた。  
それには七つの点が存在していて、それが煌々と輝いている。

「この狂ってしまった世界地図だ」

「こいつは……ヤバいな」

「わ…分かるんですか？」

「まあな。これは冬木のものとは比較できないレベルの時空の乱れ  
だ。これが新しく発見されたって事は……」

「そう。これらは全て『特異点』だ。しかも、普通の特異点じゃない」

「人類史のターニングポイント。現在に至るまでの全ての歴史を形作った究極の選択肢。万が一にでも、それらが崩壊するような事があれば、それは即ち人類史の土台が崩される事と同義。この『七つの特異点』はそーゆーことか」

成る程。あの母さんが珍しく真剣な顔でオレ達を守ろうとしたわけだ。

あの人達は積極的に世間に関わろうとははしないが、別に世捨て人になっていく訳じゃない。

寧ろ、あの人達ほど、世界と人類を愛している人達はいないだろう。だからこそ、うちの親達は世界に干渉しない。

自分達の力がどれだけ強大で、良くも悪くも世界の多大な影響を与えるか知っているから。

そんな人達が自ら歴史の表舞台に立って、オレ達に全てを託した。ならば、あの人達の子供として、その期待に応えない訳にはいかないだろう。

「博士の言う通り。これらの特異点が出現してしまった時点で、この星の未来は確定してしまったに等しい。世界の為に、これ以上博士の御両親に負担を掛けない為にも、ボクらがこれらの特異点を修復しなくてはいけない。いや、これはボク達にしかできない事だ」

ロマニの話聞き、全員が一斉に真剣な顔になる。

それだけで分かる。お前ら皆が既に腹をくくっているって事がな。

「結論から言っちゃえば、オレ達はこれから、この七つの特異点ヘレイシフトをして、この捻じ曲がった歴史を本来あるべき形へと戻す。それが、世界と人類を救う唯一無二の手段だ。けど、お世辞にも現状、このカルデアは戦力が充実しているとは言い難い」

「マスター適性者は先生と藤丸だけ。それ以外は全員が冷凍睡眠状態にある…」

「存在しているサーヴァントも、マシユとアルトリア。それからだ。ヴィンチだけだ。けど、ダ・ヴィンチは基本的にカルデアにてして貰わないといけないことが山ほどある。ってことは……」

「実質的に、戦力となるのは私とマシユだけになるのですね」

「そうなるな……藤丸」

「は……はい！」

ここでオレは、こいつに最低の言葉を吐かないといけない。  
心でどれだけ割り切っていても、やっぱし慣れないもんだよな  
……。

「こんな状況でお前にこんな話を話すのは半ば強制に近い事だつてのはオレもロマニもオルガも理解してる。後で好きなだけオレ達の事を恨んでくれても構わない。その上で敢えて尋ねよう」

「……………」

「マスター適性者48番。藤丸立香。お前が人類を、世界の未来を取り戻したいと思うのならば……オレと、オレ達と一緒に七つの人類史と戦ってくれるか？」

「もっちー……」

「お前が何て答えても、オレ達は決して文句なんて言わない。ここで逃げ出すのも選択肢の一つだし、当然の権利だと思っている」

正直言うと、コイツには戦場に立つてほしくは無い。

戦場つてのは、良くも悪くもこの世で最も平等な場所だ。

善人も悪人も大人も子供も老人も若者も男も女も神も悪魔も、皆が等しく死んでいく。

そんな場所に、これまで争い事とは無縁の世界にいたコイツを連れて行こうとしている。

オレは間違いなく最低の大人だ。

「私……行くよ」

「藤丸……お前……」

「あんな事を体験して、あんな事を聞かされて、今更他人事でなんていられない。それに……」

「それに？」

「もっちーだけに全てを背負わせる事なんて出来ないし、したくない。凡人な私に出来る事なんてたかが知れてるのは分かってるけど、それでも、もっちーが背負おうとしている物を少しでも一緒に持ちたいんだ」

はは……こいつ…なんつー目をしてやがる。

どこまでも真つ直ぐな目をしてる癖に、震える体を抑えようと必死に踏ん張ってやがる。

こいつは今、自分の中の『恐怖』と必死に戦っているんだ。

戦いながらも、前に進むことを選んでいる。

「……ありがとな。お前の言葉で、オレも改めて覚悟を決めたよ」  
「うんー！」

オレは、目の前にいる皆と、辛うじて生き残った数少ないスタッフ達の顔を見て、静かに息を吐いた。

「これより、人理継続保障機関フィニス・カルデアは、当初の目的通り人理継続の尊命を全身全霊で全うする！ 我等の目的は人類史の保護と奪還！ 探索対象は各年代と、その時代における原因と思われる聖遺物『聖杯』だ！」

ここまでできたらもう、オレも皆も後戻りは出来ない。  
只管に突き進むだけだ。

「これから我等が戦うべき相手は即ち、人類の歴史そのもの。オレ達の目の前に立ちはだかるのは無数の英霊であり伝説だ。これは前代未聞の挑戦であると同時に、過去に弓引く冒瀆的行為に等しい。なんせ、オレ達は人類を守護する為に人類史そのものに立ち向かうのだから」

全員がオレの言葉を少しも聞き逃さないように聞いている。

こんなのは昔、時計塔で講師をしていた時以来だな。

「だが、我等が生き延びて真の意味で未来を取り戻すには、もうこれしか方法が残されていない。例え、この先にどんな結果が待ち受けているとも…な」

多分、この戦いでオレは多くの事を学び、同時に失うことになるだろう。

だが、それでも進み続けると決めた。

もう…迷いはない。

「これより、作戦名はファーストオーダーから改める。これはカルデアの最初で最後、唯一無二の使命。人理守護指定『Grand Or

der』……」

最後の締めが一番大きな声で、その場にいる全員に届くように叫んだ！

「魔術世界における最高位の使命を以て、オレ達の手でこの星の未来を絶対に取り戻すぞ!!!」

「「「「「おおおおおおおおおおおおおつ!!!!」」」」」

こうして、オレ達の長い闘いの日々が始まったのだ。つた。



## 『運命の夜』から来た者達①

管制室での話し合い…というか、結果的には決起集会みたいなことになったが、ここは気にしないようにしよう。うん。そうしよう。

「さて。やるべき事が決まったからと言って、今すぐに突撃って訳にはいかない。何事にも準備は必要だ」

「博士の言う通りだ。こつちもまだ修復しないといけない機器は多いし、ついさつき戻ってきた皆は、まずは体を休める事をして欲しい」  
「そうね。これから先は決して敗北が許されない戦いになるのだから。体調は万全にしておかないと」

オルガの方も、所長らしい事を言えるぐらいには回復してきたのかな。

うんうん。これはとてもいい事だ。

「これといった怪我は無いようだけど、それでも体力の疲弊は相当な筈だ。戻ってきた直後に眠っていたとはいえ、それで全回復したとは言い難い。取り敢えず、まずはマシユと立香ちゃんはゆつくりと休んでくれ」

そして、ロマニも医師らしいことを言い出した…と。

やっぱ、こいつにはシリアスなセリフは似合わねえ。

「それから、ちゃんとセイバー…アルトリアの部屋も準備しておかないと」

「私の部屋…ですか？」

「そうだ。ここではサーヴァントも一人のスタッフと同等の扱いで通す事にするつもりだ。それは最初から決まっていた事だし、これからは共に戦う同志なんだ。ぞんざいな扱いなんて出来ないよ」

「そーゆーこつた。ま、すぐに終わるだろうから、少しだけ待ってな」  
「いえ。それには及びません」

「へ？」

な…なんだ？　なんか凄く嫌な予感がするんだが…何を言う気だ？

「私は鞠絵と同じ部屋で寝泊まりをするつもりなので」

「「ちよつとおおおおおおおおつ!!」「」

いきなり何言つたんだこの王様は——つ!?

ほら〜! 他のスタッフ（主に女性陣）が目をキラキラさせてこつちを見てるじゃねえか!

「そ…そんなのダメに決まってるじゃないのっ!!」

「何故ですか？ 私は鞠絵のサーヴァントです。マスターとサーヴァントが同じ場所で過ごすのは当然の事では？」

「それは聖杯戦争中の話でしょっ!?! 今は聖杯戦争なんて起きてないし、それ以前にカルデアの所長として、男女が一緒の部屋に住むなんてことは認められません!!」

「なんて言ってますが、本音は？」

「私も未だに一度もそんな事した事無いのに、そんな事を許せるわけないでしょうが!! ……あ」

思いつきり暴露しやがった。

つーか、お前もオレと一緒に住みたいと思つてたのかよ……。

「残念だが、オレの部屋は研究室も兼ねてるんだよ。あそこには貴重な資料や機器が沢山あるから、可能な限り誰かを泊めるような真似はしたくないんだ。遊びに来るぐらいなら全然構わないんだけどな」

「そうですか…鞠絵がそう言うのならば大人しく諦めましょう。その代り、暇な時は必ず部屋を訪れるようにします」

「解決してるようで全然解決してな——い!」

これ以上話しても無駄な気がしてきた。

多分、これぐらいで妥協した方がいいんだらうな。

「あと、出来れば私の部屋は鞠絵の研究室の隣を希望します!」

「全くめげてない……」

「わ…私も、アルトリアさんぐらいの積極性があれば、博士と……」

藤丸は呆れてるが、マシユはどうして力強く頷いてるんだ？

「部屋の話はこれぐらいにして、休む前に一つだけやっておきたいことがある」

「なんだい?」

「これから先、アルトリアとマシユだけに頼りつきりになるは論外だ。

余りにも二人に掛かる負担が大きすぎる。となると……」

「そっか！ 英霊召喚！ 戦力を増やすんだね！」

「その通り。召喚ルームは使用可能か？」

「勿論だとも！ 『守護英霊召喚システム【フエイト】』は真っ先に修復したからね！ いつでも行けるよ！」

「それは重畳。んじゃ、早速行こうか。藤丸も一緒に来い」

「わ…私も？」

「当たり前だ。これまではともかく、今のお前はもう立派な『カルデアのマスター』なんだぞ。なら、オレと一緒に英霊召喚するのは当然だ。これから先、嫌ってほど沢山する羽目になるんだ。少しでも慣れておけ」

「う…うん！ 分かった！」

「よし」

しっかし、あそこに行くのってどれぐらい振りだろ？

マジでアレが完成してからこっち、ずっと行ってないような気がするわ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「着いたよ。ここが召喚ルームだ」

「ふえ？ 何にもない？」

そこは、真っ白なだけの普通の部屋。

けど、それはあくまで見た目だけ。

「にしても、マシユはともかくとして、なんでお前らまでついてきてるんだ？」

「わ…私は、所長として先生の召喚を見届けたいと思って……」

「私は単純な好奇心さ！ マスターがそんなサーヴァントを召喚するのか興味があつてね！」

「これから共に戦う同志となるのですから、こうして出迎えるのは騎士として当然の義務ですから」

三者三様で色々と言つてるが、なんかめっちゃ言い訳っぽく聞こえるんだよねあ。

「まあ…いいか。藤丸、足元をよくく見てみる」

「足元？ うわ……！」

オレ達の真下には、魔方阵のようなサークルが綺麗に描かれていて、その中央にはマシユが英霊モード時に装備していた大盾が設置してあつた。

「あれつてマシユの……」

「そうだ。元々、あの盾のお蔭で召喚システムが安定するようになったんだよ。それでもまだまだ改良の余地が山ほどあるんだけどな。それはこれからの課題だな」

「博士は本当に向上心が高いね。ボクにはとてもじゃないが無理だ」

「だろーな。自分の抜け毛にすら気が付かない医師じゃ無理だろうよ。ほれ、足元」

「あれっ?! なんかもまた髪が抜けてるんですけどっ?! なんでっ?!」

「ストレスじゃね?」

「この前に送られてきた補給物資の中に育毛剤つてあつたかな……」

無駄な足搔きは止めとけて。

きつと、お前の毛根の寿命が来ただけなんだよ。

「んなことよりも、現在、オレ達の元にある『聖晶石』って幾つあるんだ?」

「元々、カルデアにあつた物と、博士たちが特異点で回収してきた物と合わせて、合計で15個だね」

「15個か……ある意味で賭けになるな……」

こればかりはオレでもどうしようもないしな。

祈ることぐらいしか出来ない。

「もつちー。『せーしよーせき』ってなに?」

「んあ? そうだな…お前にも分かりやすく説明すると、ガチャを回す為の石だ」

「あ、成る程」

「博士…全然間違っちゃいないけど、その例えはどうかと思うよ?」

「間違っていないならいいじゃんか。大事なのはフィーリングなんだよ。フィーリング」

「世界最高峰の頭脳の持ち主の口からフィーリングって…」

「なんだよ。本当に大切なんだぞ? フィーリング。」

「召喚は石3つにつき一回できる。つまり…」

「ガチャを回せるのは合計で5回って事だね。でも、これだと奇数になっちゃうね。どうするの?」

「そうだな…」

「ここは藤丸に三回回させるか? いやいや、もし仮に…」

「なら、先生が三回回して、藤丸が二回にすればいいんじゃないかしら?」

「オレが三回?」

「ええ。藤丸にはもう既にマシユと言うサーヴァントがいるし、同時に沢山の英霊の使役はまだ難しいと思うんです。勿論、これから先もずっとって訳じゃありません。まずは二回程度に留めておいて、徐々に慣れていってから数を増やしていけばいいわけです」

「…そうだな。質や数はともかく、まずは慣れることが一番…か。流石だなオルガ。よし、そうしよう。藤丸もそれでいいか?」

「う…うん! ぶっちゃけ、私もそうして欲しいと言いますか、あんな啖呵を切っておいてアレだけど、まだ緊張しちやってますというか…」

「それでいいんだよ。初めての事に緊張なんてしない奴は何処にもいない。寧ろ、それは人間として正しい反応だ。あんまし卑下すんな」

「…そうだよ。ありがと、もつちー」

「どういたしまして」

……時々、妙に女っぽい顔を見せるから反応に困るんだよね……もう。

「それじゃ、博士に9個渡して、立香ちゃんには6つ渡しておくね」

「ありがとうございます。わ……めっちゃ刺々してる」

「そつと持てば大丈夫だよ。ウニと一緒だ」

「私……ウニなんて持ったことない……」

「え？ マジで？」

オレはガキだった頃に自分でウニを取って調理して、よく食ってたけどなく。

……今思えば、あんな事をしてたのはオレだけだったのかもしれない。

「と……兎に角、今は召喚するぞー！」

「はーい」

さて……と。どんな奴が来てくれるのかな？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

オレが召喚陣の中に石を投げ込むと、あの時と同じように光が回転し、それが三本の線となり収束していく。

そこから発せられた眩い光の中から現れた者は……。

「サーヴァント・ライダー。真名『メドゥーサ』。召喚に応じ参上いたしました。この時をどれだけ待ち侘びた事か……」

紫の長い髪を靡かせた美女で、その目には両目を覆うような眼帯が着けられていた。

「メドゥーサー！ ギリシヤ神話では知らぬ者がいない、あのメドゥーサーか!? これは凄い！ 最初から大当たりじゃないか！ 流石は博士！ なんて幸先がいいんだ！」

こいつ…なんかどこかで見たことがあるような気が…あつ!?

「お前、もしかしてだけど、あの冬木で召喚されてたライダーか？」  
「その通りです。あの時の約束、ちゃんと果たしてくれて嬉しい限りです。今度は本来の私の力で貴女の事を必ずお守りします。マスタ―」

「ああ！ よろしく頼む！ ところで、その眼帯は例の『石化の魔眼』を封じるための物か？」

「はい。これが無ければ大変なことになってしまうので」

「それは分かるけど、流石に不便そうだし…そうだ。ちよつち待つてろ。えくつと…確かこの辺に…」

どこに行ったかなく？ ここじゃないし…ここでもない。

ここかなく…あ、あった。

「ほれ。これ付けろ」

「これは…眼鏡ですか？」

「ただの眼鏡じゃないぞ。こいつはオレが前に発明した『魔眼封じの眼鏡』だ。これさえあれば、少なくともカルデア内じゃ不便することも無いだろ。目を瞑ったまま眼帯を外して、これをつけてみ」

「貴女がそう言うのなら…」

そつと眼帯を外し、目を閉じたままの状態で眼鏡を掛け、静かに目を開けた。

「ど…どうでしょうか？」

「よく似合ってるよ。サイズもピッタリでよかった。ちゃんと魔眼も発動してないだろ？」

「そのようですね。これは本当に凄い…ありがとうございます」

「気にすんなって。これから先、多くの困難と一緒に乗り越えていくんだ。これぐらいの餞別はさせて貰うさ」

「本当に…貴女と言う人は…」

にしても、まさかあの時の奴が呼び出されるとは思わなかった。

この分だと、クー・フリーンも来たりしてな。

「「「……………」」」

ところで、なんでさつきから女性陣は黙ってるのかな？

なんかロマニはガタガタと震えてるし。

「また強力なライバルが増えましたね……………」

「うう…長身のスレンダー美人…………羨ましい……………」

「流石は先生ね…………カルデアでの召喚第一号から美女を呼び出すなんて……………」

「なんか…段々と私の立場が危うくなってる気がする……………」

いや、マジでどうしたのよ？

オレが困惑していると、いきなりロマニがニコニコ笑顔でオレの肩に手を置いてきた。

「どうか、これからも強く生きてくれ。博士」

「それってどーゆー意味で言ってる？」

「大丈夫。その気になれば法律なんて幾らでも変えられるさ」

「お前は何を言ってるの？」

時々、本気でロマニが何を言っているのか分からなくなる。

とにかく、まずは一人目の召喚成功だ。

お次は誰が誰が出てくるのやら。



## 『運命の夜』から来た者達②

まずはオレがライダーのサーヴァントであるメドゥーサを無事に召喚し、それに引き続き形で召喚を続けることにした…のはいいんだけど……。

「なんで、オレはお前さんに抱きしめられてるのかな？」

「一目見た時から、ずっとこうしてみたかったんですが、ダメですか？」

「はあ……好きにしろ。この手の事はもう完全に慣れてるし」  
「では、遠慮なく」

メドゥーサの背が高いせいもあって、完全な宙ぶらりんの状態。  
なんだ、この奇妙な構図は。

「流石は敏捷性に定評のあるライダー……！ この私よりも先に鞠絵を抱っこするなんて……！」

「はっ!? デミサーヴァントとなった今の私なら、博士を抱っこできるのではっ!？」

「もっちー…完全に遠い眼をしてるね……」

「着実に私の影が薄くなりつつあるね……ダ・ヴィンチちゃんシヨツク」

「まあ…いざとなれば、膝の上に乗って貰うって手もあるけど……」

あくあく。聞こえない聞こえない。

「博士……世の男子が皆、羨むような格好だね……」

「そこ。聞こえてるぞ」

ロマニの奴も調子に乗りやがって……。

いつの日か必ず、あいつの同人誌を処分してやる。

もしくは、ダ・ヴィンチと一緒にコピーしてカルデア中に配り回ってやろうか。

「よし。次を召喚するぞ」

まだまだ手元にある石をポイツとな。

光が周り、収束し、そして再び英霊が召喚される。

って、今度もまたなんか見覚えのある姿なんですけど？

「ふっ……よもや、私のような変わり者を召喚する者がいようとはね」「お前は……」

この特徴的な声に、皮肉った口調。

その白い髪と褐色肌、赤い外套を着ている、この男はまさか……！「だが、喚ばれたからには名乗らなければな。サーヴァント・アーチャー。召喚に応じ参上した。で、誰が私のマスターなのかな？」  
「オレだ」

「君は……」

やっぱ、こいつも微妙に特異点の時の記憶があるみたいだな。

普通はそんな事は無いんだが、恐らくはあそこがかなり特殊な時空だったせいだろ。

「承知した。君ならばこちらでも文句は無い。精々、好きなだけこき使ってくれて構わない」

「了解だ。これから頼りにさせてもらうよ。アーチャー……物理的な意味で後方支援が出来る存在は本当に貴重だからな。特に、三大騎士クラスである『セイバー』や『ランサー』との組み合わせは強力だ」「そこまで言って貰えるとは。ならば、こちらもその期待に応えねばなるまい」

こういうヤツが、こっちの想像以上に活躍をしてくれたりするんだよな。

見た目的にも頼り甲斐がありそうだし。

「……ところで、どうしてマスターは抱っこされているんだ？」

「知らん。それはライダー……メドゥーサにでも聞いてくれ」

「メドゥーサ……そうか……お前も……」

ん？ こいつら、前にも出逢った事があるのか？

いや違うな。この反応から察するに、アーチャーの方が一方的に知ってる感じだ。

「どうしました？」

「いや……なんでもない。失礼した」

しかも、礼儀が分つてるとききた。

うん。なんとなくだけど、こいつにはこれから先、めっちゃ世話に

なりそうな気がする。

「ねえ…マシユ。あのアーチャーさんって……」

「はい。間違いなく、あの時のアーチャーです。まさか、博士のサーヴァントとして召喚されるとは……」

「あの時、彼にトドメを刺したのは先生だった。それで、なんらかの因果が生まれたんでしようね」

オルガが説明をしているが、オレも同意見だ。

何気に、この義手の中に残っていたアーチャーの僅かな血痕が触媒になってたりしてな。

「というわけだ。これからもよろしく頼む。セイバー」

「こちらこそ。貴方が味方になってくれれば頼もしい限りです」

うんうん。こつちの方もいい感じだな。よきかな、よきかな。

「けど、クラス名で呼ぶのはなんだか不便だね。これから先、他にもアーチャーのクラスのサーヴァントが召喚されていくだろうし。えっと……君の真名は何なのかな？」

「私の真名…か。そうだな。ここならば別に呼ばれても問題は無いが、私は他の英霊達とは違って、これといった逸話も伝説も残していないのでね。そこまで仰々しくされると、却ってこつちの方が困惑するよ」

「そ…そうかい？ で、何て呼べば……」

『『エミヤ』。そう呼んでくれ』

「エミヤ？ 聞いたことのない英霊だ……」

エミヤ……エミヤ？ ん〜？

なんだろ……どこかで聞いたことがあるような気が……どこだったっけ？

「どうしました？」

「え？ いや…なんでもないよ」

って、なにしれっと頭を撫でてるんじゃない。

「取り敢えず、これでオレが持つてるのは最後だ。ほいっとな」

ラスト三つを投げてから、じつと召喚されるのを待つ事に。

光が三つの線になって、そこから出てきたのは……。

「あら。随分と可愛らしいマスターさんなのね」  
「にやんと」

三人目に召喚したのは、フードを深く被った女性で、見た目からしてもう完全に魔術師な感じのサーヴァント。

なんつーか：ザ・キャスター！ …みたいな？

「貴女が私のマスターかしら？」

「そうだよ。これからよろしくな。えっと……」

「キャスターのサーヴァント。真名『メディア』よ。よろしく」

これまた、凄いビッグネームが来たなオイ！

色々と逸話を説明すれば長くなる上に完全に鬱展開になるから今回は省くけど、間違いなく最上級魔術師の一人だ。

「にしても……」

「ん？」

な…なに？ メディアがめっちゃこつちを見てくるんだけど……。

「……いいわね。なんかこう……ビビッ！ つとクルものがあつたわ」

「何が？」

なんだろう。これまでの人生経験で培った『勘』が、猛烈な危険信号を発している。

「メデューサにメディア……博士はギリシャと何か由縁でもあるのかな？」

「そう言われれば確かに……。どちらも、ギリシャ出身のサーヴァントだものね」

「ほへ〜……？」

「また先輩が『FXで有り金を全部溶かした顔』になってます！」  
いやいやいや。二人ともかなり有名な人物だぞ？

こいつ……もしや、歴史が苦手な奴か？

「はっ!？」

「な…なんですか？」

「……この子もいい……」

「はい？」

あ。今度はアルトリアもターゲットロックされた。

まあ…あいつも間違はなく美少女ではあるしな。

「キヤスター。マスターに変な事をするのは私が許しませんよ」

「あらライダー。マスターと交流して仲を深めるのも、サーヴァントとしての立派な仕事ではなくって?」

「過剰なスキンシップは許さないと言っているのです。そんなことも分らないのですか? 『コルキスの魔女』」

「なんですって…? 言うじゃないの…この『蛇女』風情が…!」  
「あ?」

ちよ…ちよつとおおおおおつ!?

オレを挟んだ状態で火花を散らすのは止めて貰えませんか  
ねええええつ!?

「修羅場だ…」

「修羅場だね…」

そして、なんか藤丸とロマニが他人事みたいに傍観してるし!?

あの野郎…後で必ず、そのポニテを残して、それ以外の髪をバリ  
カンで剃ってやるからな!

・  
・  
・  
・  
・  
・

ライダーVSキヤスターの睨み合いが何とか収束し、お次は藤丸が  
召喚をする番になった。

「えつと…もっちーみたいに、これをあそこに投げればいいんだよ  
ね?」

「そうよ。別に難しい事じゃないから、気軽にやりなさい」

「う……うん……」

本来の英霊召喚は、めつちや準備に時間が掛かる上に、長々と詠唱呪文を言わないといけないからな。

それを思うと、本当に便利な世の中になったもんだよ。

なんて言ったら、年寄り臭いかな？

「え……え……い！」

縁日で輪投げをする子供みたいに石を投げる藤丸。

なんとなく、あいつの浴衣姿を想像してしまった。

「わわわ！　なんか来たっ!？」

「先輩、まずは落ち着いてください」

慌てる藤丸を嗜めるマシユ。

こいつら、性格は真逆なのに仲良いよな。

いや、真逆だからいいのか？

「……アリね。アイデアが浮かびあがりまくるわ」

「キャスター……君の趣味に対してどうこう言うつもりはないが、節度ぐらいいは守ってくれよ？」

「御心配なく。これでも私は『王女』だったのよ？　それぐらいの常識

はあるつもりよ」

「……そうか」

エミヤ……お前、完全に諦めただろ。

今の所、お前が数少ない常識枠だったのに……。

「あ……あれ？　もしかして……」

こいつは……：またもや超見覚えのあるお顔が出てきたぞ？

あの顔は忘れてたくても忘れられない。

ふふ……：良かったじゃないか。

念願の『本来のクラス』で召喚されて。

「おお？　その顔はもしかして……立香の嬢ちゃんか？」

「クー・フリーリンさん！」

「パスが繋がってるってことは……今度はお前さんが俺のマスターか！

あつはつはつ！　こいつはなんとも、奇妙な縁もあつたもんだ！」

間違いなく、今の藤丸には最良に近い選出だな。

人格、能力、全てにおいて申し分なしだ。

「んじや、改めて自己紹介でもしますかね。ランサー…クー・フリーン。これから先、どんな奴が現れても、俺の槍で全て貫いてやるから、ドンと任せときな〜！」

「はい！ よろしくお願いします！」

よしよし。これで三大騎士クラスが揃った事になる。

しかも、うち二人が近接戦の超スペシャリスト。

間違いなく、これからの戦闘は格段に楽になるぞ。

「よっ！ 嬢ちゃんも元気そうじゃねえか！」

「そっちもな。お前さんの槍の冴え、期待してるよ」

「おう！ これからの戦いで存分に見せてやるよ！」

一先ずは一安心だな。

後衛と前衛がバランスよく整ってきた。

いや、どっちかに偏ったりしたらどうしようかって思ってたから、

冗談抜きで安堵してるわ。

「相変わらずだな。ランサー」

「おま…アーチャーか？ まさか、今度はお前が嬢ちゃんのサー

ヴァントなのかよ？」

「そうだが…それがどうかしたのかね？」

「あははははははは！ なんだよそれ！ 数奇な運命って次元じゃ

ねえな！ なんつー因果だよ！」

「なんでそこで笑う？」

「いや…そりや笑うだろ？ トドメ刺された相手がマスターになるつ

て…なんかもう、予定調和みたいじゃねえか」

予定調和…ね。

なんとも意味深な事を言うな。

「けどまあ…この嬢ちゃんは間違いなく、魔術師としてもマスターとしても超一流だよ。仮とはいえ、契約をしていた俺が言うんだ。そこは安心していいぜ」

「それは知っているさ。私は彼女の能力も才能も疑ったりはしていない」

「だろうな。それと、一つだけ忠告な」

「なんだ？」

「その嬢ちゃんな……男だぞ」

「なんだとっ!？」

「ええっ!？」

おいおいおい！　なんでそこで新しく召喚された連中が揃いも揃って劇画みたいな顔になって驚いてるんだよッ!

「こ……この顔、この容姿で男……だと……!？」

「しかも、今年で35歳になるらしい」

「ふっ……ランサーよ。流石にそれには騙されんぞ。百歩譲って、マスターが男であることは認めよう。世の中には女のような顔を持つ男が確かに存在するからな。だが、この幼女のような姿で35歳というのは、余りにも非現実的だ。そんなのはフィクションの世界だけだ」

「いや。ランサーが言ってることは本当なんだけど」

「……………は？」

なくんか話が進みそうにないので、ここでいつも財布の中に入れてある運転免許証を見せる事に。

これなら確固たる証拠になるだろ。

「マ……マスター……」

「なんだ？」

「き……君は車の運転が出来るのか……?」

「え？　気になるのそこなの?」

そりゃ、こうして免許持ってるんだからできるよ?

出来なきや、免許を交付なんてさせて貰えてないし。

「しかもこれ、順番に埋まってますよ」

「惜しかったんだよなあ……」

「何が？」

「折角、一種までコンプリートしたのに、途中から制度改正したから台無しなんだよ」

「よりにもよって全表記狙いだったのか……マスター……」



だってさ、やっぱし行けるなら、とことんまで行きたくならない？  
ちゃんと全部埋まってるよ、見てても気持ちいいし。

「また一つ、博士の謎が明らかになった……」

「先生が運転免許を持ってたなんて……それなら、休みの日には二人で一緒にドライブなんかして……キャッツ♡」

なんかオルガが乙女になってるけど、敢えてツツコまないからな  
。

「それよりも、もう一回分残ってるだろ？　ちやっちやとやりな」

「は〜い。えい」

二回目となると少しは吹っ切れたのか、さっきまでの緊張感は無くなっていて、軽く石を投げて召喚を始めた。

「今度はどんな人かな〜？」

「理想としては、もう一人ぐらい後方支援役が欲しい所なんだけどな……」

なんて話している間に召喚が完了したようで、収束した光が人の形になっていく。

おや？　今度のは完全に見知らぬサーヴァントのようだ。

一体、どこの英霊なのかな？

「わ……超美形のイケメンだ……」

「あの恰好は……サムライ……ですか？」

マシユの言う通り、召喚されたのは明らかに和風な英霊。

紺色の陣羽織にポニーテールに纏めた長い髪。

不思議と、同じポニーテールなのにロマニよりはウザくない。

「なんか凄く失礼な事を言われた気がする」

なんか言ってるアホポニテは無視して。

何よりも特徴的なのは、背中に背負っている長刀。

俺の見間違えじゃなければ、あれは……。

「アサシンのサーヴァント『佐々木小次郎』。そなたが私のマスターか？」

やっぱりかよ……。

単純な剣の腕ならば、日本は愚か、世界規模で見ても最強クラスの

剣士が召喚されちまった……しかも、なんでかアサシンで。  
疑問は残りまくるが……それは追々、調べていけばいいか。  
今は、純粹に戦力が増えたことを喜ぼう。

胃袋を掴まれました

「佐々木小次郎……」

「いかにも」

「おいおいおい……これまたとんでもない英霊が召喚されてるんですけど？」

日本史に名を残す伝説の剣豪の代名詞となる二人の内の一角。

あの背中に持つている長刀は、間違いなく『物干し竿』だな。

「佐々木小次郎と言えば、僕でも知ってるほどの大剣豪じゃないか！

でも、どうしてそれ程の人物が『セイバー』じゃなくて『アサシン』で召喚されたんだ……？」

「それは、私が佐々木小次郎本人ではないからだろう」

「「へ？」」

ロマニとマシユと藤丸が同時に疑問の声を上げる。

本人じゃない……ね。となると、恐らく……。

「お前はアレだな？ 『佐々木小次郎』という英霊を名乗るのに最も相応しいと『英霊の座』が判断した存在か」

「その幼女の言う通り。私はあくまでも『佐々木小次郎』の皮を被った名も無き剣士の一人に過ぎぬ。何故『アサシン』のクラスなのかは私にも解らぬが、恐らくは過去にどこぞの聖杯戦争で私が何らかの形で『アサシン』クラスで召喚されたことがあるから……ではないか？」

「幼女って……」

「こいつの推測は多分合ってるけど……幼女って……幼女って……」

「ここまで真正面から言われたのは初めてだぞ……」

「と……とにかく、これで博士も立香ちゃんも、それぞれに英霊召喚を成功させたって事になるね」

「そうね。先生はともかくとして、この子が一発で成功するとは思わなかったけど」

「そう言うなって。確かにまだコイツは素人だけど、それでもあの特異点を生きて脱出できたんだ。そこら辺の威張ってるだけの魔術師連中よりはずっとマシだ」

「せ…先生がそう仰るなら……いいですけど……」  
「もっちー…♡」

ん？ オレは普通に正当な評価を下しただけなのに、どうして尊敬の眼差しで見られなきやいけないんだ？

「フツ……どうやら、私は大当たりを引いたらしい」

「嬢ちゃんらしいわな」

アーチャーとランサーが何か言ってる。

赤と青だから、妙に絵になる二人だ。

「取り敢えず、まずは状況の整理をしようか。まず、博士が召喚したのが……」

「ライダーとアーチャー、それからキャスターの3騎だな」

「そして、立香ちゃんが召喚したのが……」

「えっと…ランサーのクー・フリーンさんと、アサシンの小次郎さんです」

「それに加え、博士には事前に特異点で召喚したセイバーもいる。この戦力なら、次の特異点はかなり攻略し易くなるだろう」

冬木の時とは違い、今度はこっちから乗り込んでいく。

しかも、戦力は充分に揃っている。

後は、マスターであるオレや藤丸が頑張るだけだ。

「んじや、それぞれの自己紹介や交流は各々でするとして、今度こそ体を休ませよう。特異点からこっち、休憩らしい休憩を全くしてないからな。オレは別にいいとしても、藤丸やマシユはそうはいかないだろう」

「そうだね。サーヴァントの皆の部屋に関してはこっちで準備をするから、博士たちはゆっくりとして……」

ぐうぐう……。

「ん？」

今度はオレとロマニとオルガが目を見合わせる事になった。

今の音は、もしかして……。

「……ごめんなさい……私です」

「藤丸かよ……」

「だつてえく……あれから色々あつて、凄くお腹が空いてて……」  
「ふむ……」

「そういや、向こうでも簡易的な食事をしたとはいえ、お世辞にも量が多いとは言えなかった。」

あくまで缶詰や栄養補助食品とかばかりだったしな。

あんなんじゃないや確かに腹には溜まらないか。

「よし分かった。休憩前にまずは腹ごしらえをしよう。腹が減つては戦が出来ぬとも言うし、お腹一杯になれば眠り易くもなる」

「そうだね。医療班の人間としても、ここらでちゃんとした食事はすべきだと判断するよ。でも、料理は誰がするんだい？ 調理班の人間は……」

「そうだった。あの爆発事件で調理班の人間も根こそぎ死亡してしまつていたんだ。」

こつち側のレフらしい、地味に嫌らしい戦法だ。

「それなら、私に任せて貰えないだろうか」

「エミヤがか？ 料理できるのか？」

「ああ。昔取った杵柄というヤツさ」

「お前さんなら信用出来るけど……」

「マスターとして、自分のサーヴァントに料理を任せるってのはどうなんだろうか……」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

結局、エミヤに料理を任せる事で意見が纏まり、そのままオレ達は食堂へ足を運んだ。

「ほう……これはまた、かなりの広さだな」

「カルデア職員が食事をする場所だからな。それ相応の広さが無いとやってられないんだよ」

これまでもここで食事をしたことはあるが、あくまで食事しかなかったのので、ここで談笑とかをした記憶は全く無い。

忙しかった頃は、部屋にあるカップ麺やカロリーメイトで済ませてたからな。

「では、早速……」

赤い外套が量子化し、黒いインナー姿でキッチンに立つエミヤ。

なんでだろう……めっちゃ違和感が無い。寧ろ、自然だ。

「ちよい待ち」

「どうした？」

「お前さんだけに作らせるのは流石に気が退ける。オレも一緒に作るよ」

「出来るのか？」

「当然。じゃなきや、こんな事は言い出さないよ」

白衣を脱いでから折り畳んで椅子に乗せて、腕まくりをしてから義手にゴム手袋を装着して……と。

「これでも一人暮らしが長くてね。自分一人でも生活していけるようにと色々頑張っていたら、自然と出来るようになってた」

「私も似たようなものだよ。いつの間にか出来るようになり、今では趣味のようになってる」

「オレ達、意外と似た者同士なのかもな」

「かもしれんな」

うん。なんか、エミヤとはいい関係になれそうだ。

戦力的な意味でも、人間的な意味でも。

「え？ もつちーも料理できるのっ!？」

「先生の料理……久し振りだわ……」

「本当に博士は万能なんだな……」

「あわわ……えつと……私は……」

……話をしている間に、しれつと全員が席に座ってやがる。

いるよな。飯時になると途端に行動が早くなる奴。

「肉！ 肉料理なら何でも可！」

「私は何でもいいです！ 兎に角、沢山ください！」

「軽食系で十分です」

「そうねえ……和食とか食べてみたいかも」

「きつねソバを頂こうか。なんでか、うどんに対抗せねばならぬ気がしてな」

「マスターの手料理なら、ダ・ヴィンチちゃんはオールOKさ！」

あの英霊共は好き放題言いよってからに……。

それと、なんでお前がうどんに対抗しなくちゃいけないだよ、佐々木小次郎。

「……どうする？」

「手分けして作るしかあるまい。ついて来れるか？ マスター」

「愚問だな。数が多いからと言って手抜き料理を作るつもりはないけどな」

「別に、全ての料理を完璧に作ってしまっても構わんのだろう？」

久し振りに、ちよつと腕を振るいますかね！

・  
・  
・  
・  
・  
・

「うまつ?!? あの弓兵がこれを作ったのかよ……」

アーチャーが焼いたステーキ(ミディアムレア)を頬張って、クー・フリーンが目を見開く。

オレから見ても、驚くほどに手際が良かった。

あれは生前から相当に多くの料理を作ってきたと見た。

「もつちーが作ってくれたオムライス……めちやウマ……♡」

「先生のハンバーグ……最高にジューシーだわ……♡ 肉汁が凄い……」

「このミートソースも絶品です！ フォークが止まりません……♡」

「これが博士の料理……凄く美味しい！ なんなんだ、このパエリアは！？」

「どいつもこいつも、好き放題に注文しやがるから大変だった。

けど、美味しそうに食べて貰えてるから満足ではあるかな。

「カツサンド……肉厚なのに手軽に食べられる。これはいいですね」

「お味噌汁……だつたかしら。単なるミソスープだと思っていたけど、不思議と心まで温かくなる料理ね」

「うむ……実に懐かしい味だ。箸が進む進む」

「こつちも喜んで貰えてるようだな。

けど、問題は……」。

「鞠絵のカツ丼……美味すぎます!! どれだけ食べても食べ飽きません! という訳で……おかわり!!」

「そうなのよね……」。

アルトリアはなんでか物凄い大食いで、其処ら辺のフードファイターなんて歯牙にもかけないレベルなんだよな。

アーサー王にそんな逸話ってあったっけ? って、本気で調べたのはいい思い出だ。

「ならば、今度はこれでどうだ?」

「アーチャーが作ってくれた天井ですか! これも美味しそうですね! 頂きます!」

「つーか、なんでさつきから丼物中心なんだ?」

「アルトリアのマイブームだったりするのかな?」

「いや。今思えば、契約をしてから初めてじゃないかな? こうしてマスターの手料理を食べるのなんて」

「今までは、そんな暇が無かったからな」

「それじゃあ、これからは暇があれば作ってくれるのかな?」

「気が向いたらな」

「それだけでも嬉しいよ。このラーメン、凄く美味しいよ」



「お褒め頂き光栄の至り」

……マスターらしく、ダ・ヴィンチにも色々と作ってやるか。

こいつがいたからこそ、成し得た奇跡もあるんだし。

「流石だなマスター。調理をする手に一切の迷いが無かったし、手際も見事の一言に尽きる」

「そつちこそ。これからは、ここを任せても大丈夫か？」

「構わないとも。寧ろ、こちらから言い出そうと思っていたところだ」  
「いや…マジで助かるわ。本当はオレもこつちに回った方がいいんだ  
ろうけど、技術主任として他にもやる事が一杯あってさ……」

「気にするな。サーヴァントとして、マスターの役に立つのは当然の  
事だ」

「そう言つて貰うと、こつちも気が楽になるわ」

エミヤの予想外の能力のお蔭で、かなり負担が減りそうだ。

これでオレも研究や調査に専念出来る。

「そうだ。ロマン」

「なんだい？」

「食事が終わってからでいいから、後で他のスタッフ達にもローテー  
ションで飯を食いに来るように伝えてくれ。あいつ等も働きっぱな  
しで疲れてるだろうから、少しは英気を養わせないと」

「了解だ。博士の手料理と知れば、きつと皆も喜ぶ」

そうなの？ オレなんかの料理で喜んでくれるのなら、これからも  
作るけど。

「にしても……」

「なんだ？」

「そうしていると、まるで博士こそがカルデアの所長みたいだね」

「バカ言え。オレはそんな柄じゃないし、カルデアの所長はどこまで  
もオルガだよ。オレがするのは、あくまでコイツのフォローと技術主  
任としての仕事、それからマスターとして頑張る事さ」

どうも、時計塔の講師なんて事をした後から、何故か周りがオレを  
上に立たせようとするんだよな。

オレにはそんなカリスマなんてないし、するつもりもない。

だって、めっちゃ面倒臭いし。

「そうだ。それで思い出した」

「なんだ？」

「ちよつとな。おい、藤丸にマシユ」

「はい？」

二人はそれぞれにスプーンとフォークを口に咥えたままこっちを向いた。

あと、口もとのソースぐらいはちゃんと拭け。

「今日は流石にアレだけど、明日からお前達二人には色々頑張つて貰うからな」

「色々と……」

「頑張る……ですか？」

「そうだ。まず、藤丸には次の特異点に行く前に、魔術師としての基礎を徹底的に叩き込む。これから先、魔術師としての知識が少しでもあるに越した事は無いからな。メデイア、出来ればお前も手伝ってくれないか？」

「マスターの命令とあれば喜んで。嘗ては教わる側だったから、誰かに何かを教えるのはなんだか新鮮だわ」

「別に命令じゃないんだけど……ま、いいか」

あれ？　なんか藤丸の顔が青くなってる？

具合でも悪いのか？

「それって……もしかしなくても勉強会……だよな？」

「勉強会ってよりは、授業の方が近いかな」

「授業か……なんでか懐かしく感じる響き……」

いや、仮にもお前は現役の女子高生だろうが。

学生の自分は勉強する事。

勿論、魔術の勉強が終わったら、今度は歴史や文学、数学といった事も教えていく予定だ。

「マシユは、トレーニングルームを使って召喚したサーヴァント達と戦闘訓練をするんだ。少しでもサーヴァントとしての戦い方を学んで、同時に宝具も使えるようになる為にな」

「は…はい！ 分かりました！」

「幸いなことに、三大騎士クラスの英霊を召喚出来てる。アルトリアやクー・フリーリンに教われれば大丈夫だろう」

「おう！ 結局、あそこじゃ出来ず仕舞いだったからな」

「そうですね。やるからには本気でいきましよう」

「よ…よろしくお願いします」

ありやりや。完全に委縮しちまった。

無理もないか。伝説の槍兵と、円卓の騎士の筆頭だしな。

このコンビに武術を教わると聞いて、萎縮しない方がおかしいわ。

「そうと決まれば…お替りいるか？」

「貰いますー！」

「はいよ。ちよつと待ってな」

育ち盛りなのかねえ。

少なくとも、オレにはもうそんなには食えないわ。

「後でオレも適当に何か作って食わないとな」

「ならば、私がそれを作ろう」

「マジか。んじゃ、頼むわ」

その後、他の所員達も入れ代わり立ち代わりでやって来て休憩しながら食事を楽しんだ。

少し余裕が出来た時にエミヤが作った親子丼を頂いた。

卵がフワフワでどちやくそ美味かった。

こいつ…やっぱし侮れないわ。

## 幕間 もつちーとサーヴァント達

ノウム・カルデアにある、とある部屋にて、カタカタカタという音と共に怒号のような悲鳴が聞こえていた。

「しょくくん……生きてるか……」

「愚問だ！ この程度で死んでたまるものか！」

「右に同じ！ というか、なんで私まで巻き込むっ!？」

「マスター……？ この仕事量は、流星に老骨に堪えると言いますか……」

「口よりもまずは手を動かせ。数学ジジイ」

「数学ジジイっ!? ホームズにも言われたことのない渾名が聞こえたんですけどっ!？」

現在、この場にいるのは四名の男達。

カルデア所属のマスターの一人であり、技術班を統括している『望月鞠絵』。

その彼と契約をしているキャスターの『ギルガメッシュ』

鞠絵とは色んな意味で腐れ縁の疑似サーヴァントの『諸葛孔明（エルメロイ2世）』

数学ジジイことアーチャーの『ジェームズ・モリアーティ』

「なんだろう……今、見えない誰かにバカにされた気がするのだがネ」  
気のせいだろう。

「博士……毎度毎度思うのだが、どうして我々が手伝わなくてはいけないんだ？ 今のカルデアにも少なからずスタッフはいるのだろうか？」

「あいつ等にはあいつ等の仕事がちやんとあるんだよ。それに、コレ系の仕事には向いていない」

「そうかもしれないが……」

「本当ならオレだってさせたくはない。けど、現状では致命的なまでに人手が足りないんだ。一人で可能ならば喜んでやるけど、それだと幾ら時間があっても足りない」

「だから、我々に手伝わせている……か」

「その通り。あ、ギル。こっち頼むわ」

「いいだろう。そっちは終わったのか？」

「あと少しって感じ。モリアーティー、そっちは？」

「こちらもうすぐだよ。ああ……可愛い愛娘（フラン）に会いたい……」

キャスタークラスとはいえ、人類史最古の英雄王であるギルガメツシユが素直に鞠絵の言葉を聞き入れている。

それは一重に、彼の事を認めているからに過ぎない。

実は、これはアーチャーの方のギルガメツシユも同じだったりする。

「やば……普通に時間の感覚が無くなってきたかも……」

「おい。以前の我の二の前にはなるなよ。貴様を冥界まで迎えに行くのは御免だぞ」

「大丈夫だって。まだまだ最高記録には程遠いぜ……へへへ……!」

「博士……一応の為に聞いておくが、その『最高記録』とはどれくらいなんだ……?」

「MAX3カ月! あの時とは本気で死ぬかと思ったよ……」

「それ、完全に人体の限界を超えてるよネっ!? マイガールは本当に人間なのかイっ!」

「普通に人間だし。オレはガールじゃないし」

などと話していても、ちゃんと手だけは動いているのが凄い。

四人揃って、目の下には真っ黒な隈が出来上がっている。

「そう言えば……別室で仕事をしている連中は大丈夫だろうな……」

「ああ……ニコラ・テスラとエジソン、それから……」

「ダ・ヴィンチとホームズの野郎もぶっこんだ。最初は全力で嫌がってたから、令呪&エミヤがトレースしたロープでグルグル巻きにしてから連行した」

「ブッ! ホームズザマアwww」

「いや、お前も他人事じゃないからね?」

こうして、今日も彼等は明日の平和の為に画面とにらめっこしてくのだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

小休止と食事を兼ねて、二班に分かれているお仕事メンバーは合流をして食堂へと向かっていった。

「おう…お前ら…：そっちの首尾はどうよ…：」

「取り敢えず、今日のノルマの5割は終わった感じかな？」

「そっか…：」

ダ・ヴィンチ（ロリ）の報告を聞いても全く覇気がない。

それは、この場にいる全員がそうであり、いつもは口喧嘩が絶えないエジソンとニコラ・テスラも、今回ばかりは静かに黙っていた。

「お前達も悪いな…：こんな事を手伝わせちまって…：」

「なに、サーヴァントとしてマスターの仕事を手伝うのは当然だ。当然だが…：」

「あんなにも大量の仕事をしたのは生前でも何回あった事か…：」  
「だろっうな…：」

世界的にも有名な科学者であり、今を生きる科学者である鞠絵にとっては誰よりも尊敬する英霊でもある二人に自分の仕事を手伝わせることに、少なからず罪悪感を抱いている。

だが、今はそんな自分の事情に何て構っている余裕はない。

これから先の戦いの為にも、今できる事は全力でやらないといけないのだ。

「ハハハ…：いい気味だね…：ホームズ…：」

「そっちだつて凄いい事になってるじゃないか…：モリアーティー…：」

「ハハハ……」

世界一の名探偵と犯罪界のナポレオンが揃って目の下に隈を作っている。

見る者が見れば卒倒しそうな光景だ。

「おっと……」

「何をふらついでおるか。ほれ」

「わっと」

足取りがおぼつかない鞠絵の事を見かねたのか、いきなりギルガメッシュが彼の事を持ち上げた……と言えば聞こえはいいが、要はギルガもつちーを抱っこした。

「……ごめん」

「そのように謝るのであれば、もっとしつかり歩かんか。戯けが」

文句を言っているように聞こえるが、その顔は僅かに笑みを浮かべている。

結局、そのままの格好で食堂まで行く羽目になった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

食堂に到着すると、そこでは様々なサーヴァント達で賑わっていた。  
た。

どうやら、時間帯的には丁度、昼が少し過ぎた辺りだったようだ。

その証拠に、普段からカルデア内の食事を作っているエミヤやブーディカ、タマモキヤットなどがテーブルについて茶を飲んでいる。

「やつと落ち着いたね」

「いつも、あの時間が最も賑わうからな……って、タマモキヤット、どう

した?」

「この気配……どうやらご主人がやってくるようだぞ? キヤットの『御主人レーダー』にビビッと来た!」

「なによそれ……」

キヤットの言う通り、食堂の入り口から鞠絵を初めとした面々がゆっくりと入ってきた。

だが、その顔を見て食堂にいる全員が凍りつく。

「む? 碌に時計を見ずにやっていたからよくは分からなかったが……丁度いい時間だったようだな」

「やつと食事でありつける……」

あのギルガメッシュが鞠絵を抱き上げた状態でやって来たのも驚きだが、それ以上に全員の顔がまるで死人のように青褪めていた事が驚きだった。

「ちよつとちよつと! 最近になってからあんまし姿を見ないと思ったら……また徹夜でもしてたつていうの?」

「そうでもしないと全く終わりそうにないからな……」

「むう……流石はご主人。キヤットに出来ない事を平然とやってのける!」

「感心している場合か! ギルガメッシュ、マスターは大丈夫なのか?」

「当たり前だ。この我がいる限り、こやつを過労死などさせぬわ。今は極度に疲労しているだけよ」

「そうか……」

一先ずは一安心。

そのまま開いている席に向かってから、そつと鞠絵を椅子の上に降ろす。

その隣に孔明が座るが、その途端に鞠絵が彼の体に体を預けるようにしてきた。

「は……博士!? いきなり何をっ!」

「少しだけこうさせてくれ……頼むわ……」

「全く……普段の貴方はどこに行ったのやら……」



瞼が重く、今にも眠りそうな鞠絵に対し、いつもは喧嘩腰な孔明も強くは言えないようで、溜息を吐きつつもそのままの状態を許していた。

だが、そんな彼を決して見逃さない人物が一人。

「おやおやく？ いつから兄上と博士はそんな仲になったのかな？」

「ラ…ライネスツ!？」

可愛い可愛い小悪魔な義妹の登場である。

因みに、彼女もまた鞠絵に強い好意を抱いている女性の一人だったりする。

「うんうん。やっぱり、博士は何をしても可愛いね」

「頬をつつくな。彼は今、本気で疲れ果てているんだからな」

「分かっているよ。この私が博士に対して酷い事をする訳がないだろう?」

「どの口がそれを言うのやら……」

疲労でいつもの調子が出ない孔明は、肩を下げて再びの溜息。

折角の小休止なのに、全く気が休まらない。

「おいフェイカー。まずは食事だ。何か腹に溜まる物を寄越せ」

「そう言う注文が一番困るのだがな。いいだろう、他の者達はどうする?」

「私は消化にいいものを頼む。出来ればスープ付きで」

「心得た。マスターはどうする?」

「シエフにお任せする……」

「了解だ」

.....

運ばれてきた食事を口にしながら、束の間の休息を楽しむ面々。  
鞠絵もエミヤが作ってくれたオムレツを寝ぼけ眼で食べているが、  
うつらうつらとして何度か完全に瞼が閉じることがあった。

「口にソースが付いておるぞ雑種。ジツとしている」  
「ん……」

ギルガメッシュが鞠絵の口元をティッシュで拭う。

それを見て、エミヤが信じられないような物を見る目をしていた。

「なんだ、その目は」

「お…お前は本当にギルガメッシュか……？ 仕事のし過ぎで霊基に  
異常が生じてるんじゃない？」

「その一言で、お前が普段から我たちをどのように見ているかがよく  
分かったぞ」

全てはアーチャーの方のギルガメッシュが悪い。

抗議などは彼の方にして貰いたい。

「にしても、また相当に無茶をしてみるみたいだね。そんなにも溜まっ  
てるの？」

「溜まっているという次元じゃないよ。あれはもう完全に『山』だね」  
「山って……」

その見た目に反してカツ丼を食べているダ・ヴィンチ（ロリ）に言  
われ、普通にドン引きするブーディカ。

そんな中、密かに鞠絵の後ろに周り込んだキヤットが、その肉球に  
て彼の顔をそつと挟んだ。

「ふみゅ？」

「そんなにも疲れているのならば、キヤットの癒しの肉球にて心を落  
ち着かせるがよい！ これまでに幾多の肉球愛好家を虜にしてきた  
キヤット自慢の肉球に掛かれば、御主人の疲れなど一発で吹き飛ばすに  
違いないぞー」

「ああ…なんかちよつと夢心地になってきたかもしれない……」

「博士の眠気が加速度的に進行してるっ!？」

鞠絵、完全に寝る一歩手前まで来てしまった。

腕だけを器用に動かしてオムレツを食べている。

「マイガール：せめて君だけでも休むべきじゃないのかな？」

「けど：皆が頑張ってるのに：オレだけ休むつてのは……」

「博士。今も昔も、カルデアという組織において、君の存在は最重要であると同時に必要不可欠な存在だ。その君に倒れられたら、戦力が大幅にダウンする」

「ホームズ……」

「確かに博士は常人を遥かに脱しているが、それでも人間であることには違いないんだ。休息は私達以上に大切だよ」

「名探偵にそう言われちゃ：何も言い返せないな……」

観念したのか、皿を空にした鞠絵は、最後の力を振り絞って口を拭いてから、それから素直に体の欲求に従って瞼を閉じた。

「ようやくか。姿形以上に性格もまた何にも変わっていないんだな、この人物は」

「それじゃ、私が部屋まで送ってくるよ」

鞠絵を起こさないように、そつと体を持ち上げるブーディカ。

小さな背中を優しく擦ってから、少しだけ位置を整える。

「少しだけここを頼んだよ」

「ああ。マスターの事を頼んだ」

ブーディカが食堂を後にするのを見届けてから、孔明は静かに息を吐いた。

「そう言えば、ミスター孔明は度々マスターと色んな事を話しているが、君達は昔から親交があるのかね？」

「親交……というよりは、完全に腐れ縁になるな」

「そうだね。時計塔にいた頃から、兄上はよく博士に振り回されていたからね」

「一緒になって私を振り回していたお前が言うな！」

エジソンの指摘に昔を懐かしみながら応えるが、ライネスの一言で全てが台無しになった。

怒鳴られた本人はどく吹く風だが。

「貴様は知っているのか？ 雑種がどうしてもあのように無理をする性格なのかを」

「詳しく知っている訳じゃない。だが、大体の推測は出来る」

「それはそれは……是非とも聞かせて貰いたいな。ロード・エルメロイ2世の推測とやらを」

「シャーロック・ホームズにそれを言われても皮肉にしか聞こえないが……まあ良いだろう。どうせ、いつかはバレることだしな」

そうして、孔明ことロード・エルメロイ2世は静かに語り出した。

望月鞠絵が時計塔にいた頃の事を。

自分と彼との関係を。

第一特異点 邪竜百年戦争オルレアン 救国の聖

女

予兆

カルデア内にあるオレの自室兼研究室。

オレだけの空間であり癒しの場所。

いつの間にかドアの所に『もつちー研究室』という張り紙が貼られてあつたけど、間違いなく藤丸の仕業だろう。

アイツにはいずれ、この望月先生による特別授業をしてやろう。

「はあ……つたく……」

特異点と化した冬木から無事に帰還し、オルガの復活やらサーヴァントの補充やらをやってから数日。

オレは帰り際に母さんから渡されたUSBメモリを自分のパソコンで調べていた。

「母さんもまた……とんでもないモンを残してくれたよ……」

「フオウ……」

自分の髪をくしゃくしゃにしながら、オレは眼鏡を外しながら天井を見上げる。

こんなものを見せられれば、誰だつて溜息が出る。

少なくとも、オルガやマシユ、ロマニには見せないようにして大正解だつたな。

「これは……『日記』だ」

『とある男』が密かに残していた『日記』。

USBの中にあつたのは僅か数日分だけだったが、それだけでも十分に分かってしまう。

「……最初から『そう』だつたつて訳じゃないのかよ……クソツ……！」

なんて残酷な現実。無慈悲な運命。

万が一にでも、スタッフの皆がこれを目にしてしまったら、絶対にその瞬間に戦意喪失してしまうか、怒りの余り奮い立つかのどつちか

だな。

多分、オルガはめっちゃ怒るだろうが。

「オレ達の敵はなんなんだ……？ オレ達は、何と戦おうとしてるんだ……？」

『この世界のレフ』が一体誰の先兵なのか。

それが判明しない事には、本当の意味で戦場に立つ事すら出来ない。

「これは金庫にでも入れて厳重に保管しよう。フオウも黙ってるよ？」

「フオウ！」

机の上に乗ってオレの事をジッと見つめているフオウをそつと撫でてから、オレはUSBを対核用特製金庫（自分で作った）の中に放り込み、適当にダイヤルを回した。

「これでよし。んん〜……！」

背中を伸ばしてから椅子から飛び降り、欠伸を噛み殺しながら扉へと向かっていく。

「休憩がてら、他の皆の様子でも見てこようかね〜……！」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

まず最初にオレが訪れたのは、メディアが藤丸に魔術の事を教えているであろう研修室。

頭の上にフオウを乗せた状態でドアを開けると、其処にいたのは……。

「あ〜……！」

「はあ……」

大きな溜息を吐きながら頭を抱えているメディアと、机の上に突っ伏して真っ白に燃え尽き、口から魂が出ている藤丸の哀れな姿だった。

「……どうした？」

「あら、マスター。もう仕事はいいのかしら？」

「まあな。休憩ついでに皆の様子でも見ようと思ってたんだけど…マジで何があった？」

よく見たら、机の上にはびっしりと色んな事が書かれているノートが置かれている。

別に勉強が嫌になって灰になっていると思っていたが、意外と真面目に頑張っているようだ。

「この子、努力しようって姿勢は認めるんだけど…なんて言えばいいのかしらね…：キャパが少なすぎなのよ」

「……は？」

キャパが少ない？

「別の言い方をすれば、物覚えがお世辞にも良い方じゃないわ。多分、この手の子には理論的な教え方じゃなくて、実戦形式の方が良いんじゃないかしら？」

「体で覚えさせるって事か？」

「そっちの方が、この子にはいいと思って」

「ふむ……」

あの後、密かにダ・ヴィンチから藤丸の成績の事などを教えて貰ったのだが、中の中という凄く普通な感じだった。

別に不真面目って訳じゃない。単純に覚え方が悪いだけかもしれない。

この手の奴は、いざって時に限って急に実力を発揮したりする。

云わば『本番に強い』タイプってやつだな。

「確かに、そっちの方が良い気もするが、だからと言って基礎を疎かにしていい理由にはならないからな。今度からは基礎的な事だけを集中して教えてくれるか？」

「分かったわ。昔は教わる立場だったのに、今は誰かに教える立場になるとはね……なんだか面白いわ」

こいつ……なんだかんだ言って楽しんでないか？

女王だった事もある、真面目で教養もあるし、人柄も悪くない。もしかしたら、こいつの師匠である『大魔女』の指導方法が良かったのかもな。

「んじや、引き続き藤丸の事は任せるよ。オレは他の場所を見てくる」  
「は〜い。マスターの命ですもの。喜んで引き受けるわ」

「もつち〜……たひゆけて〜……」

最後の力を振り絞って藤丸がオレに手を伸ばすが、残念だったな。  
立場上は、オレもメディア側なんだよ。

軽く手を振ってから、オレは研修室を後にした。

その後、藤丸の絹を引き裂くような悲鳴が聞こえたが、きっと気のせいだろう。

・  
・  
・  
・  
・  
・

次に訪れたのは、マシユが鍛えられているであろうトレーニングルーム。

扉越しに剣や槍が交わるような金属音が何度も聞こえてくる。

それだけで、あいつ等が激しい訓練をしていることが容易に分かる。

「お〜っす。がんばってるか〜?」

「マスター!」

「お? 嬢ちゃんか!」



「博士！」

「む……？ お主か」

ここにいたのは、アルトリアとクー・フリーン、メデューサに佐々木小次郎。それからマシユの五人だ。

皆、いい汗を掻いて爽やかな感じが出ている。

「マシユ。宝具の方はどうだ？」

「はい！ 皆さんのお蔭で無事に発動に成功しました！」

「そうかそうか。取り敢えず、これで一先ずの懸念材料の一つは解決したわけか。よく頑張ったな」

「ありがとうございます！」

宝具が使用可能になれば、これからはマシユも立派な戦力に数えられる。

どんな宝具からまだ不明だが、それはその時になるまで楽しみに待っていていよう。

「お前達もご苦労だったな」

「なに、いいってことよ。こつちもいい運動になったしな！」

めっちゃ眩しい笑顔を振りまきながら、ランサーが俺の頭を無造作に撫でてくる。

本来のクラスに戻っても、性格のほうは全く変化してないのな。

「そうだ！ 鞠絵！ 聞いてくださいよ！」

「いきなりどうした？ そんなに声を荒げて」

普段は冷静なアルトリアが、プライベートでここまで叫ぶのは珍しい……気もしないな。

飯時はよく大声を出してたわ。

「この佐々木小次郎とかいう武人……只者ではありません!!」

「そりゃ、仮にも日本の歴史に名を刻む程の大剣豪だしな」

寧ろ、只者じゃないと困る。

正確には『佐々木小次郎を名乗るに相応しいと聖杯に認められた誰か』なんだけど。

「そうなんだよ！ こいつの斬撃、全く読めねえ上に、必殺の一撃の時は斬撃が三つ同時に襲い掛かってくるんだ！」

三つ同時に襲い来る斬撃？　なんだそりゃ？　何かの比喩か？

「あれには私も本気で驚愕しました。よもや、私の足を以てしてでも全く回避が出来ないとは……」

機動力に定評があるライダーと、俊敏さなら誰にも負けないランサーがここまで言うとは……佐々木小次郎。一体どんな攻撃をしたんだ？

「なに。別に大したことではござらんよ。生前、空を飛ぶ燕を斬りたいたいと思い、自分なりの修練を重ねていたに過ぎぬ。それをしていたら、いつの間にか今の領域に到達していたのよ」

「佐々木小次郎の代名詞にして必殺技『秘剣・燕返し』か」

名前だけしか知らないから具体的には分からないが、それが人知を超越した凄まじい一撃である事は知っている。

成る程な。このアサシンは己の技術を究極まで高めることで、その技を宝具の領域にまで昇華させた『超人』系の英霊なのか。

って事は、コイツってタイマンでの戦いなら無敵なんじゃないかろうか。

「いずれ、貴殿にも見せる時が来よう。その時は存分に、我が秘剣を目に刻み込むといい」

「おう。遠慮なく、そうさせて貰うわ」

伝説級の必殺技をこの目で見れるとか、役得以外の何者でもないだろう。

「お前らも、そろそろ休憩したらどうだ？　この次は食堂でも行って軽食でも食べようと思ってたんだ」

「流石は私の鞠絵です！　是非ともそうしましょう!!」

「お……おう……」

アルトリアの奴……急に元気が出やがったな……。

やっぱ、食べ物系の話をすると人が変わるよな……。

……

トレーニング組と一緒に食堂に向かうと、そこには一足先にダ・  
ヴィンチが微笑みながらパフェを食べていた。

「おや？ マスターも休憩かな？」

「つて事は、お前もか」

「そうさ。私みたいな天才には適度な休息が必要不可欠だからね」

「などと云って、一時間も前から食堂に入り浸っているのは誰だった  
かな？」

皮肉るような言い方で苦笑いを浮かべながら腕を組んでいるのは、  
キッチンにいるエミヤ。

もう完全に食堂係になってるな……有り難いやら、申し訳ないやら  
……。

「おつとエミヤくん。それは言わないお約束だぜ？」

「誰も、そんな約束をした覚えはない」

「だろうな。」

「所でマスター。君達こそ休憩なのか？」

「うん。ずっとパソコンと睨めっこしてたから、甘いものが恋しく  
なってな」

「ならば、君にはダ・ヴィンチ女史と同じパフェを御馳走しよう」

「それは嬉しいな。そうだ。出来ればチョコシロップじゃなくてイチ  
ゴシロップでお願い。甘酸っぱいのが大好きなんだよ」

「了解だ。少し待っていてくれ」

エミヤつて、料理だけじゃなくってお菓子作りも一流だから凄いんだ  
よな。

もしかして、アーチャーのサーヴァントつて皆が皆、料理が得意  
だったりするのか？ ほら、サバイバル技術の応用……みたいな？

「いい情報を聞いたね……マスターは甘酸っぱいのが好き……と」

「博士はイチゴが好き……」

うん。マシユとダ・ヴィンチが真剣な顔で何かを反芻してるけど、今は無視しよう。

「アーチャーよ。嬢ちゃんの後で構わねえからよ、俺らにも何か頼むわ。コーヒーとかでいいわ」

「いいだろう。少しだけ待ってる」

アーチャーとランサーって犬猿の仲って感じがするが、意外とよく話すよな。

二人並んでると、割と絵になるから凄いやな。

って…しれつとライダーとマシユがいつの間にか隣に座ってるし。

「待たせたな。私特製のイチゴパフェだ」

「おぉ〜！」

クリームたっぷりの美味しそうなパフェが目の前に立っている……。

しかも、ちゃんとイチゴを果実を切り分けてから添えてある！

甘い匂いがオレの鼻孔を刺激する……。

「いただきます。あむ……」

ん〜♡ おいし〜♡

大人になっても甘いものは止められないよね〜！

寧ろ、大人になったからこそ、より一層食べるようになったまである。

「そんなに美味しいのか？」

「うん！ ランサーも一口食べるか？」

「いいのか？ んじや、遠慮なく……」

スプーンで一口分だけ掬ってから、ランサーに向けると、ぱくりと口の中に入れた。

「ん〜…悪くないな。甘い菓子とはあんまし縁が無いんだけどよ、これからはもうちょい色んな物を食うようにするか」

「そうしたほうがいいぞ〜。食は心を豊かにするからね〜」

同姓の甘い物好きが増えるのは純粹に嬉しい。

ロマニはあんまし食わないしな。

「口にクリームを付けながらパフエを食べる博士……♡」

「マスター……それはちよつと反則じゃないかな……」

「鞠絵……貴方って人は、どこまで……♡」

「流石は私のマスター……素晴らしいです……♡」

はい。その女性陣は鼻血を拭け。

そして、小次郎は穏やかな目でこつちを見るな。

「よきかな、よきかな」

お前は縁側で日向ぼっこをするおじいちゃんか。

『あく……テステス。博士！ 立香ちゃん！ マシユ！ それからサーヴァントの皆！ もしこの放送が聞こえているのなら、すぐに管制室に集合してくれないか？ 特異点についての話がある！』

これは……ロマニからの放送？

特異点についての話って事は、遂に七つある特異点の一つの情報が絞られたって事か。

「よし。ああ言ってるし、急いで向かうとするか」

「それはいいですけど……その食べかけのパフエはどうするんですか？」

「これ？ 食べながら行くよ？ だって勿体無いし」

行儀が悪いとは思うけど、緊急事態だから仕方がないよね。

そんなわけで、皆揃って管制室へ急ぐとしますか。

・

・

・

・

・

「待たせたな」

「博士！ ……って、なんでパフエなんか持ってるんだい？」

「お前が食べてる途中で呼び出すからだろうが。オレは悪くない」  
「はあ……」

管制室で待つていたのは、忙しそうにしているロマニと、車椅子から卒業して完全復活したオルガだった。

「先生。頬にクリームが付いてますよ。あむ」  
「あ……」

ごく自然な動作で、オルガがオレの頬についていたクリームを指で掬ってからペロツと舐めた。

「甘い……って、あっ!?!」

次の瞬間、オルガの顔が急速沸騰した。

流石のオレも照れくさくなる。

(青春だな……)

その弓兵と槍兵は、なにを慈しむような目でこつちを見とるんじや。

「やっぱり所長こそが……」

「最強のライバル……!」

んで、マシユとダ・ヴィンチはその顔止めれ。

完全に劇画調になってますがな。

「所長。博士とのラブコメは後にして貰えるかな?」

「ラ……ラブコメ?!? いきなり何を言いだすのよツ!?!」

お前もお前で怖いもの知らずだなロマニ。

後で頭頂部に10円ハゲが出来ても知らないぞ。

「それで、特異点についての話って何なんだ?」

「そうだった! 実は……って、立香ちゃんはどこに?」

「ここです……」

さつきより少しは回復したと思われる藤丸が、メディアに連れられてやって来た。

完全に受験前の高校生みたいになってるな。

いや、今でもあいつは立派な高校生か。

「だ……大丈夫かい?」

「なんとか……」

見るからに大丈夫じゃないけど、メンバーが揃った以上は話を進めない訳にはいかない。

ロマニはわざとらしく咳払いをしてから、改めて話を始めた。

「ボクらが突破していかなきゃいけない7つの特異点。どこから攻略すべきか考えた結果、現状では最も揺らぎが少ない場所に行こうと結論が出た。本当は博士の意見も聞きたかったんだけど、貴方には他の仕事があったからね」

「気にすんな。仮にオレがこの場においても、お前達の決定に異を唱えるような真似はしなかったさ」

「博士なら、きつとそう言ってくれると思っていたよ」

伊達に長い付き合いいじゃないからな。オレたちは。

「んで、オレ達はどこに行けばいいんだ？」

「ロマニ」

「うん。我等カルデアが最初にレイシフトを行う特異点は……」

「西暦1431年のフランスだ!!」



## 百年戦争の地へ

「西暦1431年のフランスか……」

ロマニから提示された年号を聞いて、オレは顎に手をやる。

「藤丸」

「な……なに？ もっちー」

「問題だ。1431年頃のフランスで起きていた事と言えば何だ？」

「え……ええ？ 私、歴史は苦手なんだけどなあ……」

「制限時間は10秒だ」

「短いよー！ えーつと……」

藤丸が頭を抱えて悩んでいるが、他の皆に目配せをして人差し指を唇に当てて黙っているように合図をする。

偶には自分で考えさせないとな。

「はい、時間切れだ。答えは？」

「……分からにやい」

「はあ……マシユ。答えを言ってやれ」

「はい。1431年頃のフランスは丁度『百年戦争』の真つ最中です。ただ、この時期は確か戦争の休止時期だった筈……」

「正解だ。よく勉強しているな」

「あ……ありがとうございます！」

今度、藤丸に歴史の授業でも開いてやった方が良くもしれんな……。

当時の生き証人とも言うべき存在がいる事だし。

「百年戦争……そんなの習ったかな？」

「単純にお前が覚えていない可能性の方が高そうな気がするけど」

「……否定は出来ない」

……カルデアの書庫に当時の資料つてあつたかな。

マジで勉強させた方が良くもしれん。

「百年戦争ツツーのは、簡単に言っちゃまえば国の中で起きた内戦だ」

「国の中で百年もの長きに渡って戦争を続けたのですか、鞠絵？」

「実際にはそうなるけど、流石に百年間休みも無く戦争してたわけ

じやねえよ。さつきマシユが言った通り、年単位で休み休みやってたらしいぞ。資料では、かなりのんびりとした戦いだっつらしい。捕えられた兵士が金の力で釈放されるなんてことが日常的だっつらしいしな」

「なんつーか……俺等からしたら信じられねえな……」

確かに、アルトリアやクー・フリーンのような戦乱の世を生きた英霊からすれば信じられないかもしれないな。

「フランス王国の王位継承権及びイングランド王家がフランスに有する広大な領土を巡って、フランス王国を治めていたヴァロワ朝と、イングランド王国を治めているプランタジネット朝やランカスター朝というフランス人王朝同士の争いに、フランスの領主たちが二派に分かれて戦った内戦、それが百年戦争の簡単な概要なのさ」

「同じ国の人間同士で争うなんて…愚かね」

「メディアアの言ってる事は正しいよ。けど、当時はまだ『国家』という概念が薄い時代でもあってな、封権諸侯の領地争いが重なってしまっただものだったんだけど、その戦争を経て次第に国家や国民としてのアイデンティティーが形成されていった。皮肉にも、百年戦争のお蔭でフランスとイギリスの国境線が決定的にもなったんだ」

そう考えると、割と最初から大変そうな特異点じゃないのか？

一番目からこれなんだから、これからの事を考えると胃が痛くなりそうだ。

「因みに、この『百年戦争』という呼称は19世紀初期頃にフランスで用いられるようになったもんで、イギリスでも19世紀後半に慣用されるようになっていったらしい」

「「「おおく…」」」

…なんで皆して拍手をしてるんだ？

普通に説明してただけなんですけど。

「なんだか、時計塔時代を思い出すわ……。あの頃もよく、こんな風に先生の授業を受けてたっけ……」

「正直、嬢ちゃんが元教師って聞いた時は眉唾だったけどよ……」

「今の説明を聞けば納得するな。実に分かり易かった」

「流石は望月博士だ。本当はボクが説明しようと思ってたけど、やっぱり本職には敵わないね」

「よせやい。照れ隠しにお前のポニーテールを引っこ抜きたくなくなるじゃんか」

「なんでそうなるのツ!？」

照れ隠しだつて言ってるだろうが。ちゃんと聞いとけ。

「と…兎に角、特異点があると思われる場所は判明したんだ。後は準備をしてからレイシフトを敢行するだけだな」

「先生、今すぐに行くんですか?」

「まさか。急がなければいけないとはいえ、変に焦って準備不足に陥って詰んだら元も子もない。一日だけ時間を設けて、入念に準備をするべきだろう」

「ボクも博士に賛成だ。各種準備もそうだけど、体の事も考えて、一日休みを取る事をお勧めするよ。可能な限り、万全の態勢で挑みたいからね」

医療スタッフを束ねているロマニが言うと、不思議と説得力がある。

いざつて時の最後の砦だからな。

「けど、その前に決めておかないといけない事がある」

「スタンディングメンバーとなるサーヴァントの選出ですね、先生」

「ああ。システム上、基本的にマスター一人に付き、一緒にレイシフトが可能なのは三人までとなっている」

「前までは一人につき一人が限界だったんだけど、望月博士が何回も改良を繰り返していった結果、三人までは連れて行けるようになったんだよ」

「最初に聞いた時は、誰もが度肝を抜かされたけどね」

どんな時もベストを尽くすのがオレ流なんですね。

「まず、藤丸の場合は最初から決まってるから大丈夫だな」

「そうなの?」

「マシユは絶対として、ランサーとアサシンで三人だろ。現状、お前が契約をしているサーヴァントはこいつ達だけなんだから」

「そーでした」

これからはそうじゃなくなるだろうけどな。

編成のコツとかも教えないといけないのかな……。

オレ…マジで過労で倒れたりとかしないよな？

「んで、オレの場合は、まずはセイバー…アルトリアは余程の事が無い限りは絶対だ」

「はい！ 鞠絵の事は私が必ず守ってみせましょう!!」

「お…おう…よろしくな？」

なんで、こんなにも気合が入ってるの？

いや、無いよりはずつとマシだけどさ。

「二人目はエミヤ。お前さんだ」

「了解だ。一応、理由を聞いてもいいかな？」

「前にも言ったと思うが、物理攻撃が可能な後方支援役は本当に貴重な存在だし、エミヤの場合は他にも色々と万能にこなす事が出来る。戦闘時も、非戦闘時も安心して頼る事が出来る。正直、お前がいるといないとではレイシフト先での安定感は雲泥の差だろう」

「う…うむ…まさか、俺のような半端な英霊にそこまで期待を抱かれていたとはな。いいだろう、君ほどのマスターにそこまで言われた以上、こちらも手を抜くわけにはいかんな。全力で挑ませて貰おう」

「助かるよ」

ぶつちやけ、エミヤの存在は本当に助かっている。

最初に来てくれたアーチャーがコイツで良かったよ。

「三人目はメディア。お前だ」

「私ね。任せて頂戴」

「お前を選んだのにもちゃんと理由がある」

「なにかしら？」

「時代自体は13世紀〜14世紀の間で、年代的にはかなり近代に近いほうだ。けど、実際にそこで特異点が発生しているという事は、まず間違いなくなんらかの魔術的な痕跡がある筈だ」

「成る程、その調査の為に私が選ばれたって訳ね？」

「そう言う事だ。オレ自身もちゃんと調査をするが、専門家がいてく

れた方が調査の精度が上がるからな。出来れば、メディアには現地でおれの助手をして欲しくて欲しい」

「マスターの助手…ね。いいわ、喜んでやらせて貰うわ」  
「ありがとな」

これで話す事は終わり…じゃないんだよな。

「ライダー。最初のメンバーには外してしまったけど、お前もちゃんと準備をしておいてくれ」

「それはまた何故ですか？」

「オレ達マスターは、そう簡単にレイシフト先から行ったり来たりは出来ないが、サーヴァントに限ってはそうじゃない。一日に一人限定ではあるが、カルデアで控えている別のサーヴァントと交代が可能なんだ」

「と、言う事は…」

「必ず、お前の力が必要な時が来る。ライダー特有の機動力が必要な時がな」

「了解しました。では、その時が来るまで、私は万全の態勢で待つ事にします」

「そうしてくれ。頼んだぞ」

…なんとかフォロワーは出来た…かな？

別に、今言った事は嘘ではないし、必ずメドゥーサの能力が必須になる場面が出てくる。

因みに、サーヴァントの交代はカルデア側から操作して初めて可能になる。

こつちから指示して、それを聞き入れてからコツチで送り出すって感じだな。

「そんな訳だから、今日はもう訓練とかは中止な。ちゃんと休んでから明日に備えよう。では、解散」

って、またオレが皆に指示を出してるよ…。

完全にオルガのセリフを取ってないか？

「皆に命令をする先生も素敵…♡」

おーい、所長殿。

お前がそれでどーすんだー。

「フオウ……」

ほらく、フオウも呆れて首を振ってるぞー。

獣に呆れられるってどうなのよ……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

次の日。

オレと藤丸、それからデミ・ザーヴァントであるマシユの三人はコフィンの中に入ってから各種調整を行っていた。

サーヴァントの皆はコフィンの周りにて待機をしている状態。

こいつらはオレ達がレイシフトさえすれば、自動的に着いて来るから問題は無い。

「ロマニ。コフィンの調子はどんな感じだ？」

「全く問題無いよ。博士は応急処置とか言ってたけど、ほぼ完璧に修復されてるよ」

「思ったよりも損傷が軽微だったただけだ。そこまで大したことはしてないさ」

「これ程の事を『大したことない』で済ませる辺り、博士とボク達が多かれだけ離れているか分かるよ……」

別に離れてなんかないだろ。超すぐ近くにいるじゃん。

「もっちー…なんかこの服、ピチピチするよ」

「仕方がないだろ。それがレイシフトする際の正式なスーツなんだ。心配すんな。向こうに付けば自動的に元の服に戻る」

「そうなんだ…便利だねー」

今回はオレもちゃんと専用のスーツに身を包んでいる。

幾らレイシフト適性が高いとはいえ、万全を期することに越したことはないからな。

「よし……これでよしー!」

ロマニが機器を操作して設定を完了すると、遂にちゃんとしたレイシフトが開始される。

「レイシフト設定……1431年、フランス!」

「望月博士、藤丸立香。両者共にバイタル良好!」

「レイシフト開始まで、10……9……8……7……」

あれ? なんか頬の当たりがモコモコするような気が……って、なんでフォウがオレのコフィンに入り込んでるんだっ!?

つか、いつの間に入ってきたツ!? 普通に気が付かなかったんですけどツ!?

今すぐにも出した方が良くいんだろうけど、今更レイシフトを中止にする訳にもいかないし……。

(冬木の時も大丈夫そうだったし、今回も大丈夫だと信じるしかないか……?)

我ながら、なんとも楽観的な性格になったもんだ。

段々とウチの親に似てきたのかな?

「レイシフト開始! 立香ちゃん! 博士! 武運を祈る!!」

「先生! どうかお気をつけて!」

最後に心配そうにしていたオルガにサムズアップをしてから、オレ達は過去の世界へと飛び立っていった。

向かう先は14世紀のフランス。

『聖女』と呼ばれた少女がいた時代。

果たして、そこで一体何がオレ達を待っているのだろうか。

## フランスへ行こう

「……着いたか」

「みたいですわね」

目を開けると、オレ達はコフィンの中ではなくて大空広がる高原のど真ん中に立っていた。

隣には英霊の姿になったマシユと、いつもの格好に戻っている藤丸。

そして、オレ達が契約したサーヴァント達も一緒にいる。

勿論、オレの格好も何時もの白衣&スカートな姿に戻っていた。

やっぱ、この格好が一番落ち着くや。男としてどうかとは思うけど。

「ちゃんと無事に転移が出来てなによりです」

「前は完全に事故による転移だったもんな。けど、今回はコフィンを使っただけで正常なレイシフト。身体的にも問題は無い。マシユ、藤丸。お前達はどうか？」

「私も問題はありません」

「こっちも大丈夫だよ、もっちー」

「よし」

デミ・サーヴァントになったマシユはともかく、藤丸はレイシフトが高い事を除けば完全なド素人だからな。

何か異常があればすぐに把握しておかないといけない。

「嬢ちゃんよ。ここがレイシフトした先の時代…なんだよな?」

「その筈だ。風景自体は至って普通だがな」

「そのようだな。この場では、ここが我々の目的とした場所なのかどうか、判断のしようが無い」

「その辺りは、カルデアと通信できれば確認出来るだろう。通信機は……っと」

白衣のポケットに入れてたよな…あった。

けど、顔を下に向けた途端、妙に覚えのある重みを感じたような……。



「…鞠絵。貴方の頭にフォウが乗っていますが…」

「あつ!? 本当だ! もつちーの頭にフォウ君が乗ってるっ!? なん  
でっ!」

「もしかして、博士のコフィンに潜り込んできたんですか?」

「フォウ…:ンキユー…:キヤウウ…:」

「正解だよ。オレも気が付いたのはカウントダウンが終わる直前だったんだけどな。それまでずっとコフィンの中で気配を消してやがったんだ。全く…:おかしな所で巧妙な奴だよ」

「フォウツ! フォウウ!」

なに? これぐらいは朝飯前だつて?

こいつ…:反省する気は全く無いな…:。

「面妖な事もあるものだ。だが、大丈夫なのか?」

「見た限りではフォウさんに異常は見当たりません。帰還に関しても、博士に固定されている筈ですから、我々が帰還すれば自動的に一緒に戻る事が出来ます」

「それは重畳。こやつだけこの時代に置き去りというのは、それはそれで後味が悪い故な」

佐々木小次郎…:意外と動物好きだったのか?

こいつにそんな逸話つてあったかな?

いや、こいつはオリジナルの佐々木小次郎とは似て非なる存在だから、それは全く関係ないか。

「こうして腕に着けて…:つと。よし、これでいつでも通信が出来…:」

『よし! ちゃんと回線が繋がったぞ! 少し画像は粗いけど、映像も通るようになった!』

…:こつちがする前に向こうから通信してきやがった。

少しは空気を読めよな…:ったく。

『博士! 立香ちゃん! マシユ! そつちは大丈夫かいっ!』

「ああ。三人共、無事にレイシフト完了してる。ちゃんとサーバーアン  
ト達も一緒だ」

『それはよかった!』

「それでな、一応念の為に今いる場所の座標の確認を頼みたいんだが」

『了解だ！ 任せてくれ…って、うわあっ!? 所長っ!? ダ・ヴィンチっ!? ライダーもっ!?』

あれ? なんか急に映像からロマニが消えた。

かと思ったら、今度はオルガとダ・ヴィンチとメドゥーサが並んで登場してきたし。

『先生! ご無事ですかッ!? お怪我はありませんかッ!?』

『落ち着いてくださいオルガ。マスター達ならば大丈夫のようですよ?』

『ほ…ほんと? 本当に大丈夫なんですか?』

『あのマスターが、そう簡単に怪我なんてするもんか。ね?』

『おう。オレならだいじょぶだよ。だから落ち着けて』

こいつら…完全にキャラ崩壊してないか? 特にメドゥーサ。

「なあ…アーチャー」

「なんだね?」

「ライダーの奴って、あんなキャラだったか?」

「私の記憶が正しければ、もう少し知的で冷静な女性だったと思うが…」

「だよな……」

え? そうだったの?

オレから見たアイツは、見た目に反して面白い奴って印象が強いんだけど。

『博士、確認完了だ。皆がいる場所は間違いなく、1431年のフランスだよ』

「そっか。それさえ聞ければ安心だ」

後は行動あるのみ…なんだけど……。

「こーゆー時って、まずは街とかに行つて情報収集するのが基本だよね」

「完全にゲーム脳だな」

「えへへ……」

「褒めてねえし。けど、藤丸が言ってる事は正しい。この時代の異変に関して調べるにしても、まずは拠点が無い事には始まらない。つて

…メデイア？ さつきからずつと黙ってるけど、一体どうしたんだ？」

「上…というよりは、空を見上げているようですが……」

珍しく、メデイアはいつも被っているフードを取ってから、目を見開いて空を見つめていた。

「ねえ…マスター…あれは何かしら…？」

「あれ？」

メデイアが空を指差すので、全員でその先を見てみる。

そこには、普通の空には絶対に存在しない筈のものがあつた。

「なに…アレ……」

「光の輪…のようにも見えますが……」

「輪つてよりは、衛星軌道上に展開している何らかの魔術式みたいに見えるな…」

「マスターにもそう見えるのね。私も同意見よ」

「メデイアも…？」

「余りにも広大過ぎて分析も何もあつたもんじゃないけど、アレが普通の代物じゃない事だけは確かね」

「ああ……あれ程に巨大な術式、常識的に考えても普通では有り得ない。展開するだけでも膨大な魔力を消費し、更にそれを維持し続けるとなれば……」

『人一人だけの魔力量では絶対に不可能。仮に博士クラスの魔術師が沢山いたとしても難しい筈だ。となると……』

「十中八九、特異点化した影響と見るべきだろうな。オレの記憶が正しければ、百年戦争中にフランスでこんな現象が起きたって記録は無い」

『そうでしょうね……。ロマニ、アレに関してはこちらで解析するわよ。いいわね？』

『了解だ。博士たちは現地の調査に専念してくれ。頼んだよ』

「おう。頼まれた。ダ・ヴィンチ」

『なんだい？』

「そのポニテ野郎が無茶し過ぎないように見張っててくれ」

『はいよ。任せてくれたまえ』

『あれ？ ボクってそんなに信用無い？』

『え？ 寧ろ、なんであると思ってたの？』

『それはちよつと酷くないかいッ!?』

いいのいいの。これぐらいの調子の方がリラックスできるから。

『よし。まずは霊脈を探すぞ。それを見つけない事には召喚サークルの設置も出来ないからな。その後に周囲を探索し、現地の人間と接触できる場所を探して情報収集だ』

『やるべき事は多いが、一つ一つ地道にこなしていく他あるまい』

『アーチャーの言う通りだ。てなわけで、まずはここから移動するぞ。全てはそれからだ』

現在、オレ達はどの方角に何があるかも正しく分かっていない状況だ。

なので、まずは適当に歩いてみる事に。

念の為にサーヴァントの皆には霊体化をして貰っている。

けど、なんでかアルトリアだけが頑なにそれを拒否してきたので、仕方なく彼女だけ実体化した状態で一緒にいる事に。

「しっかし…のどかな場所だよなあ……」

「そうですね。とても、戦争をしているとは思えない穏やかさです」

「こんな風景を見ると、無性にピクニックとか行きたくなるよね。

勿論、もっちーとエミヤさんのお弁当付きで」

『ピクニックか…このような状況でなければ悪くないだろうな』

「オレは…ピクニックよりもフィールドワークがしたいなあ…」

「「え？」」

おい…なんだその目は。

別に変な事なんて言っていないだろ。

『出たね。博士のフィールドワーク好きが』

『そう言えば、時計塔で講師をしていた時も、よく先生は皆を連れて色々な場所にフィールドワークをしに行ってたわね』

『博士は緩急が非常に激しいんだよね。だらける時は梃子でも動かないのに、自ら行動する時は何をしても止められない』

「なんとなく、鞠絵が天才と言われる所以の一端を垣間見た気がします」

暇な時があれば、藤丸やマシユを連れてフィールドワークに行ってみたいな。

特に、マシユには辛い思いをさせてばかりだったから、色んな場所を見て色んな事を学んでほしい。

…こんな事を考えるようになるとは、オレも歳をとった証拠かな？

「……マスター。少し止まってくれ」

「どうした、エミヤ？」

いきなり、エミヤが霊体化を解いてオレ達の前に右腕を上げて止まるように言ってきた。

「まだ遥か遠くに位置しているが、集団の人影が見えた。これは…フランス軍の部隊のようだが…どうする？ 接触してみるか？」

「軍の人間か……」

ある意味、情報源としては最も適してはいる。

けど、素直にこちらの話を聞いてくれるかは疑問だな。

幾ら休戦時期とはいえ、戦争中であることには違いないんだ。

恐らく、相前に神経を張りつめてピリピリしているだろう。

「だ…大丈夫かな…？」

「同じ人間です。ちゃんと話し合えば平和的に解決できますよ」

(だと…いいけどな)

マシユは悪い意味で世間知らずだからな。

まだ『人間の悪意』つてのをよく知らない。

それが仇にならなきゃいいんだけど……。

「徐々に近づいてくるぞ。そろそろどうするか決めた方がいい」

「はあ…仕方がない。まずは話をしない事には行動の指針すら決めようが無いんだ。オレから話しかけてみるよ」

「マスターがか？」

「フランス語ぐらいなら普通に話せる」

「……バイリンガルなのか？」

「他の言語も色々と勉強してるよ。まあ、任せとけて」

少数だと却って舐められると判断して、サーヴァント達の霊体化を解除してから進むことに。

そこまで急がず、あくまで普通の歩行速度で進むと、20分程度でフランス軍の部隊に接触した。

『済まない。我々は故あって旅をしている者なのだが、少し貴方達に伺いたい事が……』

「ヒイツ!? て……て……て……」

な……なんだ? 猛烈に嫌な予感がする……。

「敵襲——つ!!」

「ちよ……ちよつと待て! なんでそうなるんだっ!? オレ達は普通に話を聞きたいだけで……」

なんて言ってる間に軍の連中に取り囲まれてしまった!

幾らなんでも神経質すぎるだろ! マジでどうなってるんだよツ

!?

『博士、少し手が空いたから様子を見に来たよ……って、なんで少し目を離れた隙に謎の武装集団に取り込まれてるのツ!?』

「それはこっちが聞きたいわ!」

何がどうしてこうなったっ!?

別にそこまで変な事は言っていないよなっ!? よなっ!?

「マスター。こうなった以上は戦闘回避は不可能だろう。指示を頼む」

「まあ……しゃーねーよな!」

「ふっ……よもや、初陣が異国の精鋭とはな……!」

エミヤとクーと小次郎は完全にやる気になってるし。

特に後の二人はめっちゃ目がギラついてるし!

『と……とりあえず落ち着いてくれ! まず、その世界は現在、隔絶されたに等しい場所だ。仮に何が起こってもタイムパラボックス的な事は起きたりはしないから、ここで戦闘をしても問題は無いんだけど……』

「お互いにやる気なってるからなあ……」

『こうなった以上、ボク自慢の小粋なジョークを言っても無駄なんだ

ろうなあ…』

「ハツハツハ。ライダー、罰としてロマニの毛根を10本抜いて」

『分かりました。えいっ』

『ギャ————ッ!? ボクの貴重な毛根たちがあああああつ!?』  
この状況でギャグとか言ったら、それこそマジで不審人物になるだろうが。

それぐらい普通に考え着けアホ!!

「どこからか軽薄そうな悲鳴が聞こえてきたぞ! 総員構え! この者達は怪しすぎる!!」

「:ダ・ヴィンチ。ロマニの顔にボディビルダーの体をくつつけたアイコラを作って、それを大量コピーしてからカルデア中にばら撒け」

『もうやってまくす♡』

『やああああああめえええええええええええええええええつ!!!』

「ヒ…ヒデエ……」

「マスターの逆鱗に触れるとは、こういう事なのだな……」

「くわばら、くわばら。幼き女子の身にして恐ろしい事よ」

そこまでドン引きされる程の事?

そして、いい加減に小次郎はオレの事を女扱いするな。

ちゃんと男だつて説明したよね?

「あら、まだまだ生温いわ。私なら、其処から更に秘蔵の本を目の前で燃やすとかするわね」

『それだけはご勘弁を〜!!』

さ…流石は魔女と言われただけはある…。

まさか、オレと同じ思考に至るとは…。

「ああ…お前ら。一応、殺したりはするなよ? 軍隊とはいえ、こい

つらは貴重な第一村人だ。自ら情報源を断つような愚行だけは回避しないとな。てなわけで、峰打ちでよろしく」

「いや…俺は槍なんだけど」

「そこは頑張つて工夫してください」

「私は? キャスタークラスに峰打ちは不可能じゃなくて?」

「んじや、火力を抑えるつてことで。エコに行こうぜ。エコに」

「魔術のエコライフね。偶にはいいかもね」

魔術の世界もエコの時代が到来してるんだよ…多分ね。

「マシユも、出来る限り重傷とか負わせるなよ？ 精々、骨折程度で勘弁してやれ」

「了解です！ 任せてください！」

「いやいやいや！ 骨折も十分に重傷じゃないのツ!？」

『藤丸…気にした負けよ』

『『うんうん』』

「え——————つ!？」

はい、そんな訳だから…レイシフト先での初戦闘…行ってみよう！



峰打ちの定義ってなんだっけ？

「総員…かかれえええええっ!!」

なんか妙な誤解（？）によって戦闘をする羽目になったオレ達。けれど、こいつらは敵じゃない。

単なる相互理解が出来なかったが故の衝突だ。

ここで変に死人を出せば、ここでの活動が困難になってくる。

なので、可能な限り手加減をして戦闘をすることに。

「え…えつと…小次郎さん！ クーさん！ あんましやりすぎないようにね！」

「わーってるって！ 任せときな、マスター！」

「峰打ちか。出来るかどうかは分からんが、やれるだけやってみよう」

おうおう。藤丸の奴、早速マスターらしくサーヴァントに指示を出してるな。

最初はそれぐらいの大雑把なぐらいで丁度いいんだよ。

後は向こうが自己判断でなんとかしてくれるさ。

「よし。そんじや、こっちも迎え撃つぞ。セイバーは当然だけど手加減してやれよ。お前が本気出したら、無手でも遙か遠くにぶっ飛ばしそっだ」

「分かっていますとも。お任せください！」

「アーチャーも頼むぞ。器用なお前さんなら、弓矢で相手の武器だけを狙い撃てたりも出来るんじゃないのか？」

「やってやれない事はないが…私としては、今回の場合は斬り込んだ方が楽なのだな……」

「なら、そっちで頼むわ。キャスターは……」

「魔術で後方支援でしょ？ 任せておいて。場合によっては竜牙兵を召喚して手数を増やすわ」

「…お前ってマジで頼りになるわ」

「そ…そう？」

こっちが言いたい事を全部先に言ってくれた。

やっぱし、キャスターのサーヴァントってのは総じて頭がいいのか

ね。

「マシユは……あんまし力を入れすぎるなよ？ そんなデカイ盾で殴られたら普通に洒落にならんからな」

「了解です！ 頑張つて峰打ちします！」

「いや…盾に峰は無いからね…？」

特訓だけじゃなく、マシユにも勉強会は必要かもしれない…。

全てはこの時代の聖杯を回収してからだけどな。

「来るぞ！ 準備はいいな！」

「皆、頑張つて！」

けどまあ、生身の人間相手なら、オレも普通に前に出ても問題無いかな？

久し振りに思い切り暴れたいし。

適度な運動は大事だよな？ うん。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「このおおっ！」

「遅いんだよ！ そらあっ！」

「ぐほっ!？」

ランサー特有の敏捷性を最大限に発揮し、クー・フリーンは槍を器用に振り回しながら、柄の部分で兵士たちを殴っている。

あれもあれで相当に痛そうだけど、必殺の一撃を放つよりはずっとマシだ。

「おいおい……この程度でもう終わりか？」

「は……早過ぎる……！」

「なんなのだ……この槍使いは……！」

伝説に名を残す大英雄だよ。

少なくとも、並の連中じゃ手も足も出ないレベルのな。

「手加減も楽ではないな……ふん！」

「あ……あんな距離から弓矢で武器だけを狙っているっ!？」

「そんな馬鹿なっ!？ この乱戦の中で、そんな芸当が出来るなどっ!？」

なんだかんだ言っつて、ちゃっかりとやってくれてるじゃないか。

前の聖杯戦争の時もそうだったけど、アーチャーのクラスって普通にチートだよな。

目が良すぎなんだよ。マサイ族も真っ青だわ。

「なあっ!？」

「い……一瞬で……だと……っ!？」

「また……つまらぬ物を斬ってしまった」

小次郎と数瞬だけ交差した兵士たちの、鎧と服だけが粉微塵に斬り裂かれ、同時に峰打ちをしていたのか、バツタリと地面に倒れる。

「……小次郎。お前……もしかして、ルパン三世でも見てた？」

「休憩時にマスターに勧められてな」

「作品は？」

「テレビアニメの第4部を数話と、後はカリオストロの城。戻ったら今度は『燃えろ！ 斬鉄剣！』と『くたばれノストラダムス！』を見る予定だ」

「そ……そっか……」

伝説の剣豪がマツハで現代に染まっていつてる……。

藤丸……お前、ある意味でマスターとしての才能あるわ。

「そう言えば、私の剣には『峰』なんて無かったんです。仕方ありません、ここは無手で戦いますか」

「なんだとっ!？」

あ。なんかアルトリアの武器使わない宣言が癪に障ったみたい。けれど、実際問題、エクスカリバーで峰打ちとか不可能だよな。幾ら透明にしているとはいえ、切れ味が下がるわけじゃないし。

寧ろ、風を纏っているから、軽く触れただけでお空に向かって飛んで行っちゃうのでは？

「必殺！ 円卓パUNCHー！」

「それただのパンチー！」

「でも籠手で殴ってるからめっちゃ痛いー！」

「だろうな。普通に威力倍増だわ。」

「なんか車田落ちしてるし。」

「円卓スイーング!!」

「円卓関係ねえー!!」

「円卓バックドロップー!!」

「ギャッッ!」

「円卓固めー！ 円卓逆海老固めー！ 円卓ジャイアントスイン

グー!!」

「助けてー!!」

……前の聖杯戦争の時に、息抜きに冬木市に興行で来ていたプロレス団体の試合を見せた事……まだ覚えてたりするのか？

「そーいや、カルデアにいた時もライブラリでプロレスの試合を探してたっけ……？」

「な……なんだっ!? いきなり地面から骸骨の化け物が出現したっ!?」

「まさか、あの女が呼び出したのかッ!」

「魔術師……いや、魔女かッ!」

「むっ……!」

「あ……それ禁句……もっちゃー知らにゃい。」

「竜牙兵。そのの兵士にジャパニーズ・レッグロール・クラッチ・ホルドしなさい」

「ぎやあああああああああああああゝっ!! ギブギブギブギブ! 変なこと言ってますんませんでしたあゝ!!」

「なんでメディアまでプロレス技やねん。」

「しかも、実際に技をやっているのが竜牙兵だから、絵面がめっちゃシユールなんですけど。」

「……こいつは、さっき隊長に話しかけてきた幼女かっ!」

「誰が幼女じゃ…ボケがあああああああつ!!」

言つたな…? オレに対しても禁句を言いやがったなっ!?

身内に言われるのは我慢できるけど、見ず知らずの他人に言われるのはなんか腹立つんだよ!!

てなわけで、こいつには怒りの鉄拳をお見舞いしてやる!

「唸れ鉄拳! ロケットパンチ!!」

ゴチ——ン!!!

二の腕辺りから分離をした右の義手が飛んで行き、俺の前にいた兵士の股間にダイレクトヒット!

男ならば最大級に痛かろう!

「『痛———』」

なんでエミヤとクーと小次郎とモニター越しのロマニまで痛がるっ!?

お前達には何にもしてないだろうが!

「さ…流石は嬢ちゃんだ…:…なんて残酷な攻撃をしやがる…:…」

「今後…マスターだけは絶対に怒らせないようにしよう…:…」

そこの赤青コンビは何を意気投合してるねん。

「で、マシユの方はどうしてるかな…:…つてっ!?!」

いい汗掻いたって感じの顔をしたマシユの隣に、山のように積み重なって気絶をしている兵士たちがいた。

どうやら、藤丸に近づいてきた連中を積極的に倒したらしいが…:…。

「博士く! せんぱく! こっちは片付きましたく!」

「マシユすく!」

あの大人しかったマシユが、こんなにもアグレッシブになって…:…。

感動していいのか、それとも呆ればいいのか…:…。

「こ…こいつらは強すぎる! 総員撤退! 撤退——!!」

やっと引いてくれたか。

数はこっちの方が少ないとはいえ、質の方じゃ圧倒的に上回っているからな。

とつとと逃げてくれた方が、こつちとしても助かるんだよな。

「マスター。あの兵士たちは逃がしても良かったのかしら？」

「別に構いやしないよ。あいつ等を倒す事が目的じゃないんだし」

「それもそうだな。寧ろ、逃がした方が都合がいいかもしれん」

「そーゆーこつた」

皆はオレやエミヤが言いたい事を理解してくれたようだが、やっぱり藤丸だけは頭の上にクエスチョンマークを浮かべている。

「逃げるって事は、どこかに拠点となる場所があるって事だ。そこに行つて誤解を解き、その上で改めて情報収集をすればいい」

「恐らくは皆とかがだろうな。どうする嬢ちゃん？ 今から急いで追い駆けるか？」

「追い駆けるはするが、そこまで急ぐ必要はないだろう。足跡は思いつ切り残つてるし、この天気ならば雨とかで消される心配も無い」

よつぽど慌ててたんだろうな。

本来ならば殿が足跡を消したりするもんだが。

『ボクも博士に賛成だ。あんまり急いで追い駆けて、却つて相手に不安を植え付ける必要も無いしね』

『先生、お願いできますか？』

「任せとけ」

『一応、こちらでも兵士たちが逃げた場所を追跡してるから、もしも分からなくなつたら、いつでも言つてくれ』

「サンキュ、ダ・ヴィンチ」

頼りになる仲間達の声を聞きつつ、オレ達は兵士たちが残した足跡を見ながら歩いていくことにした。

今度はもつと流暢に話しかけるべきかな？

・  
・  
・  
・  
・  
・

兵士たちの拠点と思われる砦には、少し歩いただけで辿り着くことが出来た。

うん…出来たのはいいんだけど…。

「なんだよ…こいつは…。」

「外壁は無事のようにだが、中はかなり損傷している。最早、これは砦とは呼べんな」

到着した砦は見るも無残な姿になっていた。

軽く除いただけでも、多数の負傷兵が横たわっている。

「博士…これは…。」

「ああ…余りにもおかしすぎる」

「どーゆーこと?」

「この年…1431年は、フランス側のシャルル七世がイギリス側に付いたフィリップ三世と休戦条約を結んだ年の筈だ。そりゃ、それ際に多少の小競り合いぐらいはあったかもしれないけど…。」

「ここまで酷い状況には決してならない筈です」

「どうにもききな臭いわね…。」

オレもメデイアの意見に同感。

どうも、この砦自体に違和感が拭えないというか…。

外側から砦を観察していると、さつき戦闘をした兵士の一人と思われる男が、こっちの姿をのぞき窓から見つけて悲鳴を上げた。

「ひ…ひいつ!? 我等の事を追い駆けてきたのかっ!」

「それは誤解だ。まずは武器を置いて話を聞いてくれ」

「は…話…?」

「そうだ。オレたちは決して怪しい者じゃない。ちよつとした旅の一団なんだ」

「た…旅の一団…?」

「では…あの強さは…。」

「以前に兵士をやっていた連中もいるからだよ。あと、訳あつて魔術

の勉強をしていた者もいるが、貴公らに危害は絶対に加えない。実際、さつきだつて死人は一人も出てないだろう?」

「い…言われてみれば確かに……」

「敵…じゃないのか……?」

ようやく武器を収めてくれたか…。

警戒する気持ちは分かるけど、口よりも先に手が出るのは兵士としてどうかと思うぞ?」

「なんか…思ったよりも簡単に信用してくれたね?」

「さつきの戦闘で頭でも冷えたのであろう」

かもな。あそこまで力の差を見せつけられれば、嫌でも冷静になるか。

「もしくは、戦う気力が無い程に疲弊しきっているか…ね」

「どっちでもいいじゃねえか。取り敢えずは情報収集と洒落込もうぜ」

ランサーの言う通りだ。

まずは、この兵士に色々話を聞いてみよう。

「なあ、この砦のこの惨状はどうなってるんだ? まさか、シャルル七世が休戦条約を結ばなかったのか?」

「シャルル王? 休戦条約? もしかして知らないのか? お嬢ちゃん」

「知らないって何を?」

「王は死んでしまったよ。魔女の炎に焼かれてな」

「なん…だと…っ!」

シャルル七世が死んだ…?

しかも、魔女の炎って……。

「おいおい……いきなり怪しくなってきたやがってないか?」

「かの王が死去しただと…? まだ死すべき筈でない人物が死んだということは……」

「明らかに、この時代が『特異点化』した影響でしょうね……」

…まだ状況が不透明だ。もっと話を聞かないと。

「死んだってのはどういう事だ? 魔女の炎ってのはなんだ?」



「…そうだな。死んだというよりは、正確には『殺された』と表現した方が正しいかもしれない」

「殺されたというのは…誰にですか？」

『ジャンヌ・ダルク』にだよ。救国の聖女が『竜の魔女』となって黄泉の世界から戻って来たんだ」

「ジャンヌ…ダルク…！」

心の底で、この時代における最大の協力者の一人として考えていた人物。

あの人物ならば、世界の抑止力として英霊として、この時代に召喚されていても不思議じゃないから。

それなのに……！

(まさか…この時代におけるオレ達の敵はジャンヌ・ダルクなのか…!?)

まだ情報が少なすぎる…ここで断定をするのは余りにも早計だ。

もつと…もつと情報を手に入れないと……！

「も…もつちー…ジャンヌ・ダルクって、私でも知ってる人だよ？ その人が魔女…なの…？」

「さあな…まだ断言は出来ないよ……」

これが特異点探索か…。

こりや…想像以上にハードみたいだな…。

「イングランド軍はとつくの昔に撤退を開始した。けれど、俺達は一休どこに逃げればいいんだ？ この国こそが俺達の故郷なのに…くそっ……本当にどうする事も出来ないんだ…！」

「兵士さん……」

ジャンヌ・ダルク…か。

火炙りになって死んだはずの人間が蘇るなんて有り得るのか？

ネクロマンサーの連中でも、死人を蘇らせるには、綺麗な状態の死体が必要不可欠なのに……。

それとも、まさか…ジャンヌはもしかして……。

「き…来たっ！ また奴らが来たぞ!!」

「あ？ おいお前…『奴等』ってのは一体…って」

「ほう……？」

「あらあら……」

「ふっ……」

皆が後ろを振り向くと、そこにはゾロゾロと見た事のあるような連中が。

『皆、注意してくれ！ 魔力反応多数：あれは少量の魔力による人体を用いた使い魔……骸骨兵だ！』

「それぐらい知ってるわよ。私の竜牙兵の人骨バージョンでしょ？」

『そ……そういえば、そっちには魔術のエキスパートがいるんだった……』

またロマニが落ち込んでしまった。

こりや、明日の朝の枕元には大量の抜け毛確定だな。

「今度は人間相手じゃないからな。思う存分に暴れていいぞ、お前達！！」

「おう！ さっきので実はフラストレーションが溜まってたんだよな！」

「ようやくサーヴァントらしい仕事が出来るといものか」

「今度こそ剣を使って倒してみせましょう！」

「少しは骨がありそうな連中が出てきたか。骸骨兵だけに」

「手加減って苦手だから、これで心置きなく戦えるわね」

皆揃ってやる気満々ですこと。

そして、小次郎は後で毛根三本抜くからな。

「マシユも。特訓の成果とやらを見せてくれ」

「はい！ 任せてください博士！ マスター！ 指示をお願いします！」

「よおしくし！ 私ももっちーの前でかっこいいところを見せるぞ！」

藤丸もいい目をするようになったじやないか。

こりや、こっちも大人として負けてられないな！